

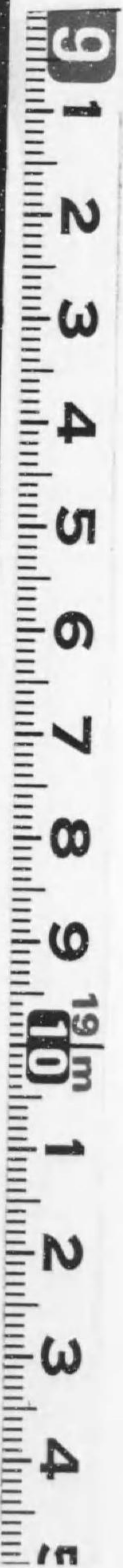


九州

右より左へ

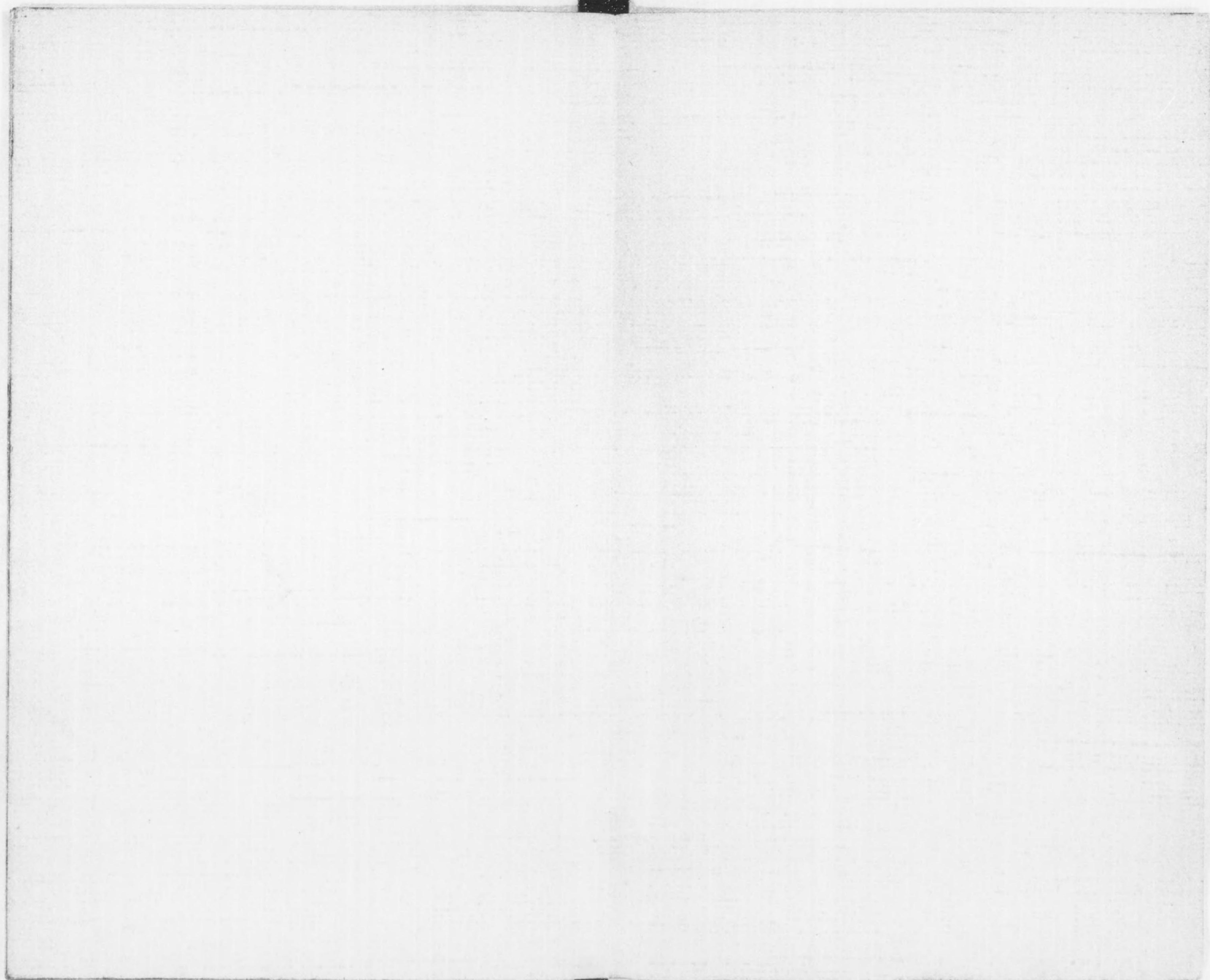


特

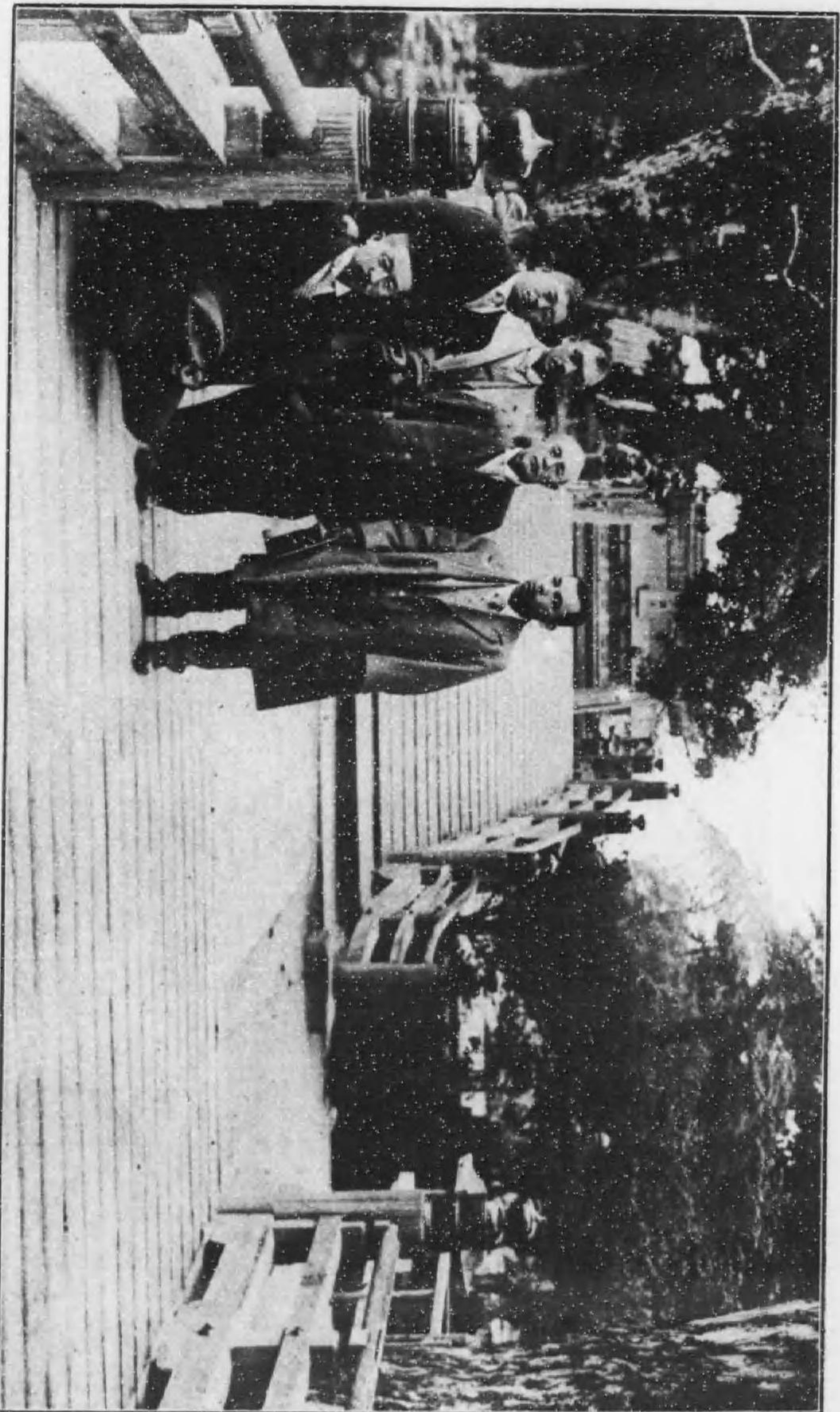


始





特 114  
230



てに前宮満天府宰太紫筑  
行一の良五木鈴・吉定井櫻・郎太徳島中・郎次爲波藤・學一田太リよ右

序



櫻井兄『九州を右より左へ』の著書編纂に當り予に序文を求めらる  
 然れども元來予は薄學非才其の器に非らざれば一旦之を辭退する  
 と雖も亦顧みれば予は此の羈旅の同伴者にして且つ年齒の長たり  
 き故に聊か是れが責を感せざる可からず依つて茲に寸章を敘しも  
 以て序と爲す、  
 抑も旅行の趣味は人に依り所に依り時に依りて主觀的に異な  
 るものなれども客觀的には其の歸着する所一なり即ち大自然の風  
 に接し其の地方の人情風俗言語等に親しみ或ひは歴史的傳説に興  
 じ或ひは地學を研め或ひは文化の消長を知る等其の妙趣は津々  
 して盡す從つて其の體得する所悉く善ならざるはなし實際今回の  
 九州旅行が予等に何程の感化慰安を與へたるかその印象の深く博  
 きことは今更是を絮説するの要なからん、今兄の編纂する所を觀る

15.12.24  
 内交

にその考證該博、記事精緻、加ふるに一家の卓見を披瀝し美辭名文を  
 連続し精華絢爛を極め讀むて倦怠を知らず實に近來の好著書なり  
 猶兄が此の旅行中下顎骨膜炎に罹り苦惱中にも係らず克く病苦に  
 堪へつゝ此の著を草せし元氣と精力とは實に予をして驚嘆せしむ  
 る所なり恐らくはこの一卷を手にする者その由を知らば思ひ半に  
 過ぐるものあらむ。

大正十五年十二月三日

藤 波 爲 次 郎

先哲貝原益軒先生は、常に醫人を誡めて曰く「醫を業とするものは  
 須らく業務に専念にして他意ある可からず」と、正に是醫家の服膺  
 す可き金言にして千載不磨の教訓なりと謂ふ可し。

凡そ人間生活に於て最も幸福なる者は、己れの職業を以て直に娛  
 樂となし得る種の人ならざる可からず、斯の如ければ即ち健康地位  
 財政等あらゆる方面に於て必ず成功者たり得可く、殊に醫家に於て  
 然りとなす、之に反し醫家にして投機を好み、鬪碁、將碁に耽けり、又は  
 風流韻事に遊び、或は折花攀柳を事とするが如きは、必ず日進月歩新  
 學說の研究を疎外し、遂には一庸醫と成り終りぬ可き、火を見るより  
 明かなりとす。

余、當地に父祖の業を繼承して早くも十年に及ぶ、其間、同業各位の  
 日常生活を觀るに、何れも業務に専心にして、敢て他意ある者なく、着  
 々成功の域に、進まれつゝあるを知り、内に願みて誠に慚愧に耐えざ  
 るものあるなり趣味と云ひ、娛樂と云ふも、一度其真意を誤れば、人間

生活を毒するの害蓋し計る可からず、余等愚鈍、様々の名を借りて一日の安きを盗み、業務を放棄して興樂を追ふ事の如何ばかり久しかりしか、一度同業者間に、行樂の企あれば、余の姿を一行に見出さざる事なきを例とせしが、是に亦最も奇とす可きは、櫻井枯骨庵主氏の影必ず形に伴ふが如く一行中に存する事なりとす、余、氏を顧みて時に嘆じて曰く、『吾輩の行動は正に享樂主義にして醫家の常道を逸するものにあらざるか』と、氏常に瀾然として曰ふ、『老齡手足不自由と成れば門を出てざる可し、齒牙悉く脱落せば日々粥を啜り居れば足る、健脚を有する間恣に旅行し、齒牙完全なる間美食を事とせんのみ』と、宜なる哉、本年春五月、九州周遊の事同業藤波老先生に依つて決行せられむとするや、兼て盟約されし同業概ね中止せしに、氏忽然として臨時加盟あり、十數日を費して遂に九州一巡の壯舉を敢行せられしなり。

本書は即ち以上九州旅行の紀行に外ならずとするも、著者の卓拔な

る識見と、明敏なる觀察力とを以て、微に入り細に亘り、論じ去り記し盡して遺憾なきは、一般記行文と自ら其撰を異にするものあるを知る、惜む可し、氏旅行中、下顎骨々膜炎に罹り、醫療、藥餌を事とし、苦惱も甚だしかりしかば、視察意の如くならず、恰も猛牛の角を矯められしが如きは、誠に遺憾の極みと云ふ可し。

惟ふに本書は單なる紀行文にあらずして、山あれば山を論じ、川有れば川を説き、海に漁業に就而記すれば丘に農業を述べ、地方産業自治体施設、文化交通、美術工藝、東西史談に亘り、氏獨特の蘊蓄を傾け盡したる一大著述にして、讀者は之に依りて居ながらにして九州に遊ぶの感ある可く、著者の人格並に識見の一端を窺ふを得可きを信ず、余一行に伍したるの故を以て、卷頭を瀆すの榮譽を擔はしめらる、不肖を省みず、馱文を草して敢て序となす。

大正十五年丙寅年師走

曲輪町四番地にて

## 出林堂迂史東山記

### 九州を右より左へに序す

大正丙寅五月中旬より約二週日の間同好五名九州各地に遊ぶ。爾來櫻井兄には繁忙なる院務の餘暇を利用して銳意本書の完成に努められ、頃日稿成つて予に其序文を求めらる、因つて之を通覽するに、其結構なるに驚く、先づ車窓に送迎の山容水態の景名所舊跡の史實遊覽せる都市に就て、其由緒を説き交通を述べ産業を叙し之に兄一流の忌憚なき批判感想を披瀝せられ殊に纏綿盡きざる旅行情緒を最も赤裸々に明快なる筆致を以て微に入り細を穿ちて餘蘊なく實に妙味横溢せる一大快著たるを失はず。終りに臨み兄の不撓の努力に對し衷心より感謝の意を表するものなり

大正十五年秋

中島徳太郎

## 叙

現代に於ける旅行記は、歐米とか南洋とか或は蒙古探見支那大陸中央亞細亞若くは亞佛利加濠洲と謂つた様な記事の見ゆる其中に眇たる一九州の然かも内地の旅日記を綴ると云ふも彼れは彼れ、是れは是れ。

内地の一部分も私共の試みた事を記して後年徒然の餘り記憶をたどり、其思ひ出を見るのも當時旅行を共にせし友人の語り草にもと筆のまに／＼書き記せしことなれば其の積りにて讀まれん事を思ふに私共一行は刀圭の業を營み世事と謂ふか俗務に携はると謂ふかは知らざれ共、日夜其業に追はれ一片浩然の氣を養ふことも出來ず、隨て時世に迂遠なるを如何せん。

冒頭に謂ふ様に世界的の旅行は時間と經濟が許さるる所である今次の旅行なりとも成さざるには勝ると信じ、同氣相集り旅は道連



れ世は情けを現實し著者は此旅行中不幸にも下顎の疾患に艱み旅は道連れ世は情と云ふ事を具さに體驗した。故に文筆も意の儘に動かず加ふるに淺膚なる學識、惜れざる筆、世の人をして到底満足を得せしめざるを羞づ。僅かに行程を記して自己を慰め更に感ずる所を綴るのみ、若し夫れ紀念誌とすることを得ば幸甚なりと云爾

大正十五年秋十月中游

篇者 枯骨庵主人

櫻井定吉識

## 例言

私が何故に九州旅行記を、九州を右より左へと名付けたかと謂ふと、日本の人は特に生れ付凡ての事をなすに右より左に行く、筆を以て字を書くにも、仕事をするにも注意して見ると悉く右より先に行くのである。西洋の人は是とは正反對に左より右へと來る様だ、私共が特に撰んだ譯ではないが、今這の旅行が、九州は特に左様に感ぜらるゝ。

九州を右より左へを別ちて十卷となす

卷の一 前橋より下の關迄

卷の二 門司より博多、太宰府附近

卷の三 福岡より佐賀、大村を経て長崎へ

卷の四 長崎及び島原半島温泉ヶ嶽有明海を越へて熊本へ

卷の五 熊本の雨

卷の六 熊本より鹿兒島へ

卷の七 鹿兒島より日向宮崎へ

卷の八 日向より別府へ

卷の九 別府、宇佐、八幡、耶馬溪

卷の十 續篇として山陽より四國の一部

以上目次を十卷とし、内容として地理歴史風俗、人情感想、山水等を簡明に素通りの如何にも汽車旅行らしく、可成深入りせざる様一瀉千里で讀者之を繙とく時に必ずや其の幽靈の様な霞の様な取り止めなきに啞然とするであらふ。

けれど當時病骨を汽車に積んで九州下り迄耻晒しに出掛け、其勇氣と謂ふが愚鈍と謂ふかは識者の意に任せ、吾れ關せず焉と洒蛙々々して居る所が篇者枯骨庵の生命である。

私が此文を草するに當り、同好者藤波紫水、老鈴木東山、太田稟邦、中島徳山君の御教訓と御同情とを深く感謝する次第である。

## 九州を右より左へ (一)

櫻井枯骨庵主人

四季の内でも末春は日が永く氣候も溫和で遊ぶには最も適さわしい時である。

冬は寒く夏は暑し秋は物淋しく鹿の鳴く聲聞けばなど、如何にも感傷的だ、去りながら遊ぶ春には○式が無いと云ふも真らしむ。

私共の此の旅行計畫は久しい間の企て。是には盟主がある、私は企の始から誘ひがあつた。けれど業務柄其の時と都合で餘り早くから極めて置く譯にも行かなんだ。所が大正十五年の晩春の候。盟主は長らくの計畫を是非實行致したいからとの事を通じて來た。適ま本年は仙臺に關東々北醫師大會があり夫れに出席する考へもありしが。同じ月になり先年仙臺に大會のありし際。出席して、今度は第二回目だ、會遊の地に再び行くのも、會其物には行く必要はあるが。實は會よりは夫れを利用して東北の名所を探るべく會を利用する方が多いので、つまり同じ日時を費すならと。此所は一つ豫ての計畫でもあり勧誘を幸ひ、九州を旅行しようと云ふ氣にな

り同氣相語らひ、盟主藤波爲次郎翁鈴木五良君太田一學君中島徳太郎君と私都合五人て、九州落ちをする事となり。

五月十五日前橋驛を隨時出發。東京で落合ふ筈である、鈴木君は何か私用があるので、一足先に出掛けた、私等四人は十五日午後三時二十八分の上野行に乗る約束が出来、前橋驛に行けば已に中島氏先着次に私藤波老太田氏と驛構内で顔合せが済み、之が最初の顔合せである。中にも太田氏は妻子に見送られ、其人情の濃かさが如何にも美ましかつた。

乗車券は前日盟主より下の關迄直通の者を渡されてあつたから改めて買ふにも及ばず、時間が來ると其儘二等室に納まつた、見送人に分れて、汽車は鐵路を走り出した、是が門出の第一歩である、車窓より赤城の山に向ひ黙禮し、利根の流に送られる様な心持ちで、住なれし故郷を一時離れ、高崎で暫時停車し此處で方向轉換東南を指して進む新町神保原間は國境だ私共は毎度も馴染の道で改めて書く程の事もなく、車中雑談をかわしながら、ふと車窓より外面を見れば、武藏野の廣々とした、平坦な野原が見へ近年は雑木林も切り取られ開墾せられて、畑となり、田となり、段

々昔の面影がなくなり、武藏の中央になれば文化の度も進み農家の如きも養蠶の業益々發達し、桑園の此所彼所にあるのを見ても明らか事だ、只だ残念なのは、今朝だか、昨朝だか、霜に襲われし形跡あり、國産の一部を減ずるかと思へば、之が影響を受ける事も少なくはない、桑の嫩葉が霜に逢ふたのは茶殻を乾し付けたようにて此春の蠶に間に合はない、實に氣の毒だと談しながら車窓を眺めて居た。

田畑の間に松や杉の大木のある處が、昔ながらの村落である。

汽車の沿線で人家の多く立並びてあるのが驛に近い町々だが、東京へ近づく程繁華になり、大宮の鐵道工場は實に偉大だ殊に中仙道と東北本線の分岐點で驛の構内も大きい、斯うして今は中仙道の通路も交通機關を鐵道に奪はれつゝ何れの國道にもある宿場は淋しくなつた。思ひ起す彼の大正十二年九月一日の大震火災に帝都の灰燼になるや意外にも是等の人々は近郊の地に住居を構える者續出し、現在大宮以南の地は住宅地と化し、浦和から川口邊になると、堂々たる鐵筋コンクリートのユニオンビル、サイダ醸造所の大會社が建築せられ、鐵道沿線は全く面目を一新せられた事は周知の事實である。

此間車中では同行の太田君一大雄辯を振るわれ社會問題を説き、經世家を痛罵し或は審美論を説き談論風發車中の人をして煙に巻かせ少々私のお株をば横取りせられし感あり。

私は黙して語らず、否語れない、夫れは今まし太田君の大獅子吼は恰かも日蓮の再來ではなきかと疑がはれたのと、私は今回の擧より十日程前から齒齧骨炎に難やまされて、左下顎に腫脹を起し齒牙の動搖甚しく已に一二本の齒は拔去せられ、頰部一面に腫れ上り疼痛に堪へ難く一隅に閉口たれて居たので、片腫れ痛く、沈黙して聞いて苦笑したまでた。

私は平素餘りに悪口を云ひ氣焔も吐くので神は私をして何か雜言を謹ませる様に口を緘したのかも知れない。左すれば其の暗示に隨ふのが當然だ。

種々の事を聞きながら赤羽の鐵橋も渡り、復線工事を見ながら東京府下にはいり程なく上野驛に着いた。

道がは上野驛だ關東北も信越も皆な此所に吞吐せられるから其雜踏は今更云ふ迄もない。是れから高架電車て一と走り御徒町停留所て降りると松坂屋呉服店の裏手

に當たる場所に兼て豫約し置きたる飯島旅館がある。至極便利な宿屋ではあるが、高架電車と地上電車の交叉點なので其輪轆の音は絶えず耳に聞こえて、其うるさき事が一とつの缺點だ。

宿に着いた頃は已に暮れ、設けの室に入れば先着の鈴木君の行李が見へる、又室に年頃の禿頭の商人らしい人がぼつねんと座りこんで居るので。室が違がつたのではないかと怪しみつゝ座に就くと、此人は東京の或る洋服屋さんで、太田君が洋服を注文し置き、それを持參して一行の宿に来るを待ちつゝあるのだと知れた、一行は行李を運搬び入れ宿の番頭に鈴木君の先着し居る筈だと問へば、所用にて他出中と答へた、其内に茶を呑み一風呂済まし、晚餐前に私は本所の弟の店を訪問する積りの處、齒の苦痛に堪へねば、電話にて望遠鏡を借りたいから持參し呉れと依頼した、すると間もなく届けて呉れたので、鈴木君を待つて晚餐を致さんとするとき、電話にて鈴木氏は食事は済まして行くからと通じて來た、因て残りの四人で晚餐をなし、時間も早いから散歩に行く者もあるが私は例の苦痛であるから籠城して床の中へ行くことにした、其内に外出した者も歸り、少し遅れて鈴木氏も宿に歸る、一

行寢に就いたが眠れない、催眠薬を服して僅かに夢を結ぶかと思ふと窓外には旭が輝き渡り、今日の門出を導き祝ふて呉れたかの様である。

朝飯も済み勢揃も出来た、午前七時半には各々宿を出て東京驛に行き、鈴木君の配慮で急行券と寝臺券とを受取り、八時四十五分發一二等連結の特急下の關直行に乗車した。車臺を見れば第四號て室は一人宛であるのは、少しく贅澤の感なき能はずだ、是が當世紳士旅行とても云ふのか。

茲て兼て約束致して置いた衛生時報主幹の中村錠次郎君に通信を始めたのだ。

汽車は品川大森川崎鶴見を素通りして横濱へ停車した。茶や牛乳を購入し、車窓より見れば別仕立の汽車に王子製紙會社慰安會遠足と記してある。其中には男女職工らしい若者達が、種々の假裝をこらし、鳴り物入りかなどで盛んに賑やかして居る。盆踊りらしい手振足取りで一としきり踊り狂うて無愉快げに見へた。時に午前九時五分である。

汽笛一聲進行が始まり、東海道も平塚附近を進行中車窓に依り外面を見るも晩春の光景は若葉が軟かに照りのあるそして茂げつた小山と、已に熟れかゝつた麥隴も

黄ばみを持つている、幾つものかの驛を捨て、國府津附近になると北に山を望み南に海を磯なれ松に恰好よく、遠くより寄せ来る波は白泡となりて、砂に消へ、漸ばし眺むる内に何の遠慮もなく通り過ぎ、箱根下の山北に着いた。此驛の名物は鮎の鮓で有名だ東海道を上下するときは必ず此所で名物を買ふて舌鼓を打つに、今度は味の神より確く誠しめられたと云ふのではないが、齒痛の爲めに慾を斷たざるを得ないのは口惜しい。

汽車は山にかゝるので氣を吐くこと頻りなり。野も山も新緑で青葉の中に紫の色を混ぜたのは桐の花盛りで、其配合も自然にゆかしい。水の流も急で、岩を咬み、碎けて雪と消える風情も亦た一興である。

一行の中で鈴木君はよく眠る。他の者は何やら嘸をしながら、山峽より山頂に行く動搖に、そろ／＼居眠りが始まつた。然し夢を見る迄には行かない。

昔しならば、箱根八里は馬でも越すが、と云ふ馬子歌でも聞きながら、徒歩か乗物で、呑氣に通る、關所で手形はあるかどうかと、云われた事であらう。

此線路も墜道の崩れた事も、岩の落ちた事も、山の崩れて河をせき止めた、彼の

關東大震災をも考へずには通れない。富士紡績も其大災難にかゝりし工場だ。

今では全く復舊して、何等危惧のある様子もないやうだ、けれど、墜道の出入は餘り感心しない。車窓で見れば小山の富士製絲紡績會社は山の中とは云ひ鐵道の便利な所だけに、今や鐵筋コンクリートの大建築が幾棟となく、建て連ねられ、勞資協調で大に活動して居る。

今日は第三日曜などで、慰安會でもあるのか、景色のよい處に幔幕を張り、萬國旗を以て裝飾をなし、工男工女の運動會があつて、賑ふて居るのか見える。

汽車が靜かになつたと見れば、御殿場だ、富士も裾野丈けは見へるが、雲が多くて山頂は見へない、此所は山故か細霧がかゝり、五月雨の様で急に寒むくなり出した、雲間に海岸も見ゆる様になつたと思つたら、此處は沼津だ、山と海と兩窓に見ながら、西へ進むと、江尻港とだ、時に、午後一時十分。港には黒煙を揚げて居る巨船や帆を張つた和船も見へる。静岡灣だなど感ぜられた。

空は先刻より曇り出し、今にも降り兼ね間敷模様である。

烟も、小山も、茶の木が奇麗に、満丸として美しい。最早新芽の刈頃に相當して

居るが、本年の氣候では静岡邊も茶が凶作らしいと聞いて居る。

此所の風景は雄大で知られて居る、曰く、海岸より見たる富士には、三保の松原清見寺と、聞いた丈けても、又た歌人が、田子の浦打出て見ればと上の句を謂へば自然と句には富士の雪となる。景色を想像する人は實景を見なくとも、形容がうまいものだ。

と云ふ私は、未だ實景に接した事はない、富士の景は御隣だ位に考へ、いつも東海道を行きを急ぎ、還りを急ぐ爲めに、心に思ふ計りだ、何れは静岡を中心として近縣旅行をして例の三保の松原でも、清見寺でも篤心の付く迄眺めよう。

先年富士へは登りし體驗がある富士を全體としては、諸々から見て居る、然し田子の浦や、などは知らない。

一體富士山は、日本一で通つて居る程の靈山だ、是を詩にし、歌にし、繪にして世界人に誇りたがる。日本人は、斯様の特性を持つ者が多いと、或人は云ふて居る或は實際かも知れない。

山を全體として、客觀的に見るには、其遠近と、雲を背景とし、海なり、野原な

り、裾野の樹木、岩石、水の流を、一と纏めにして始めて繪畫となり。歌となり、詩となる、茲に審美學が必要となるのだ。

午後一時二十五分に、静岡驛に着す。静岡は海道一の都て、維新前の駿府、今は縣廳の所在地として、商工業の中心勢力を有し、驛もなか／＼賑やかだ、物産としての茶は、全國中の七分を産出し、海外輸出は清水港より直輸出すると云ふ。

静岡に就ては書きたいと思ふが、目的も違ふしまだ、實際を視察せずして語るも書くもあるものと叱られるかも知れないから擱き。同じ様の山から野。野から山へ墜道を出たり入つたり、相間には、海を見る内に、藤枝近所で、舊東海道が鐵路の右になり、左になり、並木の松が街道の兩側に、恰かも重廣がかいた東海道五十三次其儘だ、今でも、草葺屋根がよい工合に、松の大木と、配合して居るも、昔が忘れ難い。

一時五十分長い／＼、大井川の鐵橋に差しかゝつた。茲て大井川を思ひだすと、昔し徳川幕府の頃は、此川に橋が無かつた事が、如何なる理由であつたか考へ物だ。

俗誦に箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川 と人口に膾炙せられて居る。

私は思ふ、此川は、廣さはなか／＼廣いけれ共、水は甚だ少ない且つ數條に分れて居る、つまり一つ所に集注して居ない、斯様な川は、三年に一度か五年に一度位に洪水が出る者で、折角架けても、流れる心配があるのも一つ、現今の様に、鐵橋も、鐵筋コンクリート橋も出来ない時分では、是又た止むを得ないとするが、幕府の力て架したなら木橋でも、可なりの橋が出来さうにも思われる。所が是れには何か理由がなくては叶わぬ、昔しの交通機關には、陸路には、必ず、馬子と雲助とが付き物で、馬に乗るか、籠に乗るかで、殊に東海道の様に、交通頻繁の街道は、馬子と、雲助には、苦しめられた傳説は、澤山にある、是等の輩も歸する所は、賃銀關係を主とするより、大井川の様な所は、彼等には、かき入れの場所て、一人肩車て越すに幾何、二人て一人の客を渡すには倍増しの料金を得る様になし、人足不要とあれば、知り居る淺瀬も教へず、何んでも、かても、肩に乗せねば渡川の出来ぬ様な仕組みに出来て居ると、今一つには幕府の取り締まり法の一つて、渡川前に

一應取調べ、荷物の如き物でも問屋で預り、一應幕府の役人に通報し、許可を得る様に仕組まれ、江戸に出入する者を調査する、手段に過ぎないと考へられる、

渡川人足、其他の街道、持きの者は、斯様にして、生活の道を開らさ、街道商人も、川の前後や、嶺の行き戻りに、日用品、飲食物、乃至、宿泊等は今の旅より、盛んで在つた事實を發見する、夫れ故に、東海道は五十三次と謂ふて甲驛より乙驛迄、乙より丙と、順次に、本陣あり、問屋ありて、一面には、參勤交代をする、大名は、路次の費用嵩み、貯へ少くさせ、徳川の勢力を充實し、諸大名を無力にする政治の仕組で、各藩の實力を壓迫した、中央集權政治なる事が、立派に認められるのである。

二時半には袋井から天龍川に近づき、地域漸く廣く、農作物も、麥に、菜種に、熟れて來たのも見へ、三時頃は遠州濱名湖にかゝらんとす。

此邊の風景は又好い、遠淺に網を引ひて居る女子や、輕舟漁業する様も詩的だ。詩的に見る濱名湖より、實業的即ち生活的に見た濱名湖を、私の念頭に浮んだ丈、書いて見よう、湖水の面積は可なり大きい、日本でも、琵琶湖や、霞ヶ浦の次

かも知れない、夫れて東に東京、西に中京及京阪の大都を控へて居り、地の利を占め行通は自由の場所である、此湖水は、海に流通すれ共、霞ヶ浦の様な大河の流れ込みではない至つて緩流だ、此關係を語らなければならぬ、現在各縣でも、海のない縣では淡水池を如何様に利用して居るかである。是等の事は、旅行に何の關係もないと、片付けてしまへば夫れ迄だが決して、左様な者ではない、是れは、國家的の大問題である、而して人間生活に有意義であるからだ。

我が縣でも近來水田を利用し、鯉を飼へば、稲作の肥料となり、同時に鯉の發育を計るから、一舉兩得の策だと、縣郡等の農會で盛んに奨勵し、幼鯉を一夏、育てると相當の収益があり、稲作をして良影響だからと、技師は農家の副業として講演して居るのも周知の事實である。殊に此濱名湖が、昔しの漁業法でなく、最近人工的に鰻を飼育する事である。昔より濱名湖では、鰻のめそと稱する幼鰻の産地として知られて居た。夫れは湖水と海の交流が海中に生れた幼鰻の容易に湖水に上り込むに水勢の關係が他の河より入るより容易だから、澤山に進入すると云ふ事になる各地では濱名湖へ注文して、幼鰻を買入れ、是を池に放ち、育てるのである。故に



従前は此湖水の漁人は、皆幼鰻で各地方の注文に應じて居た、今でも同様幼鰻は此湖水が無限に漁し、得らるゝので相當に賣出して居る。

けれど、近時濱名湖では、淺瀬の澤山にある實に見通しのつかない程の湖水に、水田でもある様に堤を築き、完たく見渡す限り人工を加へ、鰻の飼育を計つて居るには一驚を喫した。實に淡水魚人工飼育の大進歩である。田の様に堤を廻らし、籾を立て廻まわしてあるのが、果てしが附かない程ある。注意して見れば見る程只驚くの外はない、我縣などでも小池で飼育をして居るのはあるが、天然の湖水の様な工合には行かない。濱名湖では此頃鰻を飼育する場所、鰻と共に鯉を飼ひ始めた處が鯉の發育は他の何所より、より好く發育する。故に下て鰻が育ち、上て鯉が育つ所謂之が眞の副産物で、確實に一舉兩得と謂ひ得るのだ。一昨年あたりから濱名湖産の鯉が鰻を東京出しする序に、格安に、どしどし市場に出るので、非常に下落する群馬埼玉地方に鯉池を所持する者は恐慌を蒙り。實に目が當てられぬ程だ。斯様に廣漠たる、湖水を利用し、魚類の運動を自由ならしめ、食料を適度に與ふれば淡水魚は育つより外はない、他の飼養池は池は、小に魚は多いと來れば到底競争に

はならないと、黒人筋の述懐談であつた。

現に湖水を渡りながら、其方法や、實況を見れば只成程と云ふ感が益々深くなる計りだ。

是れからは一路名古屋に向かつて汽車は進行する、宮の熱田を過ぎて、名古屋に着いたのは、午後四時半である。

名古屋は、中京だ、汽車は東海道と中央線と關西線と相交叉する、其他にも名古屋を起點とする鐵道線や、電車線がある、名古屋に關する事は略すとして、有名な天主閣の金の鯨銚でも見ようと車窓へ首を出したが、相憎、霞が懸かりて見えず、大都市は、平原にあるので暫らく眺めた、清洲の城趾はあれかと指し、右を眺め、左を望む内に、岐阜に着いた、時に午後の五時十分。

此邊は戰國時代に、織田信長や、木下藤吉郎で、御馴染みの場所だが、車窓位で何が書けよう、夫れに私の齒の痛みも中々強いから、何もかも思ふ様に筆が回らず關ヶ原附近は歴史的に立派な舊蹟だ、山を越すと江州となる、江州と云へば、琵琶湖が夕焼の赤色に染まりて見へる頃六時過ぎだつた、汽車の中でボーイ君が夕餐の

卓に就て呉れと云ふて來た。

私も齒は痛い、何か流動食でも取るべく、四人の友と食堂車に行き卓を圍みながら彼所に見へるのが瀬田の唐橋だと注意され、夫れが三上山だ、昔し田原藤太秀郷の昔噺も聞いて知つて居る、けれど是等の事をくどくどしく書いてもないからと先づ食事にも有つかうと四方山の談をしながら、夕食を済まし、時間を過ぎて居る内に、とう／＼大津迄來て、停車した、此驛で牛乳を買ひ求め、長い墜道を過る頃は夜となり逢阪山も何時か通り越し、大きな驛に來たなと思ふたら、京都の驛だ此の邊では私の苦痛は随分強よい寢臺に横たはれ共、思ふ様に、眠られず、洗面所に行き手拭を水に濡らし、頬に當て催眠劑ズルホナルを呑みアスピリンを呑み、一時でも苦痛から脱せんとする程である。其内に大阪に着いたが雑踏するらしい、出て見る勇氣もなく、横になりたまゝ神戸も過ぎ、明石も過ぎ、夜は暗く外面は見えず、臥して居る内に薬のお蔭か漸く眠りに入り、夢路をたどりながら姫路から岡山迄は少しも知らなかつた、岡山の驛で、中島君が注意したので知つた位だ、他は半眠位の所で、絲崎と云ふ所で、咖啡入牛乳を買ふて呑んだ。驛夫に廣島はもう近

いかと聞いたらまだなか／＼だと云ふ。

汽車は、夜は特に早いように思われ、半眠状態を續けて居る内に、今度は藤波君より宮島を通過する處だと教へられた。

車窓より外を見れば薄明るくなりかけたので時計を見たらもう十七日の午前四時過ぎて暗みより明るみへ夜の戸張は取れた、山も見へれば海も見ゆる、山陽の海だ新緑の島が見へ出した、晩春の山は水氣に富み、畑は今、麥が黄色になりかけて居る、一行の者も皆眠を覺ました、周防三田尻も朝の内に見へる、海と山とが接近して風景殊の外に好い處だ、小郡と云ふ驛で、停車する、山陰線に分岐する處だと云ふ。之からどこへも止まらないで、海岸傳へに景色を賞しながら、下の關に着いたのが午前八時三十分である。

## 九州を右より左へ (二)

一八

五月十七日午前八時三十分本島の西端なる下の關に着。

下の關と聞いた丈でも古蹟に富んだ長門の端で此所て山陽は終りの地である夫れ丈遊子には感慨が深い。

長門壇の浦と云へば彼の壽永の昔平家が讃岐屋島の一戦に敗れ優勢の海軍を持ちながら 安徳天皇を奉じて西へ西へと航し最後に落しは聞くも哀れの悲史である私共は此古戦場の舊蹟地を弔ひ得ざりしを惜む。

下の關は東京より来れば最終の地だが九州及び朝鮮其他海洋を経て日本に入には第一の起點となる故に土地も相當繁榮て文化の魁もして居る、其出入の多き事は道がに西口の玄關として見る事が出来る。

それに私の一行は海に縁のない國に産れた者が海峡に望んで無數の船舶が輻湊し帆柱が林立した状態を見ては一種の感に打たれる。

一葦對水の門司は目の先きであり、連絡船は下の關驛と續き船に乗るのか、別室

に入るのかさへ氣が付かない位だ。

一行は手荷物を赤帽に依託し連絡船に乗りあの船はあの島はと云ふ内に大きな建物の前に来てしまつた、是れが門司の港なんだつた。其位此間の距離は近かいのだから一層船を併べて通行してもよい位ゐだと思ふ、然し一二哩は距だたつて居るだらう。

門司港より直に汽車と連絡はするが、午前九時四十分發の列車で門司より連續的にある市を車中より望見し石炭の積みおろしや、眞黒の烟を數限りなき烟突から吐き出す枝光八幡の停車場を見ては戦時の景氣が如何に九州に集りたるかを豫知する事は出来なかつたであらうと思ふ。

私の知人が曾て北九州のことを語りて曰く九州の或る地は山を掘れば直ぐ萬金に値へし交通は便利で工業盛んに文化の魁けてあると云ふも決して誇言ではないと、恐らく福岡縣の東北部を連結しての總評であつたらう。

是等の黒烟の中を抜け出て、田園の開けて居る平坦の土地に出たが農業の狀は何處も同じで、今は麥の黄ばんだのと田に紫雲英草の咲いて居ると草葺屋根とを見るのが全國同様である、唯だ地質が關東と違つて黄褐色の粘土が多い、山は楠や

椎や松が繁茂して肥沃である農家風俗は別に違つてはいない様だ。

幾つかの驛を経て車窓より外を眺めながら博多驛に着いたのは午前十一時半頃で豫て通報してあつたものか私は知らないが未知の若紳士二人構内に來り同行の鈴木氏に向かひチャーターの挨拶が済むて他の四人にも引合せて呉れた、私は無言のまま、頭を下げた。そして皆の跡より付いて停車場を出て二臺の自動車に分乗し、土地不案内の賑かな町を通り、幾回か曲がり大道路の電車のある町へ出たかと思ふと、漸く自動車の通る位の狭い町をずん／＼と進む、方向も何にも判りはしない、狭い町は餘り奇麗でもない其所を益々進むて行く私は豫定の旅館へ落ち付くのだと思ふた此時分の私は偶々齒齶骨炎が痛んでたまらなかつた。

狭まい小路見た様の所を北と思ふ方角に行くと、玄關造りの會席料理でもあるか新三浦と云ふ静かな家て新らしくはないが、家の構造も座敷廊下床の間に至る迄が明るく決して待合式でも、遊廊式でもない、と云ふて、東京あたりの粹と云ふのは猶更ない。座敷の廣さは二十疊もあるか、敢て勘定して見た譯でもない、夫れに東と思ふ方は博多灣の入江の様になり。江に突き出して欄干があり此所より東南に

橋が架せられ夫れを電車が通る様になつて居る。

更に眼を東北に轉じて、眺望すると、名島だと聞いた、其邊に神功皇后が二千年の昔三韓征伐より御凱旋せられし時の帆柱が化石となりて今にあると鈴木君より説明せられた、其向ふ遙かに海の中道と云ふ砂洲が長く玄海灘に突き出し、博多灣の北の風浪を避ける様になつて、其長さは實に三里もあると聞いては見たくなる、夫れ計りてはない、松が生へて、風景も絶佳だとは遊子旅情をそゝらずには居られない私は何かの本で山陽外史が、此景を見て、長嘆息して、此景依何在西僻と云詩句を思ひ出した。今此新三浦の江に倚る欄干より眺めて呆然と自失した。

自失したのは單に景に見とれて計りてはない。未だ此の座敷に來て幾分時にもならない、先程驛で、初見參の御兩君に名刺を差上た許りて私も名刺を頂き、郷地の御仁で六木木久雄君と山下義夫君と承知した、彼様に名刺交換もして見れば、萬更未知とも謂はれない。續柄や、友人側から間接に知人である。私の先程より入江の欄干に倚りて海風に當り居るも、門司以來の劇痛を忍び、他の遊子をして懸念せしめぬ様、精神轉換療法をして一刻でも忘れて、興を醒まさせたくないとの老婆心に

外ならない。

けれ共、痛みはこんな姑息の考へには應じない、愈募る計りだ、痛と自我と何れが強いが魂競べせんと謂はん計りに攻めて來た。強情では今迄人に後れを取つた事のない私も、矢張り内輪の喧嘩には勝てない。一步進んでは熱を出して呉れると謂はん計りだ。

さう成つたら自分にも考へがあると、すつかり喧嘩腰だ、よし加勢を頼まんと、衆に計かつた。六本木山下の兩君早速福岡大學の口腔外科教室へ電話を掛けて依頼して呉れた。私も山下君に連れられて表へ出て、電車に飛び乗り、或る十字街にて別の電車に乗替へ、千代の松原の松の澤山ある公園の處で下車すると、大學病院前と云ふ停留所だ、堂々たる大門を進入り、右手に折れて、行くと看板が出て居る口腔外科教室とある。玄關に行き山下君の先頭に續いて入ると、丁度好い安配に外來も閑散になつた所で、直ちに診察して呉れ、私よりは迄の経過を告げると、教授は口を見せよと云ふに此所ではすつかり患者になつて仕舞つた。診察の結果動搖せる最も暴威を振るい居る大白齒を拔去する事を慫慂された故。此の苦痛の取れる事な

ら是非手術をして貰ひたいと請ふ。教授は承諾して直ちに抜齒して呉れた。其創面へガーゼを挿入し手術を終つた、其時教授は兩三日入院しては如何と云ふ、是れには私も同意する譯には行かないと、斷然斷はつた、然らば綿紗の交換をせよと渡して呉れた綿紗を貰ひ受け、禮を述べ元と來た道を山下君に伴はれ電車で新三浦へ還り來れば、座敷に居る連中より慰められた同行の友に謝し席末に横臥したれば、中居の女中枕を持ち來り介抱をして勞り其内に座敷では大きなチャブ臺を中央に客人四方より取り圍み、博多名物にてもあらんか鶏の骨付の儘をぶつ切りになし、鍋にて煮て汁と共に小どんぶりに取り薬味をかけチリと稱する酢醬油を添へて食するのて何と云ふ名だか聞いても見ないが烏渡鯛ちりに類した様式に出來て居る、之を肴に杯を傾け博多藝妓のお酌と來て居るから、一層興も沸く、そろ／＼興に乗じて絃管のさんざめく内に、博多藝妓の咽を聞きたいと來た。咽とは博多節を指すので、今席に侍る藝妓はお秀と云ふ老嬌と今一人は千代鶴とか何とか云ふ妓だつた、若い方の千代鶴と云ふのに絲を老嬌お秀の方に咽を煩はし遊子は博多節の一曲、蒙古十萬と、やり出す其聲なら節なら谷の戸を渡る鶯か鳴々咽々縷々として其節廻しの工

合神に入るの妙手である、聞けば此お秀の方は博多でも有名な謠ひ手で、嘗ては蓄音器にも吹き込んであるさうだ。

遊子何條是丈で満足すべけんやて、次を請求する曰く、「御衣を奉げて鳴く秋の夜に、月がさし込む榎木寺」と菅公の心意氣を節に出したので、酔客も自然に襟を直さざるを得なくなつた。

藤波老は、今やずぶ八位の勢で十八番の「我れ民間に育ち」とやり出した迄はよいが酒興益勢を得て、お秀の方に香水を御馳走せんと、小さな香水瓶を振りまはしお秀の方より固く断はれた。見れば小瓶の横に定價四八と書いてあるのを讀まれ、皆々どつと笑ふ、藤波老今度は餘りの嬉しさに、御自分の頭に香水を付けんと瓶の口を下に向くれば毛のなき悲しさ、顔に香水が傳はり、眼に入り刺戟強く、大滑稽を演じたるは何時もながら元氣上戸で、穉氣ありて、面白し。

私は横になりながら此有様を眺めて居た、藝妓や女中は丹前を掛け氷嚢を持ち來り頬部に當て、看護して呉れた御蔭で時間の立つと共に段々快方に向かひ痛みも薄らいて來たので起き出し座輿を見る事が出來た。若い藝妓に福岡には藝妓の數は何

人位居るかを尋ねたら只今は少ないが八百餘人居ると云ふ是丈け聞いて如何に博多福岡が優勢だかを卜する事が出來る。

酒も大分廻り十二分の態になり晝食をする事になつた別に肴が取り替るでもなく先の鍋にある身や汁を掬ひ出し香の物に番茶で飯を喰ひ、私は鶏卵を取り寄せ三個程呑み汁を一杯吸ひ湯を貰ひて晝食に當てた。(此料理は水炊)

中島君は記念の爲めに此中庭で一同の寫眞を取りたいから庭へ出て呉れとの事に座にある面々藝妓から中居迄集まりカメラに入れられた。聽て是より東公園に行き見物せんと自動車をも命じ藝妓二名も共に二臺の自動車に分乗して先づ箱崎八幡宮前に下車し正面の大鳥居をくゞり拜殿にて謹て參拜し社殿を一巡し御札を受けて拜殿に歸るとお秀の方より御冷酒のお盃と御札を渡され社殿の大前に入れられ神官の御禱を蒙りたり。

箱崎八幡宮の縁起古事來歴は社務所にて配布せる、官幣大社宮崎宮案内略記と云ふ印刷物に記載してあるも書き連ねるも煩になるから略し。

再び自動車にて多々良濱邊に引き下り八幡宮の敵國降伏のある伏敵門の真正面よ

り自動車にて進み威靈の有様を見せて呉れた是れは現今自動車にて改めて濱邊より進み入る様に案内するらしい。

伏敵門前より今度は日蓮上人の巨像のある所へ下車し銅像に合掌し元寇當時の先覺者偉人は銅像として經文を片手に持つ生ける様な顔を拜した、蠟燭や線香の烟りて賽者引きもきらず參詣する。

此の次は畏れおほくも龜山上皇の御銅像である、銅像は少しく小さいが威嚴ある御姿を見ては蒙古の軍十萬を玄海に塵にした歴史を思ひ出し自然と崇敬の念を生ずる私共一同は一様に參拜した。

此の廣き場所全体を博多の東公園とは云ふので尙ほ町囀に見物すれば、香椎の宮へも遠くはないと聞いて居るが是より市中を見ながら西公園に自動車を振り向け博多の繁榮の町を通り橋を渡りて福岡へ入り諸官衙や兵營のある舊黒田侯の城趾の所を見ながら光雲神社を參拜し西公園に至り高臺より博多灣を見渡した此見晴らしの小高い所に騎馬の軍服姿の銅像が建てられて居る。茶屋があらこちと出來て居て繪葉がさや水菓子を賣つて居る近村の小學校の遠足でもあるか多勢此公園で遊そんで

居るのも見た。夕景を此の高臺から眺むれば博多灣は一目に灣は靜かに帆を張つた小舟が行來して殘島の前に後になる此の平和の灣の外が玄海の荒海とは思へない、何と云つても好い風光だ完く此丘より眺むれば灣全体を一眸の内に收める事が出来る私は急がぬ旅で健康が許したなら永く此所に悠々と遊びたい。

私は同行の者が歸るので跡に付いて光雲神社の前に來たすると中島君が此社前で記念寫真を取るからと云ふのでカメラの中に入れられた。

光雲神社は舊福岡城主の先祖黒田孝高同長政公を祀りし社殿であると教へられた。

茲て東西兩公園も見物したそして自動車で舊城の堀ばたを進行するとき福島正則の舊宅があると指示して呉れ又た近年名高くなつた筑紫女王で通ふる伊藤燐子の白蓮さんの舊居だと云ふ銅御殿も示された。斯様の事は土地の者でないとは判らない。

今度は六本木、山下兩君及二嬌と分れ同行の五人一臺の自動車に乗り未だ日も高いから太宰府へ行くのだと聞いた。

太宰府と聞いては是非行きたい此九州を旅行する内でも私は最も太宰府を胸中に忘れなかつたのである。嗚呼筑紫太宰府。

### 太宰府及び其附近

二八

筑紫とは謂ふ迄もなく今日の九州一圓の代名詞にて古くは九州の事を凡て筑紫と稱へたり筑紫と謂へば自然太宰府と語の續くも古來の習はしてある、夫れ丈太宰府の名は大きく聞こえる、太宰府と謂へば天滿宮と響く是れも菅公の人格の偉大さが偲ばれる。私は歴史的に詳しく書くのではないが、實際に名蹟を尋ねて其眞髓を記して見たい。

私共の一行は五月十七日午後の四時頃より西公園の舊福岡黒田侯の祖先を祀りし光雲神社を辭してから自動車で太宰府へ一直線に廣い街道を東南を指して進行し筑紫平野に出て博多から二日市久留米へ行く汽車道を横切り併行に鹿兒島行の本線鐵路の間を行くと麥畑の果しなく續ける所に來た空には高かく雲雀が鳴いているも菜の花は濟んで種が房々と出來ていた、電車の車掌は此踏切を越へると向へ長く低い堤が見えます、あれが昔しの水城ですと指して教へて呉れた此邊を水城村と云ひます、成る程今は見る影もない村落だ、水城の堤を突き抜けて道路が出來て居るから、注意されなければ之が水城とも氣がつかない天智天皇の時に堤を築きて水を貯

へ太宰府の要害としたのだと云ふ。

雲雀が空に鳴いていた所の田圃は水城の内なのだ、水城の關趾の礎石のある所へは行かなかつた是れより東へ僅か半里も行と段々地が高くなり山の麓らし地形となるけれ共未だ田圃中だ左手の方御堂らしい建物が見えると自動車は停まつた是より徒歩で小道をだら／＼登りに行くと兩側に大きな礎石がある正面の所には堅固の石碑が建てられて居る之が都府樓の在つた中心なるべし。

石碑は後年建てし者にて、都督府趾と大文字に刻して在る蓋し都府樓は其礎石の大きさは中ても最大の者方六尺位あり柱の立てられたる面は小なる者で一尺七八寸大なる者は徑二尺四五寸もある正應趾とも見るべき所には現在整然と三十六個の礎石あり後應趾は少しは見ゆるが正しくはないけれど堂々たる大厦の趾とは何人が見ても合點せられる其他東西にも門の趾にも外廓の跡にも所々に礎石が残りつゝあり現今此礎石を土臺として想像畫を繪はがきに取り西都の古瓦と共に都府樓草庵にて發賣して居る同行の鈴木君は古代瓦を購求して來た、私は草庵で西部古瓦と云ふ寫眞板の繪はがきと都府樓繪葉書を求めて來た。



中島君は記念だからと都督府の石碑の前にて一行をカメラの内に収めた。

又た太宰府の碑が建てられて居る寛政紀元歳次己酉冬十月 北筑福岡府甘棠館祭酒九州第一の梅今宵君の爲に開くて有名なお梅令嬢の父龜井魯道載文謹選と碑の未文に刻してある。

碑の全文は読み切りもしないし且つ漢文であるから紀行文には入れたくない。讀者諒恕せられよ。

此所へ立つて遙かに南方の小高き山に傘の様に一本の松が見える夫れが天拜山である。と指示せられた因て遙に菅公の故事も考へながら黙拜して貴重なる舊趾を離れ大野城趾を後にして街道へ出た、すると此南に森の見ゆる處が僅かに八町位だが彼所は榎寺だと云ふ。

現今の筑紫郡太宰府町大字太宰府宇榎寺此所に舊趾がある菅公謫居の地であると同時に終焉の地である。醍醐帝の延喜元年正月藤原時平の讒に遇ひ遂に此地に流謫せらるけれど菅公の誠忠は少しも變らなかつた。殊に其頃の流人の行路も決して樂の道行てはない種々の悩みも多からう。私は此時南の空に向かひ樹間に見ゆる家屋

を眺め地は踏まねど僅か向ふに八町の森を惘然として見て萬感胸を衝いて堪へられなかつた。

最前博多の新三浦の座敷てお秀嬌の

御衣を奉げて鳴く秋の夜に

月がさしこむ榎寺

の妙吟と今まし眺め入る榎寺の森とを併せて心の内は張り裂れる様な氣がした。

鈴木東山先生は都府樓を懷古して同じ思ひにや。

「菜の花に鐘ついて見る観音寺」

とある菅公は太宰権師に貶せられて筑紫に降りしも決して正當の務めを取りし譯てはない名は權の師でも實は流人として只員外郎であつたのだ。

夫故謫居に謹慎して悶々の情を観音寺の靜かな靈場に慰めて居た事は、經文の淨書を書きて今も寶藏せられて居るのでも明らか事である。

相公遷跡斷人腸將道他郷似故郷

義同漂母憐韓信一裏青松樺飯香

右の詩は勝屋大華と云ふ人の作りし詩なるが菅公が榎寺に來りしとき始めて宿を  
 樺音の宅に乞ふた其時情けある媼が種々と人情を加へ樺飯を松の葉に盛りて進めた  
 と云ふ事と韓信を憐んだ漂母とを併せた美談である。

私共は未だ自動車の側に懐古の思ひをこらしてゐた都府樓の舊門跡で今乗車せん  
 として天智天皇が都府樓の報時臺で漏刻卸ち水時計を使用して時を誤まらない様に  
 注意した事も忘れてはならない、現今の時の宣傳も實は茲に始まつたのだ。

是から觀音寺に御參りをして見やうと僅かの距離だが一行五人乗り組み東の方へ  
 行くと餘り大きくはないが古松聳へ境内何んとなく時代を経たる古刹觀音寺がある  
 一行は下車して大門より寺に詣り觀音像を拜す寺と云ふても御堂の様になり右手に  
 鐘樓がある容易に登りて鐘を衝く事が出来る一行の内て鐘を突き鳴らした者があつ  
 たが其音は頗る澄み渡りて響き金音の餘音長しとても云へやう左手の方には堂守の  
 居住せる所と觀音寺の寶物に掛る二十種計りの佛像がある中へ入り僧侶の案内で一  
 と通り拜觀した。一行の内太田先生はなか／＼の好き者で私共とは選を異にし一々  
 案内人に説明を聞き之に註釋を加へて居るから大變だ聞けば此中に國寶に指定され

特別保護を加へて置く品が大部分であると云ふに於ては驚き入つた、中には印度佛  
 も推古佛も有るだらう觀音寺の直ぐ右裏の地所を掘り起した穴があるから其所迄行  
 きて見れば礎石の土中にあるのを掘りて外から見ゆる様にしてあつたのだ兎に角古  
 い者だ堺内を散歩して見たが此類廢を如何せん。

觀音寺の前の壁に此寺の來歴が詳細に書いてある讀んで見ると縁起は推古帝の御  
 宇とある、鐘樓にある鐘は天智天皇の御寄進に成る物で鐘も寶物である。

來歴の書いてある側に京都藤波何某金百圓寄附と新らしい板に書付てある私は鐘  
 樓に登り居る藤波老を呼び貴所は金百圓を御寄附せられ御奇特の事であると云へば  
 一同笑ひ出す。

太田君が未だ見えない是れは止を得ないよ先生の美術狂は他の人々とは異ふなど  
 惡口を云ふてゐると先生得意げに出て來る今此の寶物場て一大發見をしたと大喜  
 びだ寺僧の説明の内朝鮮の佛像を見付けたて鼻を高くする。是れて歸りに奈良へ立  
 寄り法隆寺で比較するんだとは益々あてられる。

觀音寺も參詣が濟んだから是れから太宰府の天滿宮に參拜せんとす天滿宮は都府

樓廳趾から少し北に進むと太宰府の町がある東北は山を以て圍まれ實に宏大もない境内だ私共の一行も神社入口の大きな鳥居の側にて自動車より降り東の方を見れば寶満山は高く聳へて神域の威を示すかの様である。

天 滿 宮

私の祖先は天滿宮を崇敬すること特に篤く隨て其子孫は皆な天滿宮に歸依し櫻井家は之を氏神となし私の産れた郷里には現在村社とし祭り家の家憲として毎月二十五日を祭り必ず赤飯を進ぜる事を怠らない定紋には梅鉢を附け三月の二十五日を春の祭とし九月二十五日を秋の祭とし未だ曾て此の家憲を犯したことはない。

今回九州旅行に就ては必ず太宰府の本社へ參拜を怠るなと老人よりも呉れくも言ひ渡された。

天滿宮は官幣中社太宰府神社と申し文祖の神贈太政大臣正一位菅原道真公を奉祀し貶謫の地に於て薨去し給ふや柩車安樂寺の地に至り止まりて動かず即ち其處を廟所とし聖廟と稱す公の筑紫に貶せられてより僅かに三年延喜三年二月二十五日が終焉の年月である。従者味酒安行と云ふ者延喜五年八月始めて神殿を設く朝廷に於て

も又左大臣藤原仲平は詔を奉じ太宰府に下り神殿造營の事を奉行し同十九年に至り經營竣功すと古史にあり。

又た延長元年帝大に悟らせられ公の遺徳を懷ひ公の本官を復し正二位を贈り曩の貶謫宣命を焼き却てたとある。

正暦四年五月二十日には正一位左大臣を贈らる。勅使藤原幹正太宰府に下り廟所に就き宣命す同年十一月二十一日には特に太政大臣を贈らせらる、勅使藤原爲理太宰府に下り廟所に就て宣命す。

寛弘元年臨時勅使の宣命あり二月二十五日に勅祭を行ふ同八年詔に依り毎年二月二十五日勅祭を行ふを例とす。

明治大正になりても屢々勅使を下し皇族方御尊崇厚く歐洲戰亂の時獨乙國との宣戰の奉告をなし勅使を御差遣になり同く平和克復奉告の爲に勅使を御差遣せらる今上陛下未だ東宮であらせし時明治三十三年十月二十九日御參拜。

皇后陛下に於かせられても大正十一年三月二十一日梅樹御献進あり。

攝政宮殿下には大正九年四月六日同上

以上の如く我が皇室に於かせられても御尊崇の頗る厚き事は寔に畏れおほい事である。

我が國にて國家に盡くされたる人臣にして神に祭られ主祭神となりし者は大概別格官幣社であるが超へて官幣社に列せられたるは太宰府神社と京都の北野神社のみである。

天満宮に關する概略は上記の通りであるが私共の一行は參道を行き三つの大きな反橋があつて池に架せられてある一々其の反橋を渡り最後の反橋を今や渡りきらんとすると寫眞師に見付られ記念に撮影と云ふに元より太宰府神社で何か記念を得んと期して居た事として何の詮議に及ばんやと直ちに承諾し橋を背景として謹んで撮影して愈々拜殿に來り恭しく參拜し社務所に御札及種々の御守札を求め境内を見物し神殿の前左側にある飛梅も見たが當社の御神木と稱して柵を廻らしてあるけれ共現今の梅の樹は初代以來のてないと云ふ。

此梅の來歴は紅梅殿に在りし頃朝な夕なに公の珍重せし紅梅の飛んで筑紫に來りたりと云ふ傳説がある。世上に膾炙せられて兒童迄もよく歌ふ。

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花

あるじなしとて春な忘れぞ

と云ふ梅の縁起だ、境内の樹木は松杉雜木の外に亭々として天空に聳へ枝葉大いに繁茂し社頭の莊嚴を添へてある樟の樹は樹齡何年を経過して居るかは知らざれ共其巨大な物は目通四十一尺餘九州地方の名木で現在天然記念木に指定されたる者が三本であると云ふ。

私共は樟木のこんな大きなのは始めて見たので只だ呆然と眺めて嘆息して居る丈だつた。境内附屬神苑は東と北にあれ共夕景にもなりたれば神苑を皆な探る事丈は止めにして歸路につき前に自動車を買った茶屋にて種々土産物を購ひ茶を呑み天神の梅茶を更に求めて味はい一休みして自動車に乗り入り五人共々神社の構造輪奐の經營其美を盡してあるのを賞へながら元の道を引還し博多の市街へ着いた時は電燈煌々とし商家の最も繁榮な街に入り博多人形を賣る見世に立ち寄り土産にする人形を銘々購求し荷造りと共に郷里へ送附方を依頼し博多市橋口町榮屋旅館に着いた。九州の地を踏んで始めての旅宿だ榮屋と云ふ宿はまだ新らしき構造で最近新築し

た計りだと云ふ。宿の例で旅の疲勞を取る爲めに湯に浸り設の室に浴衣がけて緩々とくつろいだ心持ちは又た別段だ私は幾枚かの葉書を書きて遞送方を女中に申付け尙ほ日記を書かんとするも何分にも今朝以來の劇痛と福岡大學で手術せし處が未だ痛むので思ふ様に文意がたどれずほんの僅かばかりの自分の事と夫れから自分の見た博多及び其の附近を少々書き置き後日書き改めんとすれ共物になるや否や頗る怪しい。けれ共人を頼む譯にも行かねば僅か腦中にある事丈を記す。序に同行の諸君に私が病骨を承知して來た事の不敢さを御笑ひ下さるなと衷心同行の友に感謝して置いて諒恕を願はねばならぬ。

斯様の事をノートに記載して居るも晚餐の食事に大分御馳走が運ばれて來た見た丈けても腹の蟲がぐら／＼する其内には御酒が出る私は酒は傷に害があるから他の飲料水を求めたさしみがあるが鯛だ關東地方ではさしみは鮪で赤いのを賞美して居るが最早名古屋より以西では殆んど鮪はない様だ殊に此博多は鯛が結構な所だとは聞いて居たけれ共齒の悪い咬み合せの出來ない者には美味の魚は絶対にいけない鶏も獸肉も猶ほいけない、膳に付いて居る者では椀の汁位で何れも手が出せない生卵

の注文とはなんと情ない事であらうと友人の食べる工合を見て居た。

此時表の方より女中が御客様ですと報じて來た六本木君と山下君夫にお秀嬌と若い綺麗な妓で一行を尋ねて來たと知れた何れ私共が太宰府行の跡で發展して居た事だらう何れの方も紅かい顔をした嵐の様な息をして御座るお秀の方は先程のお禮にお酢もじを持參しましたと妙味さうな折を擴げ出した。藤波老も御機嫌斜めならず一層メートルが昇るらしい此所で又々博多節を聞いた何度聞いても聲が好い一しきりござんざめくと時間は遷つて來た晚餐を濟ましお客様は御引上げになつた。私は別室の方で寝る事にした宿の女中に按摩を頼んだら上手の按摩さんが留守だかと云ふて來た下手でもと謂はなかつたが女按摩さんなら直ぐ來るとの事に何人でも宜いと云ふと案の如く女の按摩さんが來て揉んで呉れて居ると今度は男の按摩さんが來たので太田君に周旋する同君も揉んで貰つて居る按摩同志が談を始めた、それが甚だ甘つたるい様な嘶して歸りには問題になるんではないかと餘計なお世話だが聞こへた私も疲れて居る事として意外に眠れたお隣の室でも華背に遊んだ所の事ではない鼾聲大に起りて夢は何所にと聞きたい様であつた。

## 博多に關する補遺

此の一篇は同行の鈴木東山氏より寄せられし博多に關する最も必要の項で、私は當時病中故に、思ひながら眞に觸れる事が出来ず、遺憾千萬なりしに偶々東山氏より、左の名文を得て補遺とし、左に掲ぐ。

## 補遺

海行けば林の如き帆檣、山行けば、石炭、セメント、鐵、コークスの山。何人も其殷賑の狀に驚かざるゝと云ふも無理ならぬ事である。

八幡は日本の倫敦と稱せられて居る。實に煤烟の爲めに、天日明を失つてゐる。夜間は火炎天に映じて地獄の熬火の如く、汽車行く人の膽を寒からしむるといふ。ムク／＼と椎の若葉盛りあがれる香椎の宮を左手に拜し、程なく博多驛に着一同下車した。

佐波郡田中島出身六本木久雄學士、山下義夫學士の兩氏は態々我々一行を驛まで出迎へて呉れた。荷物は榮屋旅館の番頭に渡し自動車二臺を連らねて舊柳町新三浦と云ふ料理屋に直行。こゝにて名物の水炊きにて酒を飲んで盛大なる午餐會を開く

九州着第一に擧ぐる祝盃である。

自分は例の齒痛愈激しく、到底尋常手段にては行かざるを覺り、山下氏の案内にて九州大學口腔科に馳せ、戸井田教授の手術を受け、氷嚢を貼じて、酒池肉林の傍に横臥し、恵まれたる旅行團の今日の盛大を祝して居た。此の部屋は、博多灣に面した豪壯なる十二疊で初夏の波が欄下を洗つてゐる。其昔博多小女郎浪枕て鳴らした、遊女屋三浦屋の奥座敷であるのだ。

酒杯數行に及んで咽自慢の老妓お秀と云ふが、正調博多節を立て續け唄つて興を添へた。藤波老以下メートルを上る事限り知れず。桁をはづして興ず、中島氏恐る／＼寫眞機を出だし最初の素人寫眞を撮す。蓋し、九州旅行の爲に特に稽古せし飛入り寫眞師たるものであらう。

いつの間にか時も過ぎて三時を過ぎた。それから再び自動車二臺に分乗して市内見物に出掛けた。先づ東に向つて進み、九州大學の前を通つて箱崎に至り八幡宮を參拜した。箱崎の濱に眞向ひに宏壯なる宮居である。神域もゆつたりと廣く。神鳩の群も平和氣に遊んで居る。振仰ぐ樓間の扁額にある『敵國降伏』の文字は嵯峨天

皇の御宸筆と稱せられて居る。ともすれば外國の仇を蒙つた博多灣に眞向つて崇め祭られた八幡宮が、古來の靈驗は申すに及ばず。爾來永劫に及んで護國の神であらせられる。其の顯かさは、直ちに首肯かれる遠來の意を通じて拜殿の階下に一同額づきて禰宜の御稜をうけ、神蓋を頂戴した。それより濱に出て蒙古襲來の慘事を偲び、鹽湯泡洋閣水族館等を遠望して、引きかへし、東公園に出て、日蓮上人の銅像を拜す。此銅像は恐らく明治時代代表すべき一大銅像にして、其藝術的價値に於ても、傑出せるものであらうと思つた。『此經文を戴かざるに於ては神罰立ち所に至る可し』と云つた様の顔貌が誠によく表れて居る。元の冠が、皇國を脅かす事が確かに上人には分つて居たのであらう。房州の漁村に出生して、よく千代の松原に銅像となり、今日に及んで經文を衆人の頭上に振り翳す。誠に一代の偉人と云ふ可きである。

續いて龜山上皇の銅像を拜した。あの國難に直面された上皇の御軫念の程、察するだに畏い事である、あの笏を攝られて、松の梢の遙か上空に麗はしき尊顔に玄海を見つめて居らせらるゝ、御姿が涙なしに拜されやうか。上皇の御英靈は今尙ほ斯して皇國の安穩を祈り續けて居らるゝであらう。

明治二十七八年の戦争も國難には相違なかつた。然し『底の藻屑と消えて、残るは唯三人』と高らかに唱つて事に當つた。其所には天佑を頼む安心が有つた。更に三十七八年戦役は、より以上の國難であつたに違ない。中にも日本海海戦は文字通りに皇國の興廢にも關した然しながら、結果は蒙古の軍勢と同じ運命に陥つて美事我國の大勝に歸した、此時にも我軍の將士に天佑を保持するの信念があつたであらう。

我國民の愛國心が如何ばかり強く發露するかを思ふ時、此の天佑ある祖國に向かつて、此の動かし難い國民精神に一大貢獻を爲された御偉業をも、上皇の御恩徳の内に加へ申上たい。

自動車は福岡市目抜きの大通りをひた走りに駛つて西公園に向つた。諸官衙會社銀行等の結構壯麗なる建物は、確かに旭日昇天の大都市たるの者に恥ぢない。黒田侯城趾濠端を過ぎて西公園に着いた。丘上には黒田家の祖先を祭つた、光雲神社がある。折柄満開の躑躅を配した新緑の裏山に登れば、博多灣を一眸の内集め得べ

く、右に博多市街より名島、西戸崎の海の中道を見、左に残りの島鹿島の巨島を見る遙か左は生の松原より唐津に及ぶのである。

以上は鈴木東山先生の名文であると同時に、國民精神教育上等閑に附する譯には行かない者がある。殊に龜山上皇に關する一段は、讀誦する毎に肌を粟を生ずる様な思ひがする、日蓮の豫言の如きも、今日より見れば、其當時異説を唱へ北條政府の迫害を蒙りしも、百折不撓の精神と、先覺の明とがあればなり。

### 九州を右より左へ (三)

博多を跡に右より左へ

昨夜は九州へ着いて始めての宿りに身心の勞を醫し藤波老は盟主と云ふ關係か御歳のせい、朝は人より早く眼を覺まし私共の起きた頃には朝頭も濟まし煙草を輪にふかして端座して居る。一行も床より這ひ出して洗面所へ、座敷に戻れば奇麗に掃除も出來朝茶も出て居た。一行朝の禮をかわし今朝も上天氣で旅行日和りだと誰やらが云ふ。

朝餉の膳も運ばれた。私は例に依つて粥を女中に頼んだ一行食事も濟んで今日の道程を語りつゝ早や出發の用意も調ひ一行の内て東山先生が九州の案内をして呉れる物と思ふて居たら福岡に所用もあるのて一と先づ分れるのだと聞いた時聊か淋しみを感じて來た、けれど子供てはなし何とか出來るだらうと決心した。

もう今日は五月の十八日になつた午前八時十五分發の福岡より長崎行の汽車に乗る事となつた鈴木君とは驛で分れ一行は車中の人となり憧れの長崎へと出發した。



昨日太宰府へ行くとき見た平野より少しく西へ進み二日市と云ふ停車場の東に太宰府を追想し南西へ行くとき原田と云ふ驛が見へる筑前と肥前の國境だ、けれ共山は鐵道沿線には見えない是れが九州での大平原とても云ふのだらふ、是から西南にかけて久留米方面より佐賀方面がよく陸軍の大演習のある處だ、そして土地は肥沃で肥後と共に九州第一の米の産地たる事は聞いてゐる。

車窓より北方を見れば脊振山脈が肥筑の國境となつて聳へて見へ南一帯は實に一眸眼をさへぎる物なき平坦部だ農作物は五月の末では九州の様に暖地でも麥の熟れんとして居るのは中國邊と大差はない、尙ほ注意して見ると、此邊も關東の北部地方の様に二毛作だ以て豊穰なる事が判る。基山、田代と經て鳥栖驛に着いた此所は鹿兒島本線と長崎線との分岐點で相當に賑ふて停車も五分する時間も少し早いが辨當と壽司を買ひ茶を求めて居る内に發車した。是より急に西へ西へと進み中原、神崎を過ぎて猫騷動で知られて居る、佐賀に着いた、佐賀市は驛より好く見へる舊鍋島侯の封地で、九州大名でも大藩だ、維新當時は薩長に次で革運を起した、藩主閑叟公は明君の聞へ高かく、副島大隈江藤等の英俊も出て居る、總体に土地は肥沃ら

しい、我が市よりは屢水道の視察に来るので土地馴染だ舊城地も車窓より見る事が出来る、私は九州一番の筑後川筑紫次郎は佐賀から柳川へぬけると渡ります大汽船がいくらかも上つて來ますが見へるかと思つたら車窓からは決して見へない、見ゆる者は田圃の麥ばかりだ。

此平坦部は行け共、何の變哲もない實に平凡だ、私は此の平凡が氣に入つた夫れは郷里の平野と餘り變りがないからである、北方、高橋、武雄、三間坂、上有田を過ぎ、有田驛に着、有田となると山が前にも後にもあり山の間を行く様になつた此驛は陶器で名高き伊万里への分岐點となる、勿論有田も陶器は有名の地だ、是より曲線に、左へ曲ると長崎縣との境となる、三河内を過ぎ、早岐に來ると佐世保行と分岐する此驛では海軍の將士が三々五々として乗降し可なり雜踏した是より左へ廻ると車窓より川か沼かと思はる、程の水が見えだした、地理を知らない私共には山合から奇麗に見ゆる沼だと思つたら、夫れは大村灣から連通して居る海なのだ段々汽車の進むに連れ見へたり隠れたりする、もうそろ／＼九州特有の櫨の木は新緑の葉を房々と、盛上つた様に繁みを見せて海岸となく畑の縁や山の裾に林をなして居るのが如何にも美事で、秋になつたら紅葉もするだらう、實の採取もやるであ

らう、私の國でも蘆はあるが大木がない、秋霜がかゝる頃其紅葉が大村灣の浪靜かな紺青色に映じての美觀は一層であらう、完く特有な南風崎を過ぎ川棚と來ると大村灣は入海なれど廣い、浪靜かにして風光明眉だ船を雇ふて海岸廻りをしたら格別であらんと思はれる。

彼杵、干綿、松原、竹松は皆海岸にある驛で舟着だ、此邊の風光は左に山や岡を右に海を自由に見ながら往くので無聊に苦しむ様な事はない、車中にて中島君は長崎縣の人と頻りに歡談を交へて居る其狀如何にも互に懇篤らしい。

私は車窓に倚り例の病苦を勞はりながら聞くとまなしに斷片的に耳に入るのは、長崎縣の官吏らしく、又た一人は同縣の縣會議員らしく想像した、そして中島君は拔目なく先の胸中に深く喰ひ入つて居る様だ時に笑つたり首肯したりする有様は、實に良外交官である。

私は自分の此病さへなければないと、時々身の不幸をかこつのである、藤波老は獨り超然として如何にも盟主たる貫緑を具へ、半眼に閉ぢて語らず頗る長者の風あり、太田先生は何やら郷里に縁ある人を見付けて雜談に耽けり、各特色を現はして

行く内、私の隣に妙齡の婦女あり私も所詮なしに問ひかければ答へ丈は交はずも別段益にもならない、其内に大村驛に着けば彼の娘は下車して、後は又黙々たり。

肥前の大村と謂へば藩のありし地て今も相當に繁華の町らしい灣は行きつまりて汽車は大迂曲をなし隧道となる是れが大村灣の底になるのだ、夫れ丈風景は絶佳て海は小波も起らず漁舟釣を垂れて太古の如く磯の松は枝を伸して碧水に觸れんとし潮に濡れし網を二つ三つ高く吊してある、生きた山水を、繪て見る様だ、病苦に難む私などの秃筆に何んて眞髓を寫す事が出來よう、乞ふ諒せよ。

南國の山は樹木に富み針葉樹や扁柏種が樺色を帯びた軟かな葉を出して居る樟や檜、むく／＼と蔽ひ重なり山は重疊として居る、ともすると、山合に茅葺屋根の農家が點々として見へ其處には水の流れと潺々とし自然の音樂を奏づるかの様である是より下りとなり一と山越へる毎に低くなる、汽車は諫早驛に着いた、是れより輕便鐵道が島原半島へ分岐する更に大村灣の残りの岸を廻り喜々津大草と行き、此所て大村の海に分れ、山の間に入り隧道を越へ長與、道の尾、浦上を過ぐれば九州南西の都、長崎となる。

浦上驛も長崎の内て種々の建物があり學校もある長崎醫科大學は浦上驛より高臺にあたり電車は通じて病院前と云ふ停留所も設けてある位いだ私共の一行も博多を出してより右より左へと巡り廻つて午後一時五十分長崎に着いた。

### 長崎概感

「私は幼少の頃、福澤先生の兒童に世界は斯様な者であると云ふ、読み易い言語態の極く簡易の本に「九州肥前の長崎より船出して」と云ふた様の書き方の讀物を誦じた事がある、其頃の頭には長崎と云ふ所は異國の御隣りて異人ばかり住んで居る様に小さな頭に浮かんだのだ稍や長ずるに及んで維新以前の凡ての文明が此地から侵入した事を思ひ永祿天正の頃織田信長や豊臣秀吉の外國と交通した頃は長崎計りではない肥前平戸も泉州堺も相當に外國船が來た形跡があり日本よりも八幡船と稱する船に御朱印を附し海外に渡航したるが徳川幕府に至て外教禁止の爲め鎖國政治を取れ共長崎丈には外國奉行を置き、極く消極的な通商をして明治維新より今日に至つた、蓋し長崎丈は除外例として在つた其内でも蘭人に許したと云ふてもよい、故に他の英獨佛の人でも蘭人に成り濟まして來たのらしい、であるから、長崎は開

港久しい所だ、其頃でも支那朝鮮は同人種であるから禁制はない様だつた。

維新前の志士は長崎にて新智識を吸収し西洋文明の科學に眼を付け始めた、醫學は申すに及ばず理學化學兵學工學等に至る迄思ひ／＼の學問を長崎に學んで來た夫れが多くは醫術の研究に名を借りて他の方面をも學んだ事は明らかかな事實である。

單に學問計りではない現在日本化して居る工藝品其他種々の物迄三百年以前より外國を模倣し來り其本家が西洋か日本かさへも知れざる程になつた者もある。

私は醫學史を讀んでシーボルト先生の事蹟も多少承知して居た、處が平素別懇なる先輩號は文牛と謂ひ一見識ある人が大正十三年五月九州に遊んで其中にシーボルト先生に關する記事を見て同感に堪へなかつた。

今回の長崎巡禮には必ず參拜する事を心に期し同行の友にも計りたる處賛意を表された故目的を果した、私は敢て其功績を敷衍する譯ではない。

賴山陽先生の崎陽に遊んだ事も先生の記事や詩に明かに成つて居る、其頃佛郎王詩がある是れは奈翁の一代を古詩に綴つた者て其中の一句に「吾遊崎陽遭蠻醫」又「自覺在陣療金創」と云ふ様な句もある先生の長崎に遊んだのは文政元年で三十九歳であるから勿

論シーボルト先生に遇ふたのではないが其以前にも斯様にして天下の志士は長崎へ行き歐洲の事を調べた事に因ても如何に此長崎が文化の眞の魁であるか窺はれるシーボルト先生の日本長崎に來りしは實に百年餘にして我が文政六年八月である。

長崎が西洋文明を輸入する門戸であつた事實に三百餘年故に變化のあるのも當然て其の衰運に傾いたのも徳川政府と行道を共にした様の者である我國も維新の革運と共に門戸を開放し都合の好い便利の處を玄關としたから不便の長崎は自然の運命と云ふより外はない。

現在の長崎は祭禮の濟んだ跡に残りし小屋掛の残りてある如く感せられ、僅かに三菱王國の造船所經營が一面を維持して居るのを見れば強ち資本家横暴とも謂へま

』  
私は長崎に就ては可成各論を書かない積りだなぜなれば見物は一行の者と共にしたれ共何分にも齒齶骨膜炎に苦しめられ精神の籠りし見方がなかつた只だ自分の記憶にある一時を即ち自分の苦惱を少しく書く丈にする。

他は同行の中島君に一任して材料を仰がんとす。

## 西陲の都長崎 (四)

西陲の長崎に就ては前篇にも記して置いた通り遊友中島氏より詳細な材料を提供されたので綴る事にした。

私共一行が長崎に着いたのは十八日午後一時半頃で兼て博多より福島屋旅館に打電して置いたので同館の番頭が出迎て居た早速赤帽と共に荷物の世話をして呉れるので改札口に足を運び前橋よりの通し切符も茲に任務を完了したので手離れた。

一先休憩旅装を解き通された座敷にて旅の疲れを醫する筈なるが、未だ日も高かく其儘宿の二階に立籠る譯にも行かず、運ばれた茶を啜り、名物のカステラに舌鼓を打ちながら、宿の者に見物の順序や地圖を請ひ、方角なども調べ、それに先程中島君が汽車の中で懇意になりし、長崎縣地方課屬後藤須々美氏同縣々參事會員西村久之氏兩人の紹介もあるので、今日の道程には初頭に縣廳へ行く事とした。

因みに長崎縣參事會員西村久之氏は、市内上筑後町に住居を構へ、縣内三四ヶ所

に漁場を有する一流の大漁業家なりと云ふ、同君は長崎の遊覽と雲仙の登攀順路に就ては、詳細に指導して呉れた事を感謝して置く。

市内名所舊蹟を探らんと宿の玄關に立出て、中島君はお手の物のカメラを手にした所、宿の者から要塞地帯であるから寫眞は撮れないと注意されたには、嘸残念の事にて、早速機は行李に逆戻りとなつた

今日の行程の一番始めに縣廳へ自動車が玄關横付となつた、後藤氏の名刺を携へ土木課を訪れ課長に面會し、來遊の趣旨を陳述したので、課長は係りの者に命じ雲仙嶽に關するパンフレットを頒布された尙ほ委細を質し、説明をされ、給仕に茶を出させなど丁寧にてなし、一行が長途の觀光を壯とし、祝福された、加之内務部教育課へも案内され、同課長内山芳郎氏に面會した處同課より長崎縣史蹟名勝天然物紀念調査報告書を一行に分與され、更に日本文化の恩人シーボルト先生の遺物の展覽に就ては特に吾々一行の爲め圖書館へ早速電話を通じ置くなど、斡旋至らざるなき好遇を忝ふしたるに對し、感謝して辭し去らんとすれば、態々玄關迄見送りを受け大に面目を施した譯である。

應前に待たし置きたる自働車に乗り、大通りを西に出づると其處は日支聯絡船發着の大岸壁である、折から繫留の巨船や對岸の三菱造船所のドック等を遠望し、規模の宏大なるに一驚を喫した、次で長崎税關のある通りに出て、南行すると居留地である、昨日入港した船には多數の外國人が上陸して異様な服裝をなし今しも市内見物中と見へた、運轉手の話に英米露獨佛支鮮の人であると云ふ成る程人種の展覽會を見る様で、内地であるとは思はれない。

三百有餘年を経て居る長崎は此不便の三方を圍んだ山を切り崩し、平地を作り、山崖を整理し檀を作り上へ上へと家屋を建て並べ、石垣峻坂を利用したる點は約二十万の人口を抱擁し得て餘りあり、九州第一の都會である事と西陲の一名港たるに耻ぢない、運轉手は慣れて居るとは云へ、峻坂の上下を易々と操縦する巧妙さ、一行も乗りながら冷汗を出す様な所も、平易に行く、其所に天主教會を車中より望見し、支那町を瞥見しつゝ、通り大徳寺前にて降り、石階を登りて見れば、名は寺と云ふも、地名で小公園あり、招魂社、楠社、天神宮がありて、平坦となり長崎灣を一眸の内に眺める景勝の高臺だ、東に降ると天神社の裏手楠稻荷社があり、其所に偉

大なる樟樹がある幹の太さ八疊敷以上もあらんか枝を垂れ、葉がむく／＼と繁茂り、重なり合ひ何と云ふ美事の樹であらうと、態々後の方迄廻つて見た、昨日宰府で見た木にも増して居るのに度膽を抜かれつゝ、坂を下りると、自動車待つて居た、此所は舟大工町で、宮内省御用達で、有名なカステラーの老舗で福砂屋と云ふのがある、二百有餘年前の創業で南蠻人より傳授を受けたのだと聞き、私は諧謔的に此家は唐人の子孫かと問へば、左様ではないと否定する、贅言は擱き、一行思ひ思ひに買求め、親戚故舊へ發送方を依頼する、店主は模形の箱を出し品定をなし、數を記し、委托發送帳には一々郵便局の捺印を取りたる者を出したので、各々行先と數と銘々の姓名を記載した。

前と方角を反對に坂を登つた處が、頼山陽の書て有名な丸山の青樓で花月と云ふ家である、先刻宿より案内し置きたる事にて、樓の主婦らしい盛装せる五十恰好の女將に迎へられ、十五疊敷二間と其傍に上段の間とがある處へ通された、見れば緋毛氈が敷てある、曾て山陽先生は長崎に遊んだとき書かれたのだと云ふ、成程額にも二枚双にも、立派に眞蹟が書いてある、尙ほ此外にも當時の文人墨客の書いた書

帖二冊も巻物も見せて呉れた、何れも貴重な物である。

尙ほ此家には珍らしい枕がある、是れは玄宗皇帝に縁ある絶世の美人楊貴妃の枕と稱し、長方形の長さ二尺餘もあらんか、中には鶴の雛の羽を入れた錦繡に縫ひのある時代の付いた如何様豪華を極めた品に相違ない、女將指先で壓すとひう／＼と鳴く様な音が聞こえる是れ雛鶴の鳴聲に似て居るのだと説明し、今より二百何十年かの昔明の亡命客が長崎に來り居り、此樓の妓に深く馴れ染み國へ歸るとき、紀念にして還へつたとの聞き傳へて居ると語る、其内に茶の用意などするらしいので私等の一行も緩々茶を飲んで居ると夕方になり、萬一氣變りても出来るかとも何んとも云はないが、他を急ぐからとて、茶代と云ふてお可笑いが、少々寸志を置き逃げる様に辭し去つたのも亦た變だつた。

長崎で見物する物の内に、崇福寺がある此等に就ては先輩の文牛先生など殊に詳細に記載して居る、私共は極めて簡単に參詣したと云ふ事丈けを記す、此土地で大釜のある支那寺と云へば誰知らぬ者のない程、名が知れて居る、坂を登り行くと崇福禪寺で、黄檗宗の御寺だ、先づ寶嘉門を過ぎ、石階を五十段も登ると、堂宇、伽

藍、庫裏等、總て純支那式で、特別保護建造物であるそうだが、隱元和尚の扁額、木庵、即非の書、其他、珍寶什物堂に満ちて居る、一行の中、太田稟邦氏は特に趣味深く、樓門に立留り、仰いて批評し、寮の前に立てば、構造を考へ、額が何とか、金字や、郡青色や、青色の簾の様に下りたる文字が、何んだとか、一々自説自明で庫裏は土間でなければならぬとか、云ふて、動きそうもない、他の二人は素通り的に、見るの、早い事、兎謂ふて、他の人が趣味がないと云ふのは決してないが古寺を幾ら眺めても益もないと、早くも見終りて、下の方に待つて居る。

私は前にも云ふ通り、坂道石段と來ては患部に通ずるので、堪へられないのだ、けれども共、稟邦先生が黄檗宗の開祖隱元禪師の書を説明すると云ふに、自分にかまけて行かないのも、友情がないと、我慢して、何が何だか夢中で、説明を聞きながら、見物した、然し、其建物と云ひ、構造と云ひ、確かに美術建築の参考となる可き者である、重ねて云ふが、私共は斯様な、純支那式の寺院を見るのは、今回が初めてである、是が健康であるなら、進んで調査もし、一々文字も書取り、此の紀行文に充分書き加へ、過ぎし跡にて九州を右より左へを讀む毎に、追想すべきだかと嘆息した。

藤波老と中島氏とは私と太田の低徊去るに忍び難きを促して、此残り惜き崇福寺を出て石階を下る、又一と難儀に遇ふ。

今度はシーボルト舊跡へ行く途中濱野町へ出た、茲に二枝と云ふ鼈甲細工を商ふ大きな商店の前に来ると、車掌君が此處が長崎特有の鼈甲店だと云ふて自働車が止まつた。太田君先づ、降りて見ようではないかと一行を促す、買ふのは道樂、見るは寶樂と云ふ諺もあると、同意して、太田中島櫻井と降りたが、獨り藤波老車中に頑張り、頻りに異議を唱へて居たが、多勢に無勢だ、嫌々ながら二枝の舗へ入つて來た、太田君は目的があつたのか、商店の主人に向ひ、鼈甲縁の眼鏡を種々取り寄せ、あれか、是れか、と値の押引をして、撰定中、藤波老も段々其の近くに來り、未だぐづ／＼して居るのかと謂ふかと思ふたら、先程の大不満は何所へやら、進んで、鼈甲縁の然かも四五十金もするのを抜け掛けに買ひ取るに於ては、他の一行は只だ、啞然として目を見張つて、無言の儘、老の矛盾も是迄徹底して居れば、寧ろ其無邪氣の愛すべき好々爺と尊稱し奉るべしだと嘆息した。

太田稟邦氏は呆然とし鳶に渡らはれた形があるが、藤波老に先鞭を付けられたからと云ふて、意地に買はないと云ふ程、此仁にも悪氣のない、矢張り天真爛漫の性格だから面白い、是等の喜劇を考へ、頬を押へ、何がなと見て居たが、是ならと思へば値が氣に入らぬので、遂に見合せた、御兩人は眼鏡の縁を、買ひ入れて、御満悦の態を私共に羨ませて居た。

私共一行も再び車上の人となり、寺町を通り市街最も賑殿の所へ出たと思つたら其所は市營マーケットが善く發達して居て、野菜、魚類、米穀、其他の貨物を買出しに來る者、頗る雑沓して居る、此裏に物産陳列所があると聞いたが、見る必要なしと兎ある角を曲らんと駛り行けば、何の事だ、道路普請で通行止の危に遇ひ、迂廻して鳴瀧町に在るシーボルト先生の舊跡へと急ぐ、遙か坂道を東方に進むと、此鳴瀧と云ふ所は、郊外で、閑靜の地だ、自働車を降り、坂道を數丁辿り行けば、新緑に包まれた山坡、左手にある、案内が此所と示した、見れば内務省史蹟紀念物と標示が掲げてある、入口の側に事務所らしい家があるので、早速刺を通じ、シーボルト先生の遺蹟を拜見したき旨申出て、門を入ると丘陵には鬱蒼とした樹木繁茂し

たる、下の崖を切開き、僅かの石段を登ると、先生の胸像と銅柱に詳記せられた碑文がある一行は參拜して、崖下を見れば先生の使用したと云ふ井戸があり、庭の様な天然石の碑もある、私は戻りに事務所で、シーボルト先生渡來百年紀念論文集と云ふ本を購ひ、紀念として持參した。

一行は此舊跡を探り溪流に沿ふた坂を下り、新大工町より大平橋を渡りて、諏訪公園下に下車し、先程縣より打合せ置きたる圖書館を訪れ、刺を通じたる處、一行が案外暇取りたる故、館長も待ち兼ね今し方歸つたと云ふ、司書は折角であるからと態々奥の寶庫を開き詳細な説明は出來ざれ共と案内し呉れたので、一行は隈なくシーボルト先生の遺物遺品寫眞醫療機械先生の着用せし軍服其他種々なる寶物に説明を附して、吾々一行に自由に見せて呉れた。

茲に於て、先生の舊跡と遺物と對照し、漫ろ當年の遺業を偲ぶ事が出來た。

私共一行の者も、嘸満足を得た事と思ふ、即ち司書に遅刻した事を謝し、併せて厚意を感謝して、館を出た、圖書館の右手に急な石段が奇麗に出來て居る、是れが西山と稱する高峰で、諏訪神社を祭れる國幣中社で、其所には、武徳殿もあり、シ



「ポルト先生の記念碑を始め、他の獨逸人のもある上の平坦の地は公園で、茶見世や、多数のベンチもあり後の山は緑の若葉に包まれて居る、先づ社殿に参拜し一行の前途の無事を祈り、茶見世に憩ひ澁茶を啜りながら、南方を見れば是れは又た見晴しの善い事、油を入れた様な、紺碧色の灣は脚下にあり、船舶の散在して居るのも、市街の蔓の輝きも、櫛比せる屋根とを併せ鳥瞰すると何となく京都風に落付きがある、先日山陽線を通るとき東京電氣工業株式會社の専務深澤又一郎氏の談と完く符合した、風光明眉の古き西陲の都である、私は諏訪神社へ行きたかつたが、何分石段を登ると云ふ難事があるので止めにした、石段を登り下りには必ず下顎に影響するので、今は絶對絶命に迫り、中島太田藤波の三君に分れ此所に小憩する事にした、三君は高き西山に登り眺望を恣にして居る事であらう。

私は一行の還る迄、此所より長崎を瞰視した、長崎は缺けた摺鉢に似て居る、多く缺けた所が洋に通ずる港となり、少しく輝の出來た所に汽車が通ずる様になつて居る、底の平坦地は山を崩し海を埋めたから出來たのだ、山を崩し岸に家を建て、坂を造りて、蟹の様に横這をして歩くのだから、見物人には骨が折れる、斯

る盆地は冬は温かくて結構だらうが、夏は頗る暑苦しさに見受ける、それに昔しは何でも、長崎でなければならぬが、今は便利の所に奪はれ衰退の傾がある、見よ居留地でも何んでも、空屋計りて、多くは日本人が住んで居るか、てなければ荒廢になつてゐる、又た昔日の觀なしとは土地の人が云ふて居る、是れては上海とは競争は出來ない、長崎人、以て如何となす。

右は私の心にある長崎の短所丈並べたのだ、長所もある、古き開港所を保存して京都式に、舊蹟保護に専念し、遊覽地とするのである、夫れには全力を傾注して、島原半島の交通を便にし、打て一丸となし、遊客を引き付ける策を第一とす。

兎角する内、諏訪神社へ参拜に出掛けた三君も戻り。(小生は一足先へ下りて自動車の中に待ち居たり)來りて車中に入り、西山の風景など語るのを聞きながら、大村町の福島屋旅館へ還て來たのは夕暮れてあつた。

#### 福島屋旅館の巻

福島屋旅館の事は、茅原華山先生や、文牛先生の記事で、略ぼ承知して居た、來て見ると、地の利もよく、閑靜で、設備萬端行き届き、座敷の工合もよく、殊に吾

々一行に當てられた室は、奥二階の見晴しの善い十二疊と、表の見ゆる一室と都合二室で、其一室には伊藤春畝公の書た額が掛けてある、私は市中見物に疲勞し患部の腫脹を増したので、悲觀せざるを得なかつた。

因て一行の太田氏にワクチン療法の記事を謀かつた兎に角それも一種の療法だからとて、葡萄連鎖球菌混合ワクチンを買ひ求め、早速注射した、入浴も簡單にして、晚餐に向かつたが、結構の御料理も、折角ながら見物する丈、牛乳や粥で濟ませるのも樂でない、されども自分の身には替へられないから、兎も角も臥す方が善からうと一行も心配して呉れ、自分も其氣になり、床の中に入れ共、疼痛が益々來るので女中に頼み、氷嚢を求め氷罨法をする事にした、所が此の旅宿の女中は誠に靜かて親切で、心を傾けて看護をして呉れた遠い旅路に出て、斯る親切の扱を受けると、世の中は人情紙より薄くなど云ふが、一概にも謂へない、一夜宿りの客にも、心から盡して呉れるのと、否とは知れる私は心の中で感謝して居た、渡る世間に鬼はないと、暗涙に噎せざるを得なかつた、そして翌朝も食事のことも氣を付け又氷を入換へ、私の旅館を出る迄も、親切を盡して忘れなかつた。

一行と共に福島屋旅館の待遇は頗る氣に入つたと謂ふて居たから萬事に氣が付いた事を物語るに充分である成程先輩の言は虚に非ざる事をつくづくと思つた、今後長崎へ行く人があるなら私共は福島屋を案内したい。

朝の用も濟むだので今日十九日の行程も一切の事を中島君に依託した、中島君は熱心に今日の行程を考へ、細大洩らす事なく、長崎縣の土木課や社會課や學務課で取調べ一行に便利を計りたるは感謝せなければならぬ茲に懐かしき長崎に分れて長崎縣で目下世界に紹介せんとする縣立公園たる温泉嶽を探らんとす、此道程こそ中島君の苦心のある所て、今回の旅行には忘れてはならないのだ。

午前八時旅舎を出て長崎發八時二十分諫早迄戻り宿て契約し置きたる自動車にて諫早驛より島原半島を巡らんとす時に十九日午前九時半であつた（長崎より諫早迄の汽車の中へ續く）

長崎より諫早迄の汽車の中

十九日午前八時二十分長崎發て汽車に乗込んだ、すると福島屋で女中は皆別嬪で客ずれがしない中でも年の若い奇麗の子に太田氏が酒の爛が熱つ過ぎると怒鳴り付

けたら夫れぎり顔を見せなかつたよと云ふから私は辯解した、皆んなが飲んで好い気分になつて居た時に別室に私の衣類を疊んで居てね、貴方様は齒が痛みてすかとそれはく御殿女中の様な温順かさて、氷で御冷しになつてはと下へ降りて行き氷嚢を持つて来て當て、居て呉れたなんと云ふ親切の事だらう其儘枕元に付いていたのだ、一同ふんと云ふて笑ひ出した。

其内に種々の談が出た先年大震災の時被服廠から還つて来て縣廳で山岡知事に報告したら報告の腰を折た山岡は氣の小さい男さ。……

時に先年文牛先生が別府で大芝惣吉氏に會談した事や現牛塚知事は中々縣民の氣受けが善い何んのと談話は次から次へと遷り昨日崇福寺では苦しかつたの或は、鼈甲屋の喜劇は今度旅行中の秀逸だつたよと誰やらが謂へば、随分思ひ切つた矛盾で寧ろ呆れたよ、けれど、其所に紫水先生の生命があるのではなからうか、所が諏訪神社で平癒祈願をして呉れた爲めか今日は餘程樂になり談話が少しは出来るよと感謝した。

何んだか少しも取り留めのない様な話を私の隣に居る品格の高い紳士が聞いて居

た此紳士が貴君方は長崎見物ですかと談しかけられた左様で是れから雲仙に登攀の積りて昨日縣廳の方から雲仙に關する種々の便宜を得て参りましたと答へた、そこで私は名刺を出し敬意を表したると直に名刺を交換して呉れた、見れば長崎控訴院檢察帆高壽一とある私は又日向へ行く順序を話したら帆高檢察は私も九州の地方裁判所を巡廻する序に多分此二十一日頃は宮崎に行く積りだと云ふ一行も二十一日には宮崎の神田川旅館へ投宿の豫定を語れば檢察も同じ宿だと云ふ日向に行き五箇瀬川を溯り高千穂に行き天孫降臨の地を調べたいと語て居た其事私共も是非日向に旅行したら吾々民族の祖先の墓参てもする積りて許す限り日向を視察したい殊に青島も其内に含まれて居るし古墳の有様も見たい延岡も美々津川もと謂へば帆高檢察も同感で私も今九州に居る内に地方裁判所巡視は奉職の表向きだが實は日向が目的なんだ、其内でも延岡から自働車で高千穂の靈地を視察するのが今回の主なる者であるとして述べられた、斯様な譯だから知己になるのも其主義が併行したからである。話をして居る内にもう諫早だ、夫れては此所で御別れをして何れ又日向宮崎の旅館で篤と御話し致しませうと私共の一行は下車した。

## 雲仙（温泉ヶ嶽）

雲仙は古來温泉嶽と謂ひ故に温泉と書て雲仙と讀む、現今長崎縣で此雲仙を縣立公園として全力を注いで居る事は目覺しい者だ、夫れは汎太平洋會議に東洋の公園として九州では此雲仙を中心とし愛野小濱千々岩島原の海と山と温泉とを包含し天草の洋をも取り入れての風光明眉の一大公園とした者と今一つは別府を中心とし日向の一部と宇佐耶馬溪安蘇とを包含したる大區域を以てする物を今回提出する由を縣で聞いて居る。

左様な譯であるから雲仙登攀を極めると云ふ事は遊子をして憧憬を抱かしめずには置かない、夫れには汽車で行くより自働車で行き、見たい所で降り、自由に行かうと考へた。

諫早の町を通つて東へ行く、諫早も古びたれ共可なりの町だ、町を出抜けると早諫早平原で、愛野迄は實に平坦な田圃で、農作も能く行き届き、麥隴熟れて黄金色をなし、縣道を進むと、愛野と云ふ村に着く、少しく行くと千々岩だ、愛野千々岩の間は一方有明灣に、一方橋灣で、狭まくなる、此所が千々岩の町だ、町に入ると

突き當りの角に洋風の腦病院がある可なりの設備である様だ、其人家の並んである所を通り抜けると山に差しかゝり、山を下ると小濱灣が、其下に見える、此邊の風光は、浪隠かに岩に古松のかゝりし處へ白帆を張つた小舟が見へる、山の中段の、曲角の處へ行くと、自働車を止め、中島君直ちに寫眞器を取り出し、撮影し、再び乗りて山脇の海邊を進み行くと、風景は益々絶佳だ、此灣を今橋灣と改稱して居るのは日露戰爭の當時軍神橋中佐の出生地が千々岩であるので、紀念する爲めに、橋灣と云ふそうな、又た橋中佐の碑も立てゝある、是より小濱分になるのだ、小濱と云ふ處は雲仙の西にあり小濱村の内、辨天鼻、富澤、北野、小濱温泉、湯崎とある今千々岩より温泉迄、軌道建設工事中である、小濱温泉は實に橋灣の船着で、長崎裏の茂木港より海路がある、温泉宿も、相當の設備らしい、客も相當にある様子で稍や賑ふて居る、湯崎より山にかゝり、道は平坦に切り開かれ、自働車の登るに何の危険もなく登り下りにすり替へる事も樂に出来る程で累旋狀に登り行く事數刻にして、矢岳と絹笠山の中間に爆裂火口の跡が、温泉で海拔二千四百尺の地なり、此邊一帶の地に温泉湧き出て、樹木鬱蒼たり、四季の眺め各其趣きを異にす、今は晩

春の候にて霧島躑躅の紅、紫、白、種々なる花は研を競へり我等一行も無事に雲仙に着いたのは十二時に垂んとして居た、目的の有明ホテルに落付、一同湯に浴し、三階より四方を眺むるに靈峯聳へ見ゆ、西北に見ゆるは普賢岳、最も高く四千四百六十一尺、次て野岳、矢岳等の連峯を總稱して、温泉ヶ嶽となると云ふ、晝食は食堂に行きて済まし、白雲牧場、絹笠山の逍遙道に至り途中の小湖は紺碧色をなし釣をして居る者もある、氣象臺の風測所の立て、ある所に登り、眺望するも愉快である更に地嶽と云ふ所へ行けば、瓦斯熱湯を噴き出す處三十ヶ所もあると云ふ、其内邪見、叫喚、無間、八萬地獄等の名稱あり噴煙鳴動白煙濛々として硫黄臭あり、此邊一帶は、皆温泉場より、近い散歩に極く好適の地なり今日は舊曆四月八日とかにて普賢に因む御堂が此の地獄にありて村人が賽者となり參詣の老、幼、男、女賑ふて居た一行も好固の紀念と撮影し有明ホテルに引返し宿の拂を済まし曩に諫早より乗り來りたる自動車にて反對の方向に山嶽の間を縫ふて下山し順路村落のある處に出れば櫨の木のある林や椎や樟や盛り上りたる様の繁茂の山里を見ながら島原の町に着いたのは午後五時三十分頃であつた。

島原と云ふ町は古くより聞く名だ松原氏の舊城下で寛永十二年所謂島原の亂のありし所だ此半島では最も殷盛の地で海路の行通開けて肥薩方面より長崎に行くに便利の港である、私共の一行は長崎より諫早を経て小濱雲仙を過ぎ此地に來たのだ、町は道幅狭く重に漁師町を通つて港へ着いたから時間の餘有もなく町を見物する事が出来なかつた、船宿にて乗船券を求め休憩し澁茶を啜つてゐる間に乗船準備の沙汰があつた茲て書葉三四枚出す。

六時には相生丸が出帆するので艇に乗り荷物を入れて本船の二等室に入る此の相生丸と云ふのが島原より三角へ一日三回の定期航海をして今の時間が夕方の最終になるのだそして僅か百五十噸の客船で乗客は可なり込み合つて居る六時とは云へ日の長い頃だから、皆甲板に上り船の動き出すのを見ながら、島原海岸波に洗れた、島や、島に生えて居る松を見ると、松島邊にある島を少し分けて置いた様にも見へる、相生丸は吠へる様の汽笛を鳴らし十一哩の速力で進行を始めた島原は段々遠く距り稍や洋に出ると天草の方迄雲乎山乎夕靄に霞みて見え、温泉ヶ嶽も日暮方の爲か薄墨色となりて遠ざかり、夜の帷りが降りかけ船の中には電燈の付く頃甲板より

降り、來りて、船室に入り、横臥して居ると、他の一行も皆な室に入り、過ぎし旅の話などして居ると、船のボーイ君が茶と菓子とを持ち來り一行に進める、臥しながら茶を喫し菓子をつまみ、三角に着くのも間もないが着いたら三角に三時間も待たなければならぬと、其間を如何にするか、問題で有つた、其内に船は三角港の棧橋に横着にされた、一行手荷物を持ち、上陸す、他の客人もぞろ／＼と皆な夜の三角に上つて停車場に行くもあり、其他思ひ／＼に分散した、私共の一行も別に當てのあるでもなし、一先づ三角驛に行くより外はないので、驛構内に入り、休息して居ると、中島君は熊本へ電報を打つとて郵便局へと出かけた、他の三人も未だ汽車の出るには餘程の時間だが少し散歩でもして來るかと思つて見たが、見知らぬ土地の夜と來ては更に見當が付かない、止むを得ず引きかへす、其内に夕食の用意もないが熊本へ行つてと謂へば十二時過ぎとなる、所謂時間外であるからと、斷られても詮ない事と今更半宿で驛附近の茶屋で一飯も氣がきかない、結局驛前の船宿で一休みし、何か喰ふ事になつた、夫れて一行も又々荷物の鞍替をして見世商ひをして居る船宿に來た、此家に上り茹で卵と、牛乳ビール、其他雜品を取り寄せ、雜談を

なし、時間つぶしをして居た、其内に汽車の時間十時何分かになりたれば驛にて切符を求め、熊本行きに搭乘した、是れて安心の態で、眠るもあり考へるもあり、患苦の私もある。

一体此三角港と云ふは有明灣の内て宇土半島の突出して居る處にあり、有明灣で漁獲せる魚類は多くは此港より、熊本及其他の方面へ輸出する爲めに、特に三角から鐵道の敷設があるのだと土地の人は語つて居る。

島原から出る船が晝頃でも有たら海洋で遠く天草の洋迄も水天髣髴の間に味ふ事も出來たらう、登つて來た雲仙ヶ嶽も海を隔て、遠景を眺むる事も出來たらう。

自働車の力を利用したとは謂ひながら難行苦行して突破した、靈山を、更に模様を替へて見直すと云ふ事が如何に意義を有するかである。

例之は置物の石を見ても前から見後から見ても天然石で山の形であると更に裏返して見れば如何など、骨董癖の老人が額に手を當て、悦に入るも亦同様な譯になる三角を只だ漁村の港位に簡單に見る譯には行かない、此所は長崎より熊本へ又熊本より長崎への必要な便利な交通の位置にあるからである、此點は長崎の將來採るべ

き方針の内て一番先に致さねばならぬ事を已に記して置いた。

汽車は油断なく進行し熊本驛に着いたのは夜の十二時頃であつたブラットホームを出て待つて居た自動車に乗り、船場橋の研屋本店に着し湯に浴しビールなど飲み寢に就たのは彼是一時であつた、三角より熊本迄は二十二哩である。

## 九州を右より左へ (五)

### 熊本之雨

私共一行は十九日午後の十二時になる頃三角より直通で熊本へ着いた。

熊本の研屋本店は同市船場橋々畔にあり一行は夜中着いたので研屋は何れの場所だか皆目見當がつかない、然し電車通りではない、夫れに船場川に沿ふて居るので安外静かな所だつた、着いた時は夜遅いので只寝るより致し方がない、一行の者がまだ仕まい酒か何か飲つて居るときお先きに失敬して床の中に這入り二三葉書を書き熊本へ無事に着いた事を郷里の家や友人に發送する事にした、其内眠くなり何時しか眠りに入り後は白川夜舟で別段夢も見なかつた。

朝川瀬の音に目を覺まし日もまだ昇らないのか薄暗い様である、床の中で聞くともなしに耳に入るのがどうやら雨の様だ、昨日夕方から蒸し暑かつたのは其爲であつた。

晩春初夏の候柳の枝に軟かい新芽が伸び／＼とした小枝から下向に垂れて小雨に

濡れたのはひとしほの風情である。

床の中で今日は雨降りだな旅に出て雨蕭々と来ては見物には不向きだ、けれど今迄休みなく飛び廻りての疲労もあるからまゝよ他の者も未だ目が覺めない様だ床の中で緩くり此川邊の雨に濡れた樹でも眺めながら眠むらうとしたが思ふように眠られなかつた。

飛びあるく燕もしばし雨宿

こんな駄句を書ひて見た、すると、藤波翁は眠を覺まし起き出した、毎もながらお早ひ事て、もう顔洗ひに出たらしい時計を見れば朝の八時だから如何に昨夜が遅いからと云ふても今日の道程もあるに餘り悠長にもして居られないと、欠呻二つ三つ漸く床を這ひ出し一行の内へ一番寢坊の太田稟邦先生を揺り起し、一同朝茶を頂き朝禮をかわしながら今朝の雨は知らなかつたと誰れやらが謂ひ出した、邦を出てしよりだものと笑ひ出した、時に句が出来たよ、先刻書いたのを示したら是れは面白い適切だと早速葉書に書くも現金だ、時に今日道程はどうすると云へば、先づ朝餉でも食べて考へようは、至極呑氣だ其内に朝餉も運ばれ食事も濟むだ、時に女中

を呼び此邊に齒科醫がありますかと尋ねたら此橋を渡りて本通りに行くといふ案内を致しますと云ふに私は番頭に連れられ、高橋と云ふ齒科醫を訪ひ診察を乞ふたら餘りに手を御附けにならない方が好いてしやうと塗布薬を付けて呉れた、夫れから名刺を出し福岡以來の事を話し自分が醫者である事も知れ精々含嗽をなされよと云ふ、料金を拂ひ禮を述べ宿へ還ると一同は待つて居た其内に雨も小止みになれば豫定行道の見物 (一) 熊本城 (二) 清正公廟 (三) 水前寺 と決定した、道順としては水前寺、熊本城、清正公、が適當だと云ふに案内人任せにした。

水前寺 (出水神社)

宿に命じて自働者を雇ひ車掌君が案内役を務める、私等の一行四人の内洋傘の用意のないのは私ばかりだ、けれど、此兩位ならレインコートで澤山だと九時半頃宿を出て東へ向かつて熊本の殷賑の商業地を見ながら進んで行くと近來市街の市區改正で大通りは幅の広い電車は復線て往復して居る研屋旅館は熊本驛に近い所だから市の西南に當つて居るから東へ市を横切るには市中繁華な所を通過するのは當然だが流石に九州の中央都市丈ありて規模擴大だ、夫れに何となく今迄見て來た様な都



市とは趣を異にして居る福岡に比すると稍や暗い様な感じがするが商業は却て活發に發展して居る昔より肥後米としての九州第一の産地だから米穀取引所もあり、地勢から見ても九州の中央に集注す商人も多いのは明かな事て他の都市と趣きの差ふのは此市には海が附ていないのである。夫れに北東南は遠く連山で圍繞せられて居るが決して接近して居ない佐賀久留米へ續いての大半原である、夫れに大藩の熊本は何んと云ても大鷹に出來上つて居る故に商業も活躍して居るんだ。

であるから此市内を通り越すには時間も相當にかゝる電車で見ると市内だか市外だか判然とはしない然し商業區を脱したと思ふと今度は學校だの會社などの建物が至る處に見へる熊本は學校の澤山ある處だと聞いたが成程と思われる何れの都市でも學校は郊外でなければ廣い敷地が取れないのは通則だが出水神社のある水前寺は一村越へてとばかり思ふたら電車が神社の入口迄來て居る何だか電車に跡を跟けられて居る様だ今一所見の内書き洩らした市中を流れて居る大きな川がある是が白川と云ふのであると車掌君が説明した、今てこそ市内でありますが以前は郊外であつたと云ふ、白川は阿蘇山より出て居る名高い川だ明治の初年には此の地も白川

縣と稱して居た事もある。

自働車の止た所には鳥居があり樹木の蔽ひ掛つた木の下暗く眞に鬱蒼として居る此所は遊園地になつて居て種々の娛樂所や茶見世などが出來て居る折から此の雨の中に濡れ鼠の様になつて居る何れかの小學生徒の遠足らしいのが賣店や茶店に充滿して居て雨に難ませられて暫らく休憩して居るのを見ると私等の子供が遠足に出て雨降りて濡れて還つて來ると比較し憐れの情を催さずには居られない。

私共は雨を衝いて公園を右手に見ながら先づ出水神社に參拜した此社殿は細川家の祖先を祭りし者なりと云ふ。

今は出水公園となつて居るが、此の庭園は昔し細川幽齋公の設計で、細川侯の宴遊の爲めに出來たところだといふ其趣きと謂ひ、岩石の布置や筑山の風情、天然に湧き出す水その豊富さ清洒さ池中の淺き處でも、深かき處でも、自由にブク／＼と湧き出す水の奇麗な事針一本でも判る程である、出水神社の前には鯉が澤山放てあり金網の中には鶴が遊んで居る然し鶴や鯉を無理に飼つて居るのは、却て風致を害して居る、昔しこんな俗の眞似はせなかつたであらう。

私共は肅々たる細雨の中を筑山のある處より更に東に出て馬場でもあるかと思ふ廣場に出た其所に長岡護全公の銅像がある是より富士山形の築山の後に廻り池を隔て、茅葺屋根の古今傳授の間と云ふのを正面に見た、池に架けたる橋を渡り、通りに出て一週して前の木の下暗に戻り、庭園を極めた、此出水の美麗なる江を、江津湖と云ふて、長く續いて行つて居ると云ふ事だ。

雨の降る、水出寺公園は、又た格別だと、敗け惜みを謂ふ様だが、風情は全く晴天より雅趣があり、布石や、築山の芝が、雨に濡れて居るのも、潇洒として煙れる中に一段の風流を見せて居る、遠がは幽齋式だと嘆賞した。

大名と云ふ者は大藩になると庭園や築山を造り宴遊をして太平を楽しんだ事を今更ながら偲ばせる金澤の兼六公園高松の栗林公園岡山の階樂園は著名だが水戸でも廣島でも相應に皆ある、今の富豪も少々似た處がある。

#### 熊本城（公孫樹城）

水前寺公園を究めて自動車を持たせて置いた大樹の鳥居前に来て割乗熊本城へと案内を頼んだ今度は新市街と思われる電車通りを抜け西北の方へと駛走した矢張り學

校や會社やのある所を行くと又た川に出た白川であると云ふ段々市内に接近して來る何時の間にか廣々とした處に出た、すると城趾が見へる城濠の松も見へ出した稍や暫らく濠端を走ると白聖の建物が城濠の南に屹然と洋風に建てられ居るのを熊本市廳だと教へられた尙城濠に付て行くと城濠に入口がある其濠の角に谷村計介之記念像でも出来るか工事中で木標に書いてあるのを見ながら城内へ入ると舊御本丸で第六師團司令部がある其前にて自動車を降り營兵に請ふて城内に入る事を得た是れが表門である、堅固の石垣の間をだら／＼登りに曲り曲つて行くと石垣には明治十年西南役に砲丸に打たれた跟蹟が此所彼所にある尙ほ進んで登ると元櫓のありし跡があり此所より内は司令部になつて居て參觀を許さない石垣の上は平になり西南の役に天主閣のありし處も外の櫓も皆焼けたのだと説明す今向ふに見へるのが宇土櫓と謂つて現存して居る是より城上に登る稍や廣き見晴しの良い處で中央に井戸があり其隣に大砲が具へ付けてある是は最近迄午砲を打つたのだと説明して呉れた此見晴の高臺から市街を見ると市街が遠くにもある様に見へる此時も雨は少々降つて居たので充分の眺望は出來ない然し熊本の市街を見るには何の差間もない種々指乎し

て教へて呉れたが元を知らないから只聞くばかりだ、其時熊本市の人で他の客を連れて來た人が精細に城内や庭や城の出來る時加藤家に怨を持つ者が築城の際混り入て其者の名を何某とか謂つたが記憶せざれ共人力で大石を首に掛けて來たと云ふ、石を説明した其所には當時の事を記載して建札がしてある、けれど降雨と急がれるので遂に記す事が出來なかつた、今となりて記事を綴るには残念である庭園も瀟酒な造りて泉石がある一つの亭が出來て居て先年陛下の御成りになつた記念地として遺されてあるのだ、市街を見ると熊本市は綠蔭に包まれて居る程市中に樹木が多い實に熊本の様に樹木のある市街は他には見られない、東南に小山が見へるが、是は有名な花岡山だ、明治十年西南戦争の時に賊軍は田原坂榎木方面より熊本に迫り六十日も熊本城を圍んで市街は其時大部分兵燹に罹り、大手前の廣場も占領したと云ふ事だ、其時砲門を敷いて天主閣を砲撃し日に／＼城門に迫まつたが、堅城はとう／＼抜けない、更に花岡山に砲列を敷いて城を砲撃したが砲丸は充分届かないのだと云ふ薩南の健兒が肉薄しても城を楯に應戦して遂に援軍の來るの待ちあうせた、故に薩軍も勢屈して陣を引き故山に歸るより致し方はなかつた、谷干城の名も今に

至る迄否末代迄も朽ちない熊本の城と共に永遠に青史に留まるのだ、私共も城の許可せられた處は限なく視察した歸りながらの説明を聞くと天主閣や他の櫓も賊の砲撃で焼失したのではない谷干城の戦略で焼いたのだと云ふ。此師團司令部前の廣場は何萬坪あるか、城内の堀も老松も三百餘年間の密林となり樹間を通ると晝尙暗く此堅城も手入れの跡が見へない天主閣の趾も出來ないが石垣に生ひたる雜草や葛蔓に薙びこられ一面から見れば廢城も同然だ、城の石垣のある處即ち本丸の廻りを巡りながら宇土櫓の下に來て見ると櫓の瓦は落ちかゝつて無残や修繕も出來ないらしい空しく烏の栖むに任せるとは、市でも是非本丸丈けても營繕をしたいと寄附金を募集中だと聞く、段々西の方へ行くと森林に來た此處に岩根橋と云ふ橋がある夫れから樹木で暗くなつて居る高き處に加藤神社が祀られて居ると云ふが車中で遙拜し、城内に深い堀が今見ると恰かも谷でもある様だが谷ではない城内の要害に作りし者で、西南戦争の時は將校の夫人や子供は皆堀の中に避難して居た、其中で戦争最中生れた子供が今は成人して相當の軍人になつて居ると云ふ事も話した、實際熊本城を表から這入て堀のある處を通りて見ると、城内など、云ふ事は少しも感じな

い深山に分け入り道に迷ふて居る様に思はれる是より北の方は益々高く山となり、大木計りだ漸く通り越すと新市街てはあるが郊外見た様の處へ出て来て聞けば清正公の廟は此道から直ぐ參道へ行けると云ふ土地不案内の一行だから車掌君任せにすると餘り立派でもないが兎に角森林の暗みから來ると明るくなるなど、云ひながら自働車の止まるのも知れなかつた。

清正公廟

肥後と云へば熊本を熊本と云へば加藤清正と聯想される其位清正公は世上に膾炙せられて居る其清正公の廟を參拜する爲めに雨を衝て來た、長い參道を通りて新式の仁王門が見へる門が新式なら中の像も新式だ其上現代の獅子とは益々振つて居る世は開明になつた蠟燭の代りに電燈が取り付けられるんだ者今少し經つと此長い石段も歩かないで、電氣仕掛けか何かで三越にある様に乘て居ると自然に輪轉されて行ける位になれば世話はない、實際幾段もくも石階を登りては歩道となり又石階となる斯様して行くのが矢張り靈廟に壯嚴味を増すと云ふ者かは知らぬが前の仁王門が鐵筋コンクリート建築なら何故參道を改良して參詣に今少し便利なケーブルカ

ーを架けないのか熱心なる信者は寄附金を澤山出して輕便にして貰ひたい、然し私には注文がある成るべく地下電鐵か何かで麓から本妙寺前行きの早道を作つたならば例の右や左の旦那様と妙な聲音を聞かなくても濟むから尙ほ結構だ、夫れが妙に石段を設け平地を造り平地の所には必ず賣店や茶見世や俗惡な家がありたがる彼様な物が何んで靈廟を神聖にする助けとなる者か、行けば行く程、本妙寺の前から廟前迄が左様である然し何んと苦情を謂ふても最早清正公の廟前に來たのだ、一行拜殿で參拜し、右手に廻りて本堂の裏に古びた石碑が建てある表に贈從四位藤原朝臣清正之墓としてあるから之れが公の靈廟で永久の殿堂だと崇敬の念が起り、自然に頭を下げた其右に大木土佐守の墓もある是れ公に殉死した忠臣であらう。

清正公は何んと謂ても偉大な大人格者で武辨の豪傑と計りに見て居てはならない茲に參詣に來る人々は、清正公を主とするのか公の信仰深かゝりし日蓮宗の南無妙法蓮華經を尊崇して來るのかを考へなければならぬ、加藤清正が日蓮を信仰した事は戦に望むにも何事をなすにも實に其信仰と切り離してはない様だ、此信仰の篤い處犯す可らざる信念があり、人格者でも有つたのだ、信仰に生きたから、彼の肉

體は三百有餘年前に世の中にはないけれども、今に靈魂は生きて居る、斯る信念の強い股肱の忠臣があればこそ、豊大閣の偉業も出来、大阪の城も、名古屋の城も、熊本の城も、堅固に残り、日韓の合併ともなり、兒童走卒も、名を聞いて人を知るのだ、又た日蓮上人を後の代迄輝かせるのも此人格者が、後楯をして居るの觀がある、清正公が日蓮だか、日蓮の清正公だかさへ疑れる様の處もある、恐らく此廟に來りて參詣する者に單純に清正公廟だから、加藤清正公を崇敬する丈に參拜する者が幾人あるや、私共は廟に御參りして直ちに歸りに向かつたが、參詣者を見れば皆な御題目を唱へて居る拜殿に居る程の人が清正公を拜するに御題目を唱へる其位清正公の信念をして現世に生かして居るのだと斷じた。

是て熊本の名所も見た、いざ下らうと本妙寺も寶物も御預けにして、石段を降りて來ると、異様の形をした右や左のと御出てなすつた、懐中から小錢を取り出して與へたら喜んで居た、一同門前に來て自働車を驅り宿へ還つて土産物の朝鮮飴や繪葉書を買ひ晝食を命じた、所が鯛ちりて始めての御馳走だ、一行の喜ぶ事限りなし、其内に御酒も出て鯛ちりて一杯聞こしめして悦に入りて居る、殊に女中さんのお手

の内は格別だと稟邦先生の御意たらぬ、隨喜の涙をこぼさん許りだ、大皿に盛り上げて來た鯛も野菜も残り少なに平らげ、時間も費したので汽車時間も迫まつて來たけれど、お腰が大磐石の様だ、然し斯くて在るにあらねば促し立て、漸く切り上げ宿の者に送られて、二十日の午後の二時六分發鹿兒島行の列車に乗込むだ。

#### 熊本を去に臨んで

熊本へ來て市中見物も概括的に見た九州としての熊本は今少し大成さして見たい是は熊本縦横策であるが少なくとも九州の首都とならなければ意義はなさない、歴史から見ても、阿蘇山の威靈から見ても、無理ではないと思ふ、阿蘇の宮司は二千有餘年の歴史を以て居る、中世には佐々成政の領地なりしが罪を得て沒收せられ、功臣加藤清正大分を、小西行長に宇土方面を分ち、彼の關ヶ原役後は肥後一圓を加藤氏が領有する事となり、肥後一國で七十餘萬石の封地であるから、如何に富饒の地であるか窺れる、加藤家没落の後は宇土天草を天領とし、他は概ね細川侯の領地となりて明治維新迄來たのだ、幕府時代でも其位豊富の地で所謂沃野千里で即ち地の利を占めて居るのだ、今熊本を瞥見するに發展の餘地は自由自在で産業の興る

のは一擧手一投足にある、鐵道は福岡より鹿兒島縦貫の中央にあり更に大分より有明灣に横貫鐵道を連通し、九州中央で十字點を造らば交通の便は所謂四通八達だ、斯くして四方に號令する事を得ば福岡何のその、他の都市は最早語るには足りないではないか、私は熊本へ來て見る者は何かと問ふたら城と廟と庭だと云ふ、何故市の商工業は斯様だと謂はない、其點を特に考へないのは遺憾千萬である、恐らく積極的産業政策感念が薄いからではないか。

今一つには日本の名城たる城趾を荒廢の儘に置く事は残念だ、昔の城趾で現存する中では宮城は暫く措き此熊本が第一で大阪名古屋仙臺等これより以下であるとの定評がある、故に市に關係がないとするも、特別記念造營物にてもする考へが無くはならない、斯くして地下にある英靈をして熊本の將來と共に永遠に傳へるのが熊本人が取るべき第一の策ではなからうか、敢て熊本市民に問ふ。

## 九州を右より左へ (六)

熊本を後に鹿兒島へ

今朝の雨も何時しか晴れ午後二時には日が見へて來た、兎角旅には雨は禁物、雨上りの爲めか蒸し暑い一行は皆鹿兒島行の特急に乗り汽笛一聲残り惜しき晝食に分れた、車中にて愚痴の出る事、中にも稟邦先生は鯛ちりに餘程未練があると見へ國へ歸つたら早速に傳授して、ちり料理を調べさせると仰せらる。

熊本を出てし計りて、車窓を見ても右も左も皆未だ雨の上りたてと露があり、遠山は雲に蔽はれて見へず、何の趣味もない、其内宇土に着、昨夜三角より來て此驛より本線になつたのだ、之より汽車は進みて山又山となり、漸く眼先が變つて來た、小川有佐と過ぎ八代に着く、八代は熊本に次ぐ都會で殷盛の地である、夫に球磨川に沿ふた町で西は八代灣に接し球磨川を利用して材木薪炭が皆な此所に揚げられ、之等の集參地で風光の勝地であるのみならず、八代には見るべき者も、少なくはない、悟真寺と云ふ寺があり南朝の忠臣菊地武朝の創建にして山水秀麗の地なり

此所に懷良親王の御陵もある、同親王の御旗擧をなせる鎮西府の跡もあると云ふ、夏期には遊んで球磨川の急流を舟で下る設備もあり、恰かも富士川や天龍峽を下ると甲乙はない、寧ろ上かも知れないと云ふ、故に遊客が夏は中々多いと云ふ、驛で相客が五箇の庄の在る所を指示し説明して曰く、遙か東の奥山で球磨川の上流川邊川の源に沿ふて、久連子、稚原、縦木、葉木、仁田尾の五村を總稱した名で壽永四年平家没落の後平維盛、清經等竊かに逃れて此地に住し、其子孫が分れて五部落になり、幾重にも山岳を以て圍まれ行路嶮難容易に至る事が出来ず今に於ても言語風俗を異にして、大古の民の如く、他の部落とは決して結婚せずと云ふ、其外河合又五郎の墓があると云ふがそれは人吉にある八代よりは鐵道沿線の風光が車窓より見え乗客に居眠りの要はなくなつた、是れから長い間球磨川と鐵道線が絡み合つて人吉迄行くのだ、球磨川下りを試むるには汽車で人吉で降り八代へ下るのが路順だと云ふ其間十六里もある、此の球磨川は水源を日向西臼杵郡と球磨郡との國境より出て人吉の東北にて五箇の庄より出る川邊川と合して人吉盆地に落合ひ到る處の山より流れる小川を合して漸く大河となるのだ、恰も利根川が西入より、片品川が東入よ

り出て、合流して利根の流れとなるのと同じ譯合だ、そして肥後と日向と薩摩の連山になる、山脈が重疊して夫より出る小川は皆此川に合する、汽車は此連山の谷合球磨川沿岸を通るのだから、其谷も深いし、流も非常に急流だ、急流だから、随つて川が洗はれ、岩石も出る、水が激して岩石に當るから瀬も激怒全涌し、水球は高く颯り鼎の湧くやうになりせゝらぎが立ち、飛沫となる、其所に碧潭も出来石床もある、彼の荒川の上流や、日光の大谷川、利根の上流と同じ様に石が大きくして景は益々絶佳となるのだ、私が汽車の窓から見ると此川の下流ではあるが、白石驛で見ると少しく山合が開けて明るい氣分がして伸々とする、其處に潺湲たる音を聞くと何とも謂へない良い感じがするのだ、私は此川の鮎は知らないが、瀬の多い大石のある碧潭の多い川で取れた鮎なら必ず鮎は美味なる事であらうと思ふた鮎は暖地の魚で百四五十年の目があると言ふ眞に日本一だと謂ふ事だ八代から人吉迄汽車は此川と絡みつゝ流れ居る事は前にも云ふたが、十六里もある間溪谷を登る汽車は、上越南線を沼田へ乗車した人に想像がつくだらう、此間にある停車場で、目に付く驛は、板本、瀬戸石、白石、一勝地、那良口、渡りとありて人吉の驛に入る。

人吉は四面の連山に圍れた僅かの盆地で、農耕も出来るが到底山の町に過ぎない、人吉から矢岳迄は、山巒重疊愈深かく最早今迄の様に溪谷に沿ふて汽車の行き様がない、前にも云ふ通り、球磨川は人吉で別れて今は山から山へ越さなければならぬ、夫れに一步／＼と高くなる、勢ひ山を越すには墜道より外はない、勿論球磨川沿岸とても墜道は澤山あるが、今度は墜道が頗る長くなる、只だ墜道が長くなる計りではない餘りに峻坂の爲めに、勾配が取きれない、それで日本に唯一のルブル式の線路を必要とするのだ、ルブル式と云ふのは、平假名の「の」の字見た様に、大曲りに結ばれて行くのだ、其所の停車場を、大畑と謂ひて、私は遊友の中島君と特に調べた、此時車内に鐵道吏員の同車して居た者に精しく説明を聞いた、説明せらるゝ通り車窓へ首を出し、熱心に見て居たら、山を越へながら、段々登り回轉を始めた今這入る墜道を抜け廻轉しきると、先の墜道より上の墜道へ出て間接に交叉して方角違ひの方へ駛つて行く交叉の上と下では百五十尺ある一山越すと始め這入る墜道が見へるが萬一説明者が居なければ決して見付かる譯の者ではない、此の連峰中ても矢岳と日向の百貫山が高嶺で水の流れて、其分水嶺なる事が判明する、矢岳驛は此國境にあ

りて驛の外には鐵道官舎と、古い柚の家らしいのが二三軒見へる計りだ、こんな峻阻な連峯や峽谷を通りて行くのだから、昔し加藤清正が肥後の領主として、彼の人吉に在る相良氏を手に入れんと勇を振るつても天嶮は如何とも致し難く、遂に斷念したと云ふも道理である、豊太閤が天下の勢を以てしても陸地よりは薩摩へ攻め入る事は出来なかつた、止むを得ず海岸より三太郎の險を越して米の津より薩摩へ進入したと云ふ、海岸通りの道に赤松太郎、佐敷太郎、津奈木太郎の三峠を三太郎峠とは云ふのであると。

矢岳を越すと山岳重疊なる事は前と同様なれ共今度は山又山を越ては降り下りて吉松驛に着く此驛には始めて辨當がある、曰く名物柏飯と云ふて賣歩く、此驛で牛乳など買ひ茶を求めなどした是より墜道は可なりある、けれど下り山だ、吉松は宮崎の分岐點で相當賑ふて居た、最早大隅國だ大隅横川、牧園嘉例川、表木山と過ぎ煙草で有名な國分に着いた、國分より汽車は急に曲りて西南へ山は段々小丘となり墜道は數限りなくある、然し是より錦江灣の沿岸となるので山と畑と海とあり、嘉治木重富邊は海岸傳ひて遠く櫻島も見へ出し、磯には松の磯なれて風致も勝れ時に



漁舟の家路に急ぐもある、時已に夕陽海上も靄に包まれかけた、龍ヶ水邊よりは櫻島は手に取る様に近くなり、島に灯の付いたのも見へて来た、日は西山に没し電燈町に輝く頃は鹿兒島の驛に着いたのである、例に依て兼て同市山下町薩摩屋旅館へ打電して置いたので、宿よりは出迎に来て居た、荷物なども整理し、差廻しの自働車に乗り市中へ入ると、思ひしよりは明るい、電車通りより、西に折れ薄暗き少しく勾配のある横丁見た様な稍や閑静な暗い、町の鼻を突く様な山の下の旅館らしい門構の家に着いたら、此の山が城山だ此處が電報にて紹介して置いた薩摩屋旅館であつた。

今日の午後の二時頃より汽車に乗り通し、山又山を通りて山嵐の氣に明るみを見ず夜になつて来たのと、雨上りて何となく蒸し暑き中を来た事とて早速湯に入る事にした、私は薩摩に来て始めて始めて活潑の女中に遭ふた、此女中中々人づれて居てもよくきく、然し薩摩辯ではない、湯から上ると浴衣の儘で座敷に入り一休みした晚餐の前に酒宴が始まり、宿の番頭は櫻井様と云ふ御方は御出ですかと云ふに聊か愕いたが、何事ならんと聞いたたら御國から御手紙だと云ふ、夫が何事が出来たかと取手遅しと聞き見るに、格別の事もなき通信文に、漸く安心した、然し同行の者

は何の手紙が何人かと尋ねて呉れた、止むを得ず示すと御令聞からかと云ふ、中には是れては只は置けないなどと云ふ者もある、其内に晚餐の仕度も出来、お膳も運ばれた、私も實は國を出でしより、普通の御膳に就いた事はないが、今夜ばかりはお膳に就く事が出来たと喜んだ、お酒の宴が始まり、私も少々お附合をしたが、此旅館では今迄の宿とは違ひ久し振りて赤い身の刺身が出た、東京でなければ見られない刺身だと、調べて見たら堅魚の刺身であつた、成程屋久島は鯉の名産地だから鯉節も本場だとして喜び、私も此刺身なら頂けると皆なと同様に攝取する事が出来酒宴も果て、飯も普通に頂き、ふと裏口の處に蛙が頻りに鳴き居る、窓より見れば麥畑が見える夜目に畑だか田だかは知れざれ共、兎も角蛙の鳴き居るのは又一興だと、其時駄句が浮かんだ。

城山の露に勇むか雨蛙

晚餐も済んでまだ時間がある、私も元氣であるから一同と共に宿を出て市中見物せんと表へ出ると、空合が悪ひ其内に稻妻の光一閃する、雷鳴もあるが、何程の事もと市街に出て西本願寺前の烏丸陶器店に入り名産の薩摩焼を見て居ると、今度は

本氣になつて雷鳴がしだした、けれど今は人家の中だから平氣で土産物の陶器を撰定し國へ遞送方を依頼して居ると、今度は大雨盆を覆す様に降り出した、各雨具はなし、先前に藤波老は辻車を雇ふて宿に歸り、私も車を見付けて宿へ歸つた、藤波老は已に座にあり、其内他の友人も來たので、茶を呑み雑談を交はし、豪雨の音を聞きながら寝に就いた、私は葉書を記き記行を認んと机に向かつて居ると旅の疲れが鼾聲雷の如くてある、そこで駄句一首

白川の夜舟こぐなり旅びづかれ

床に入れど又も後園に蛙の鳴く音頻りなり

雷にまけずに鳴くや雨蛙

斯くて二十日の道程も終り、安らげく薩摩湯なる城山に、夢も圓かに結ばれた。

## 九州を右より左へ (七)

### 九州南端の都薩摩の鹿兒島

世界的大偉人、大西郷を生んだ鹿兒島は、今回の週遊中憧れの一つであつた、今てこそ鹿兒島へ行くのは、汽車で寝て行かれるが、明治維新前迄は何人も此地に足を入れる事は出来なかつた、鹿兒島の地勢は薩隅二國が、一方は西南に延び、一方は東南に延びて錦江灣を造り、其所に櫻島がある此兩國は、山岳の高地で起伏し、平地は僅かである、山脈は安蘇火山より續き、櫻島は富士形の山て海に突出して居る、此島は最近噴火して熔岩を押し出し一部大隅に連通した(以前は孤立の島山)古代此國を熊襲とも隼人とも稱した、無論先住民族は慄悍の者であつたが、天孫民族に征服せられたに違ひない、上古は兎も角も中世になりては文治二年源頼朝が總追捕使となりし時文治二年が適當かも知れない建久三年征夷大將軍宣下此時の守護として、頼朝の庶長子島津忠久を薩隅日三ヶ國の地頭とし、爾來二十九代、六百八十年間相傳の雄藩で明治維新迄持續して來た者である、中世以後の兵亂に何故に獨り超然として居たかと云ふ事は、地

勢の關係と、代々の藩主が何時も渦中に投ぜなかつたに因る、由來我邦の武士の争鬪は、今日て見る政黨の様な者で、我が領地を増大する爲めに、或は己が權力を高からしめんと野心に外ならず、島津氏は僻遠の地に封ぜられたのにも因るが、敢て野心を抱いた事も無い様だ、夫れには理由がなくてはならない、此地は暖國で他との交通がないから、自尊心も随て強い、物産も相當にある、所謂生活に事を缺かない、去りながら、他の侮りを受けては決して其儘には濟まさない自尊心がある、故に琉球も隨へた、他國から難問を持ち込まんとすれば國境に於て成敗する、手もなく亞細亞の西藏と同じ様だ、蓋世の英雄でも島津氏を征服したのではない、天下麻の如く亂れたのを統一して來たから、和を結んだのだ、豊太閤ですら己に然りだ私は磯の御殿に於て島津義久の朝鮮より持ち還へつて植へたと云ふ松を見た、豊公の征韓役だから、今より約四百年に近かゝらう、二抱へもある五葉松だ、此松より思ひ出すと、文緑の役に勳功の將士に豊大閤より論功行賞があつた時、外征の將士の中で島津義久を勳功第一と稱し自ら正宗の銘刀一振りを與へたと史は傳へて居る何が故に島津氏を勳功第一として賞したかと、云ふと他の加藤でも小西でも黒田で

も淺野でも浮田でも小早川でも其他の勇將でも豊太閤の家の子若くは臣と稱して服従して居たのだから、結極裡々の譯だ、島津家には義理がある、義理があるにも拘らず、島津義久は一片の好みから義を立て征韓には全力を集注したから義の固いと云ふ所に眼を付けたのだ、此義氣と云ふ事は啻に此戦役計りではなかつた、豊公歿後に於ても猶ほ存じて居た事は歴史に明かになつて居る、夫れが傳統的にもなり、徳川家康が征夷大將軍となつても、島津家には遠慮があつた、夫れは徳川家とは同じ源家の流れてもあるが、一つには超然として野心の抱藏がなく、僻遠の地に生活があり、天險があるので、何とも手の附けようが無かつた、島津家は斯程に自尊心に富んで居る、であるから七百年の後私共が彼の地に行つて見ても、他の城主の様に城廓があるでもなし、一の館て事が足りた事も見へる、磯の御殿の内に島津家の財産整理をして居る役所もある、御殿もある、土地の人が今でも舊藩主が、鹿兒島に來ると、殿様が御歸りだと稱へて居る、三百諸侯の内、舊封地に昔しと同じ様に御殿を残し置き、何時歸ても直に住まへる様に成し置く家が、何處にある、是に見ても其自尊心の細かい事が判るのではないか。

大西郷や大久保甲東の様な大偉人が出て、幕府政治を根本から破壊して、現代の憲法政治に大革命を起した歴史は暫らく擱いて、今鹿兒島に行き、最も印象の深いのは、大西郷でなければならぬのは、何が爲めてあらうか、謂ふ迄もなく自尊心の権化であるから、鹿兒島の西郷でなく、西郷の鹿兒島の様な感もする。

以上は鹿兒島の概念であるが是からは、鹿兒島を見物するのである。

夜は夢路をたどりつゝ、夏の夜の短かきに、いつしか、夜も明けの鐘、東雲の紅く軒端に雀が鳴く頃、藤波老は眼を覺まし、夜前の雨は名残りなく晴れ、朝露繁き裡に、獨り何れにか散歩に出てにけり、跡に残りし者は、未だ覺めやらず、中でも稟邦先生は醉眠病に罹りたるか床中深く隠れたれば揺り起し、晴れたる空を見せて眼を醒まさした。

二十一日である、其内に一同揃ふたので、朝禮旁茶を喫し、朝餉も済まし今日の道程を相談した、一應市廳を尋ねようと、宿に自動車を命じた、一行は是に乗りて直に廳に行き、案内を乞ふて、市長に面會せんとす、偶たま市長は日下臺灣南清地方へ出張中の事、助役勝目清氏に面會し、豫て持參せし竹内市長及託摩市會議

長の紹介狀を出す、續いて中島氏は現在市の方面委員なれば、社會事業に就て左の件を質問す、助役は鹿兒島市社會課主任松山常樹氏を一行に紹介し、質問に應答せしむ、鹿兒島市にては、方面委員を保導委員と稱する事を答ふ、更に左の通り應答せり。

社會事業協會

大正十一年十月十日 發會式

大正十二年四月 保導委員設置 二十六名

大正十五年二月 員數増加 三十二名

協會基金貳拾參萬圓 右利子を救療費に充つ

内 譯

濟 生 會 五、八〇〇

市 三、四五〇

醫 師 會 二、〇〇〇

右は、特點、給料、會合、年限、ナシ

大正十五年三月縣外視察 市部四人郡部一人

岡山、大阪、京都地方

鹿兒島市役所には是に關する事業

- 一、職業紹介所
- 二、養育院 財團法人 二〇〇、〇
- 三、乳兒院 一五〇、〇
- 四、養老院 一五〇、〇 十名内外
- 五、佛教二葉園 財團法人 二〇〇、〇 托兒所
- 六、盲啞學校 一五〇、〇 聾啞學院
- 七、聾啞工業講習所
- 八、免囚保護協會

水道問題に就て助役に質す助役之に答ふ、水道に就て助役語て曰く此鹿兒島は御存知の通り此地を取り込む山岳は重疊して到る所に水源あり然かも水質善良にして直に鐵管に取り入れ濾過の必要なく無盡藏に天然水を使用し且つ高配は自然にて可

なり故に經費は七拾萬圓にて出來たと云ふ、更に語て曰く、此水道を建設するとき材料を豊富に買ひ込みし處、彼の歐洲戰亂の爲めに高價にて賣り、戦後に於て、改めて材料を購入した爲め少なからず利益を得たと云ふ。

現在御當市の戸數人口はと問ふ

答へ大正十四年十月一日第二回國勢調査にて

世帯總數 二四、五二七  
 人口總數 一二四、七三四

内譯  
 男 六一、〇八〇  
 女 六三、六五四

次に教育方面 殊に小學教育に就て問ふ

答へ

鹿兒島小學校數 拾校  
 學校兒童數 大正十五年四月現在

尋常高等兒童男女合計

一六、五〇〇名

幼稚園に就て問ふ

答へ 市立の幼稚園は一もなし、多くは特志家の設立にして

幼稚園の數 八ヶ所 人數 不詳

次に小學校十校に對する校醫を如何様に配置しあるかを問ふ

答へ 鹿兒島市全尋常高等小學校に對しては専任學校醫を置き、學校衛生に關する一切の掌に當らしむ。

問ふ 然らば、其俸給を如何

答へ 一ヶ月の俸給金百五拾圓

衛生方面に就て質問す

問ふ 本市に、開業醫の數は幾何あるや

答へ 現在市に住居する開業醫の數は

總數 百五十餘名 内 女醫 一名

問ふ 市立傳染病院、には如何なる方法を以て、治療なしつゝありや

答へ 傳染病院には、専任醫を置き、其掌に當らしめ同時に、專屬看護婦を置く、

但し看護婦の増減は患者數に因て變化する者とす、専任醫は月給、百五拾五圓にて、住宅を給し、目下長崎醫大出身の者にて、就任以來、四年になると答ふ。

右にて質問を打切り、私共一行は今回九州地方を視察旁々巡覽せんとす、土地不案内故順序を承りたしと請ふ、其時市助役は、社會課の主任、松山常樹氏に、案内を爲致る由を一行に告げられた、我々一行は其の好意を謝し、左の順序に巡覽する事とした。

一、市 役 所

二、照 國 神 社

三、岩 崎 の 洞 窟

四、西郷隆盛終焉の地

五、西郷隆盛以下の墓、參考館、淨光明寺

六、磯の御殿、集成館、島津家寶物

七、僧月照の墓

八、乃木將軍夫人の誕生地、東郷元帥誕生地

九、西郷南洲翁、大久保甲東、誕生地

以上九ヶ所に就て説明旁案内を受ける事となり、市よりは市の事業に關する印刷物を一行に配布せらる。

右にて廳を辭し、廳前に於て中島君紀念撮影をなし、自動車にて照國神社に至り下車す案内者に連れられ、照國神社に參拜し、社前の廣場に出づ、此照國神社は、島津家二十八代の英主、齊彬公を祀りて現に別格官幣社である、城山の南麓に南國氣分を受けた新緑の閑雅な勝地に森巖を極めて居る、石の大鳥居の裡には、雄大なる、島津久光、同齊彬、同忠義、三公の銅像があり、其右手に招魂社がありて、旅の者は實に明みのある境内を見ては、一種の感に打たれざるを得ず。

是より一行は自動車にて岩崎谷に行き、洞窟を見る。

岩崎谷は城山の裏手の谷合の峽地にて二丁計り登り行くと、一の洞窟があり鐵柵がしてある、説明に因ると南洲翁は西南の役に、官軍に迫まられ、此洞窟に入り、陣營とも參謀部ともなし、幕僚と共に起臥し、食料は土地の舊藩の婦女子が、戦亂

の中を毎日送りしと云ふ、南洲翁も此洞中にて圍碁を闘はせし閑日月ありと云ふ、茲にて翁は絶後の詩を造りしなり。

百戰無功半歲間 首邱幸得返家山

笑儂向死好仙客 盡日洞中棋響閑

之が翁の最後の詩だ、誠に英雄の末路測隱の情萬感胸に横るの慨あり、而して翁は世間傳ふる如く、終焉地城山に自刃せしと云ふが、決して自刃せしに非ずと、翁は部下より割腹を進めし時、斷然之を退けて曰く、自ら自刃せば罪を私に解決した事になる、寧ろ官軍の銃丸に當つて斃れなば、官の手に罪に服すのだと、慨然として洞窟を出て、岩崎谷の碑の建て、ある所に命を落したりと、松山常樹氏は語りて説明せり、猶石碑の建て、ある所は岩崎谷の入口なりし。

翁の終焉に就て僅か五十年前なれ共已に誤り傳へられて居ると慨てゐる、現所の洞窟に食事を持ち搬びたる者、今尙生存して當時の情況を具さに見た者の實話に徴して明かなり、私共の一行は此談話を謹聽しながら、堅馬場町の淨光明寺の石段を登りて、南洲翁の木像「上野に建て、ある原像」を見る、此時松山氏又た説明す、

曰く此淨光明寺畔木像のある側に、翁が故山に歸るとき隨從せる忠僕が、翁の死せる後ち、茶見世を出し香華を賣りて居た店が是であると指示した。

更に一段高き所に西郷隆盛を中心とし桐野利秋、篠原國幹、逸見十郎太、等の石碑及び丁丑の役に陣亡せし英靈の碑碣が無數にある、一行參拜して、當時の事を追想し一掬の涙を催ふさせずには居られなかつた、

墓地の側に祠堂あり、輪奥の美はないが白木造り宏莊の建物である、大正元年に改築せし者であると云ふ、私共の見物中二人の婦人祠堂に上り懇に合掌して參詣して居たのを見受けた、松山氏曰く、時々縁者が來りて參詣すると、墓地の裏手一段高き所に徵古館あり、市の案内にて一行は、館の掛りの者より一々説明せらる、寶物は維新以來の薩藩出身先輩者の寫眞を額にして掲げられ、遺墨、遺物武器、南洲翁の軍服は特に人眼を引く、島津家よりの寄贈品も多數ありて、短時間には到底見盡す譯には行かず、因て禮を述べ高臺にて鹿兒島市中を鳥瞰す。

#### 磯の御殿

自動車を駛らせ錦江灣に沿ふて磯街道を暫く進むと、古びた長屋門がある其門内

に入り、自動車より降り、門番に挨拶し、少しく行くと裏門がある、市の松山氏は先づ玄關に至り、何事か問答の後一行の待ち居る所に來り、此方へと案内す、此所は島津家の磯の御殿にある事務所で、島津家の事務を取り居る役所である、洋机、椅子、て事務を取り扱つて居る處は町役場位の資格は確かにある、其前を通りて少しく庭を行くと、正門が固く閉鎖して磯街道に向つてあるが、宮家御來遊の外は此門は開かぬと聞く、庭園深く進むと一段高き所に錦江灣に向つて平屋建ての館がある頗る宏莊な構造で、御殿造となり椽先より内部の見へる様に開け放ち室々を拜觀するに便宜を與へらるゝは一行に取りて仕合せてある、今私共の見た一番表になりて居る室は、襖も床の掛軸も皆牡丹の繪である故、私は四季に取り替るのではないかと考へた、今は牡丹の間とても謂ひたい、他の室は清楚にて何の裝飾もない、廊下は折れ曲りて、間取りが出來て居る、庭は廣々として、泉石布置傘石の天然石で三間餘もある石燈籠の立てられた側に、潺々とし流れる麗水の岩石傳へに瀧となり小溪流となるあり、年古びたる黒松は枝を地に引く様に這て居る狀は何んとも書き様がない、園内を逍遙しても、少しも泉石や樹木に觸れない位に配置してあるので



こせ付いた所がない、首を御殿の方に向ければ遙か先に見へ、知らず々の裡に東の隅迄行たのである、更に庭の平面より一段高き所に黒塗の、亭がある是れは支那風の亭で、此亭に入りて磯を見れば、櫻島は此の御殿の庭園内に在るかと思はる、松山氏説明して曰く、宮殿下は、何れの宮様も、必ず御投宿になるので特に此亭を御設けになつたのだと云ふ、此亭より錦江灣と櫻島を眼下に見るを以て庭園と續いて在る様な景に設計した苦心の庭だから注意して御覽になる様にと説明して呉れた其下で中島君が紀念寫眞を取り一行はカメラの中に入れられた。

亭の西は松の大木十數本丁々矗々して聳立し其所に巨大な一本の五葉松がある、説明者曰く此の五葉松は、島津義久公が征韓の役に朝鮮より移植した有名の松であると説明さる、是より裏園に入ると幅九尺位の川があり、水は裏に聳立して居る岳陵より清水となりて、滴り落ちる溪流だ、丘陵は見るも恐しげな森林で椎や樟や松杉の大木が密林となり、初夏の青葉が盛上りて實に幽邃の極だ、此裏には夏尚ほ寒むさを覺ゆる程鬱蒼として木の下闇となつて居る、山岳の裾に行くと孟宗竹の大竹籐がある是れ迄見て行き歸りに前の川に出て石を飛び段々と表の庭に歸る、再び亭の

中に入り又た亭の前に立ちて櫻島を庭前の築山とし錦江灣を池に形どりて見れば、其雄大の雅趣更に妙なり、彼様に見るのが此庭園の主意である事を更に説明した、前日熊本で見た水前寺の庭と比較して見様にも因るが、島津邸の仙巖園を兄と見る是ぞ新日本三景の一なる候補地であると聞く。

磯の御殿も限なく拜觀し禮を述べ辭して、島津家の寶物を集めたる集成館に入り速力を早めて觀覽しても見盡せない、念入りに見れば一日にては到底満足には觀られないかも知れない、稟邦先生と私とは斯様な集成館に入ると慾が出て、何時も叱かれる止むを得ず思ひを残して集成館を出る事にした、考へて見れば明治維新迄島津家二十八代に渉る六百八十年間貯へし寶物である、其質に於ても其量に於ても豊富の譯である島津家が寶藏庫を開放して、今は一般の觀覽者に參觀を許して居る鹿兒島唯一の集古館だ、是が磯の御殿の附屬としてある。

待たせ置きたる自動車に乗り、南洲翁の誕生の地に來た市内鍛冶屋町に在り、甲東の誕生地は僅かに二丁計り距りたる猫薬師小路にて甲突川の東にあり、大久保利通は舊居を取りて甲東と號したと云ふ、西郷隆盛の南洲は出生地の關係から稱した

と云ふ。

兩偉人出生の地は、見渡した所何れも百坪位の屋敷趾にて、後人が石碑を建て樹木を殖へ保存して居ると云ふ、薩摩出身の名士は紀念樹を植へて居る、其建札が兩誕生地に殆んど同じ様に建て、保存して置くのである。

僧月照の墓に參詣す

月照の墓は、松原町にあり、島津氏十五代貴久公の建立にて元は南林寺と稱したれ共、爾來社格に改め貴久義久兩公の靈を祀りて松原神社と名く、庭内梅樹多く觀梅の地として名高し、此附近の地にある墓地を今尙ほ南林寺墓地と呼ぶ、月照の墓は其中にあり一廓をなし墓石及び燈籠は平野次郎の建立せし者なりと云ふ、燈籠に平野國臣の歌あれ共略す。

時己に十二時を過ぎたり、松原町大門前に、美どとり云ふ會席にて、市の松山常樹氏を主賓とし、鯛ちりにて晝食を濟まし、鹿兒島市に於ける唯一のデパートメント山形屋に行き、竹細工を買ひ土産として送る、此山形屋は洋風三階の大建築にて三越を縮めた様な營業振りをなし相當に繁昌し、來客雜踏す、夫れより、松山氏を

市廳に送り、私共一行は旅館に引上げ今日の日程も残りなく終りたれば、旅装を調へ薩摩屋旅館にも別れを告げ驛に向ふ、途中枇杷が驛前の賣店に黄金色をなしてあれば、一籠仕入れ汽車の中で徒然を慰むる事とした、鹿兒島驛に來り午後三時三十分發の宮崎行の汽車にて、鹿兒島を後に、宮崎に向はんとす。

## 九州を右より左へ (八)

鹿兒島より宮崎へ

五月二十一日午後三時三十五分發の汽車にて名殘惜しき鹿兒島を跡にし、磯街道に沿ひ、錦江灣の沿岸を見ながら行と、昨日は氣に付かざりしが、路傍にある巨巖より一株の老松碧海に枝を垂れて居るのが見へる。此地の人、之を琉球人松と云ふ昔し琉球より、薩摩藩へ貢を齎す船は之を見當に上陸した所だと聞く、尙ほ此附近に磯の天神社があり相應に參詣者が多しと云ふ、海岸傳へに汽車は進むので、海中に見へる櫻島を蔭の見へる限り眺めた。段々遠く離れると大隅の國分に着いた。國分は古い古蹟のある所で此驛にて降りて霧島の高峯へ行く街道があり、今では國分より自動車にて霧島神社へ參詣するには少しも困難はないと云ふ、然し噴烟と霧て名高い高千穂の峯や韓國嶽に連續せる霧島火山群へは、健脚でなければ登れないと聞いて居る。汽車の停車して居る時、俄か雨が降り出し、驛に降りた客や中等學校の生徒らしいのが多勢右往左往する是より汽車の方角も變りて山坡も多くなり墜道

がある山合を登り行くと栗野驛となる、此驛に分岐線があり本線は北に分岐線は川内川の邊り西北へ國道に沿ふて山野行となる、此山野より延長すると八代灣の水俣へ貫通すると云ふ。此線が竣成すると鹿兒島より國分、栗野、山野、水俣、米の津、阿久根草道、上川内、串本野、伊集院、武、鹿兒島、と鹿兒島を起點に鐵道一週が出来、大正十七八年頃には竣工の記念競進會を鹿兒島に開く豫定だと昨日勝目助役から聞いた。本線を川内川の川上に沿ふて吉松に着く、此驛でかしわ飯、茶、牛乳等を求めた之より本線に分岐れ、日向路に入るのである、然し吉松は山嵐の深い大隅と日向の國境となるので、如何にも山が深く、高峯續きで、連山は何所迄も續くのである。

四時過ぎ吉松から愈々本線と分れ、京町、加久藤、飯野、小林、の驛を過ぎた頃一行と車窓より眺めたが、汽車が下りに向かつて東の方に馳る毎に山岳が低くなるのが判る、山水の美があるでもなし、ともすれば高原に出て、遙かに小山を見る位だ、先程の急雨も晴れたれ共、遠山は雲に蔽れて見え、日向と大隅の國境にある霧島火山群でも見ゆるかと、右の車窓から眺むるも、それらしい所も見えず、汽車

の中にて鹿兒島で購ふた枇杷を味ふて見た、一行も大分汽車には厭いた様だ、空氣枕を取り出し横臥する者もある、私は吉松で買った、かしわ飯を喰わんとして少々口に入れたれ共、齒の悪い悲しさ、とても咬めずに中止した、かしわ飯とは鶏肉を味付飯の上に乗せ青豆と焼き卵海苔を少々振りかけた折詰であつた。一行の者は何の苦情も謂はずに平らげた。止むを得ず都の城へ行けば牛乳位はあるだらう、吉松には牛乳は無かつたのだ。吉松で二等車に乗り込んだ仁王様の弟位ある洋服を着た紳士が折かばんを以て、私の直き隣に腰を降ろした。黙々として居る、私は又齒か痛み出した、けれど日向に來たのだから少しは土地の事情も聞きたい、隣の怪紳士に高原は此次の驛ですかと、聞いて見た、其くせ前驛で此次の高原なる事は承知して居ただけれ共、話の切掛をする手段で隣席の人が如何様の態度に出るかを試した、所が其紳士は早速左様此次は高原ですと答へたから、矢次早に貴殿は吉松で御乗りの様でしたか吉松邊ですかと聞いた、先方では否私は熊本ですが折々此線て宮崎には参りますからと云ふに、直に名刺を出して敬意を表す、先方から名刺を交換して來た。見ると辯護士法學士岡村喜一郎とある、今度は先方より貴殿は群馬縣で

すか私も一回御地へ参りし事があります。確か碓氷郡の湯淺三郎を聞き、松井萬次を問われた、湯淺氏は早速答へたが松井氏が判らない、其内に松井氏は同窓で吾妻郡高山村と云ふ、夫れから高山村には大字尻高云ふ字があつて、其所からは福田和五郎と云ふ新聞記者と、實業家に都筑六郎と云ふ人があり、共に東京では名の知れた人だと云へば、左様／＼松井氏も尻高と謂ひました、私も段々考へて見ると、かすかに見當が付いた、因て松井と云ふ人は關西に何かして居る人ではないかと聞いた、答へに今大阪にて大銀行の専務で大阪の財界では一大勢力があると語る、此所少々郷里の人の成功を聞いて鼻が高い様な感じもあつた。完く他國に出て郷黨に斯くの如き人があると聞いたら感じの悪い譯はない。是れから今度は貴所の熊本市に就て自分の感想たる熊本縦横談が出たら、岡村氏は至極同感だと、岡村氏は九州經綸策を説く、私は九州の經論は熊本を中心とする事を極論した、岡村氏は知己を得たと喜ぶ、談は段々佳境に入り、何時しか汽車は止まつた。驛夫は高原／＼と呼び歩く、あゝ高原だと汽車の窓を覗くと日は長いとは謂ひながら、夕靄に包まれて光線が薄れて行く、此時岡村氏は曰く日が高いと高原から霧島山脈の高峯は南に見

へ噴烟の上かるのが見ゆるが、今日は見へない之から都の城迄は高千穂の峯も日向の原野も見へて到る處に丸塚や瓢形の墓陵が見へると進行中の汽車の窓よりあの山の麓も彼所の小山も墓陵である、村落などでも墓陵のない所は無位だ、殊に東海岸の方で平地とならば誰れが見ても直ちにそれと首肯する事が出来ると、頗る精細だ、其内に高千穂論も出たが天孫民族の始めて降臨の地は霧島山ではないと否定する。日向はかゝる歴史のある土地だから御覽なさい。各驛とも皆な木材計り積んでありますと指示す。そして三面の山から出る木材は日向の物産であると語る、然し都の城より宮崎地方は實に平原で廣漠たるものだと言ふ。高崎新田、谷頭、二驛を越すと日は暮れて居た、其内に汽車は徐行となり電燈の光煌々として賑かな驛が都の城である、都の城は大隅の志布志と云ふ有明灣の港に行く汽車の分岐點で、乗降の客が甚だ多い、停車時間も長い、隨て驛で呼び聲も盛んに聞こえる、此驛で牛乳を求めた、時に夜の八時過ぎてあつた。之より小驛六ヶ所を過ぎると宮崎に入るのだ、最早外は暗く車中で居眠りも始まつた。汽車は益々駛せて九時半頃宮崎の驛へ着いた、豫定旅館神田橋へ吉松より打電して置いた爲め、宿より迎ひに出て居たが

宮崎では二十一日は競馬の爲めお客様が満員だから代宿富士梅へ御案内致すと、行李を自働車に乗せ一行も納まり、富士梅旅館に着いたのである。

#### 旅館 富士梅

地圖で見たより外少しも知らない私共の一行は晝でもあれば多少の方角位は判るが知らぬ他國で夜と來ては何とも致し方はない、旅装を解き宿の女中の運ぶ盥茶一杯直に湯に浸る事とした、湯風呂が思ひの外狭いのて一行の者が一度に湯に浸る事は出来ない、私と稟邦先生とは同時に入浴して居ると、藤波老も來た、其時は私は湯から上らんと仕度をして居る、稟邦先生は風呂場で顔を洗つた立ち上がらうとする時、水栓蛇口で前頭部に負傷して、鮮血は滴り出たので私は直に傷創を調べて見ればカランが一部半圓形に刺さつたのだ、直に湯より出て座敷に來り創傷の手當をして繃帯を施した、一行が醫者の集團である爲めに、斯様の時には都合が好い、然し餘り都合がよすぎるのも結構とは謂はれない、可成は事故のない方が増しなのだ、其内に一行も湯より上つて座に就き、日向迄來た御祝をした、晚餐も濟み茶を飲みなどして居ると、日向特有の密柑を出した、見れば密柑の皮を鉋丁でむき四つ

切りにじた者で、白いあま皮が付て居る、女中の説明に此密柑は他の者とは異がいあま皮ごと食ふのだと云ふ、其通りにして食べて見た所頗る美味だ、成程所變れば品變るて、結構の者であると同時に美味だから國へ土産にと云ふ論者あり、一行も賛成した因て一箱買つて送る事にした。稟邦先生は女中の言語等を聞いて、郷國と餘り差がないと喜ぶそのみならず座敷の工合も關東方面と大差ないと、故郷を偲ぶ有様が見へる、一行の中島君がホワイトシャツを女中に注文すると、女中は洋品店へ電話にて申付け洋品店の番頭が持參する、外の者もカラを買はんと各命じたカラも來た故値を聽いてみた所一ヶ七十五錢だと云ふ、私はカラは二十五錢より高いのを買ふた事がない、間違であらうと交渉したが先方なか／＼強固だ、止むなく買取り明朝は新品で宮崎神宮へ御參りが出來ると謂ながら古きを捨て新を取る譯だ、洋品屋が還つた跡で、今のは實際に高い、今のは確かに旅の者と見て貪つたに違ひないと憤慨した。買つてから何と云ふても致し方なく、是れがほんとの泣き寝入りだと寢に就いた。

疲れて居るので床に入ると間もなく睡り、眼を覺して見れば、例に因り藤波老は

已に起きて居た、私も東の戸を明けて見れば大淀川の流れが直ぐ眼下にある、明くれば五月二十二日の朝は幸に晴天で、朝餉も早々済まし、自働車を命じ、先づ宮崎神宮に參詣せんとす、宮崎の市を北と思ふ方向に市中を見物しながら進むと、長い／＼として道幅も廣い參道に出た、此參道を行くと檜の大鳥居がある、其前にて下車す。是より徒歩で行くと、恰かも明治神宮の様に、含嗽洗手、外套帽子を置き、神社に參拜す、宮崎神宮、御祭神は、謂ふ迄もなく、神武天皇である。

官幣大社 宮崎神宮

鎮座の地

宮崎縣宮崎市字下北方

祭神

神 武 天 皇

左相殿 鷗鷺葺不合尊

右相殿 玉依姫命

斯の地は古史に所謂、高千穗宮なる皇居の靈地にして、神武天皇、御東遷の雄圖

を起し給ひし御遺跡なり。

(高天原とは最初天上を稱し、後に皇居を稱したのである)

神武天皇の左相殿と申すは、御父の尊、右相殿と申すは、御母の命にまします、天皇は皇太子とならせられし時は、御年十五歳と拜承す而して、宮崎に都を開き給ひ、宮崎の宮にて天か下を治めし給ひ。御歳四十五にて、御東遷を思ひ立ち、皇師を帥ひて、此宮を出て立ち給ひ。紀元前七年豊後の國に到ります順路は宮崎より陸路を北上し。美々津に至り出船の準備をなし、美々津川より船出したと云ふ。今美々津川を見ても其準備の爲に造船するにも帥師するにも、又汐を待つにも適當なるべしと考へられる、此所に御乗船になり沿岸を通り中國に御滞在の後四國沿岸に渡り難波の津より大和に入り給ひ、皇居を橿原に定め即位の御大禮を行ひ、紀元を御創始なされしは御歳五十二にてあらせられしと云ふ。

宮崎神宮は、何れの時代に現在の宮居の跡に鎮座せられしか、古記に依れば、崇神天皇の御宇、又景行天皇熊襲御征討の節、造宮の擧あり、更に應神天皇の御宇、日向國造老男命、之を祭せらる等。舊記に傳わる。

現今の神域は、境内面積四萬七千七坪、境外面積一萬六千七百四十三坪にて、合

計六萬三千七百五十坪あり、此内に御神苑を含む。

#### 徴古館

境内に徴古館あり、社殿の外にて左手にあり、御陵、古墳等より發掘せし品々及古器物無數に陳列し、明治天皇御寄進の太刀、諸大名より寄進の寶物を藏せらる、一行の者は限なく拜觀し、中島君に依て記念撮影し辭し去りしは、午前九時なり。

#### 青島行

青島と云ふと支那の青島かと人が云ふ位青島は支那と計り考へられる青島をあを島と訓て讀めば誤解される事はないのだ。

最近中等學校などでは、珍らしき植物のある所として、往々修學旅行に行くと云ふ、さも有るべき事なり。先年文牛三寅氏の九州加計亞留記の口繪に御夫婦の寫眞が出ていて。私は口繪丈け見た時、支那の青島と早合點した、何故そらかと云ふと背景にある植物が、内地の植物でないから、是は支那の青島で植物園だなどと思ふて内容を見るに及んで、始めて日向にこんな珍らしい島があるのだと解かつた。夫故今回日向に來たからには、是非此の場所を忘れてはならないと、旅行の第一にプロ

グラムに入れて置いたのである、日向では古蹟研究が必要な事は云ふ迄もないが、素通一片では逆も調べる所の談してはない。夫故宮崎を中心として最も適當の所は先づ青島であると考へ、神宮參拜後は直に自動車を駛らし大淀の長い橋を渡り。田舎道に出て東南へ進み行くと松や濱が見へ出し小山があると思へば、田圃も見へる此の天然の平野は何となく、伸びりして居て日向と云ふ古い先祖の墓參りにても行く様だ、其内に海岸近くなり青松白砂で、丘陵には綠葉繁茂の南國氣分に南風薫るとても云ふのか、濱の松風は生々温く顔に當り松原を越へて。青島に行く濱邊は恰かも東海道で鎌倉より片瀬に行き更に江の島を見る様な想ひがする、而して棧橋が架してあるの迄似て居るが、江の島の様に岩石の山ではない、棧橋の手前に二三軒の休み茶屋がある此所に自動車を預け置き歸りにと直に棧橋の方に出掛けた、棧橋は彌生橋と書いてある。砂濱ではあるが、江の島の様に漁師の漁具もなければ磯臭くもない、俗化もして居ない、棧橋を渡ると砂路を通り間もなく島に行く、其の砂地が殊更貝殻を潰して造りし物の様に赤味を帯び、光線の工合か中に光輝を放つ者がある。熊本中學の旅行生徒が何をして居るのかと近寄りて見れば、此中の光る砂

を手に取りて見て居るのであつた、人工にしては餘り有り過ぎる様な砂だ、砂など詮議しなくともよい、一行は青島へ着いて、神社の建て、ある所へ參り鳥居前で持參の寫真器で中島君がバチリとやる、神社の前には已に種々な見なれぬ樹木計りだ先づ神社に參詣したけれ共、御神體を知らない。神殿は大ならざるも壯嚴で建築も立派だ、一巡してからと境内を出て、右より左へと珍植物のある所を廻り始めた。此の植物には原名だの譯名だの其上此地に原生したのに不關米國原産だの支那原産だのと、學者振つた事が書いてある、私は敢て理屈を並べる積りではないが、書き様もありさうの者だと思つた。行くに隨て蒸發氣の爲めか、變な生々温い暑い様な氣温で風呂の中にでも居る様な感じがした。他の一行の者も同感であると云ふ。南洋の島が日向に飛て氣候と共に來て居るんだと誰れやらが云ふ。適評に違ひない、或は黒沙の關係かも知れないと理學者風の説を立てる者もある。紅かき妙な砂地を踏みながら、奇岩では形容を成さざれ共、鬼の洗濯板見た様な、幾千年も怒濤に洗らわれ、一世紀海に海波が岩を洗つては退き洗つては退きした様に整然と四五尺置位に高低が出來て高さ二尺位平面五尺置き長さ何百間もある岩石で波を造りし様に



なつて居る其の高低も尺度も切つて人工で造りても斯様揃へては出来まいと思われ  
る位。此の奇岩が島を取りまいて居るのである。島を巡ると此島へ南洋や熱帯地方  
の植物を移植して植物園を造つたと云ふても可なりだ。夫が然かも此島に限つて自  
生する細かに記した標札が立て、ある、學生連は、ノートに頻りに記入して教員か  
ら説明を請ふている、然し特別保護天然物として、國家が之を保護して居ると云ふ  
事は結構の事である、此植物の中でピロウは長崎縣南松浦郡有川村字太田郷の沖合  
にある相の島には自生せる密林ありて其繁茂の寫眞を、長崎縣史蹟名勝天然記念物  
調査報告第三號に載せてある、其報告を見ると、ピロウの樹は長崎縣には海岸や島  
に發生して居る事を傳へて居る。此青島に在る植物の種類は百六十餘種あると云ふ  
が、其内で私共も珍奇と思ふ物にして記せば、

植 物 名

- (一) 日桐 (二) 鬼簍蘇鉄 (三) 濱うど (四) だん竹 (五) 芭蕉 (六) 青の熊竹蘭 (原産地は支那)
- (七) 濱萬年青 (八) バイナップ (九) くはずいも (原産地は米國) (十) マニラ麻 (十一) もく橋 (十二) ピロウ。

以上で實に六十七科、百六十餘種なりと云ふ、島を見ながら行くと、草木を押分  
けて這入つた形跡があるから其内に入るとピロウの繁茂せる密林の中で、外の暑さ  
とは温度を異にし、冷涼爽快を覺ゆ此日陰を通りて東北方に出て。例の奇岩の上を  
通り、ピロウ樹の澤山ある堤の上にて客を付込みの寫眞師が居て記念寫眞を是非と  
附纏ふ。一行も止むなく乞ふ儘に撮る事にした、幸ひ島巡りして少しく疲勞もある  
から、此の場所は休憩にもよし、風景も丁度山と海を眺むるに適好の場所柄でもあ  
るので、國への土産にもなり、知らざる者には南洋で撮影したのだとも謂へるだら  
う、などと穉氣を出すのも旅情を慰むるに興があると奮發した。先づ是れて青島見  
物も濟んだから、濱の砂地を踏鳴らし、彌生橋を渡り十加里の松原にて 皇太子殿  
下御野立跡の石碑を見ながら、自働車を預けた茶屋に憩ひ、茶やビヤで咽を濕ほ  
し、歸路に就く、一先づ富士梅にて休息し、旅装を調へ上り門司行午前十時五十四  
分發にて別府に向かつて出發した。

日向の東海岸を汽車の窓から

日向の國と謂へば、何となく故郷の墳墓の地へ墓參に來たやうな心持がする、日

向は我々民族の祖先、天孫臨降の地と謂ひ、舊蹟の見るべき所は到る處にある筈だが如何せん短時日の旅行などで、素通りに汽車の窓より山川を眺めて、僅かに名残を留める迄のことだ、宮崎を發して東南に灘の波濤は、是迄にない太平洋直か着の大浪花から、隨て實に洋々たる物で、濱の松原を透して青海原を見、海岸傳へに汽車は進行し、時折り雜木の茂りたる丘に隠れて海が見へなくなる更に一方の窓より見れば廣漠たる平原で、盛んに農耕をして居る様が、神代ながらの延長かと思ふと彼の山、彼の里、彼の道も、紀元以前に、既に伊弉諾尊時代に日向國は領地であり天照皇大神之皇女 市杵島姬命と素盞鳴尊の六男を取り、生れ給ひしが天津日繼の御子、吾勝尊が皇統を繼ぎ給ひ、中津の猿田彦命、佐賀關の海童命、日向熊曾事勝命三神が協力して、天津日繼の御子を、串日、今の延岡に皇居を造り、二十年の後、日向の笠陝の御前に皇居を遷し、民を治したとなり、笠陝の長田とは、日向東海岸の事である。

故に今汽車の中より此東海岸を眺むれば、紀元前に、民を治めした、君主が此土地に、彼の道に、足跡を印した事を思へば、其當時が偲ばれる事ではないか、其考

證は紀記にも明らかなるが、古墳、御陵、よりも幾多の参考となるべき者もある。天津日繼の御子が、何故に日向に來りたるかと云ふに、古代の歴史は二つに分けて見なければならぬ、其一は出雲系である、出雲系と謂へば第一に素盞鳴尊子孫の外威、大山祇系と共に現今の朝鮮經營に掌らせられて居た次に、天津日繼の御子吾勝尊は、外威に海童系(船を司る海軍)ありて海外に殖民政策を立て航海して海外に發展し、常世の國(現今の瓊州安南地方)に住來し、日向の延岡や、豊後の佐賀關は實に其根據地であつたと云ふ(陵や古墳から出る曲玉管玉の中に交趾支那特産の翡翠の在るのでも考へて見なければならぬ)歴史研究家に大光明の發見は古代支那周の成王の時は吾天孫の即ち日向時代に交通のありしとの事且つ日向朝帝の殖民大臣とも云ふ、思兼命が舟師を卒ひて海外貿易もなし殖民地も開いた事が、周の書物によりて立證せられて來たと云ふに至つては強ち紀記以前の口碑や神話や傳説の無稽とのみ云ふ事は出來ない、少し脱線の様だが日向の東海岸即ち、笠陝の御前長田の邊を、通過する時に私は自分の胸中にある事と地勢地形を見るのであるから順序として、地歴を交へたのである。都農、美々津、などの舊蹟の驛がある、驛に別段是

と云ふ程の事はない、けれ共此邊は實に、神武天皇の御遺跡に就ては、取調べたき所が定めし多からう、夫に風景もよくなり、山水の美もある、日向にて忘る事の出来ない、美々津川の鐵橋にかゝつた、注意して見れば、果して神武天皇御東征發航の遺蹟と書いた木標が建て、ある、美々津川の沿岸より海を眺めた景も頗る絶佳だ、細脇、富高と行くと茲には、細島と云ふ港があり、東海岸の良港である、大阪より直航の船路だ、門川土々呂と經て南延岡があり、五箇瀬川を渡ると、延岡となる、延岡より五箇瀬川に沿ふて、西に國道があり、熊本へ通じて居る、高千穂の舊蹟へは延岡より十五里で、自働車にて、此舊蹟を尋ねる人は、中々多いと云ふ事だ、先日も長崎より同車した、控訴院檢事、帆高壽一氏は高千穂へ行く事を私共に話された、豊後の歴史家山田大夢先生は、日向に於て、始めて御撰定に相成りたる皇居の地を今の臼杵郡延岡と斷定し、今の地形より考ふるも延岡より五箇瀬川を溯れば、西臼杵郡三井田即ち、知舖郷に達する、知舖に就て、左の古文がある、卜部兼方の著、釋日本紀の日向風土記の遺文。

臼杵郡知舖の郷、天津彦火瓊々杵尊、天の磐座を離れ天の八重雲を排き、稜威の

道別て、日向の高千穂の二峯に天降りませる時天冥漠にして晝夜を別たず、人物道を失ひ、物の色も別め難かりしに、茲に土蜘蛛あり、名をば大鉗小鉗といはる二人奏して曰く、皇孫尊、尊き御手を以て、稻の千穂を差し、粃と爲して投げ散らし玉はゞ、四方晴るゝを得てむとまうしければ、時に大鉗等が奏す所の如く、千稲穂を差し粃と爲して投げ散したまひしに、即ち天は開かれ明りて日月照らし光やきにき、因て高千穂の二上峯と曰ひしを、後の人改めて知舖と名づける、即ち知舖の多氣である。

又た高千穂の多氣とは「慶たき皇居」との意味で、其地は今日の日向の延岡、伊弉諾尊時代には、豊串日根別命の居られた所であつた。

尙ほ天孫降臨としては、鎌倉時代の藤袋と稱する、書物に最初の峯、霧島の峯を天孫降臨としてあるを、後の學者、本居宣長翁なども何の考證もなく書き傳へ、久米博士なども深い研究もなく、歴史に傳へて居るが、現代に到り、鳥居博士の古墳研究や、山田大夢先生、茅原華山先生は、實地踏査考證を詳かにし地理を考へ、鳥居博士の考古學研究を土臺となし、天孫降臨の地は日向延岡であると斷定するに至つ

た、神武天皇は、天孫瓊々杵尊よりは、四代目になる、山田先生の著書、佐賀關史には天孫の始めて日向に入りしは、群臣を師ひ舳舻相啣み日向の東海岸にて、最も安全地帯たる五箇瀬川の流れ口に船を入れ延岡の天嶮を利用して上陸し、一先づ此地に落ち付き、國を治め、民を治しめし、都を遷したと云ふ。

茅原氏は、天孫民族は最も開けた優秀民族で久米博士の謂ふ様に行國の民で往古亞細亞大陸の人類の大移住其一は中央亞細亞から北亞細亞大陸に起れる大潮流、其一は印度洋から南亞細亞の岬角を廻り安南呂宋より朝鮮日本迄進入した民族がある、之を南亞細亞から起れる、一大潮流であると云ふのである、我々大和民族は南種で海洋に出て、多くの民族の中堅となり、上となり、神と爲つた最優等の種族が即ち天孫の御一族では無からうかと云つた。

山田大夢先生は、人類の起源に就ては、亞細亞の最も早く開けた所でも、中央亞細亞にしても、歐洲にしても、神話の様の者で殆んど漠とし居るから断定は、不可能であるが、我日本と云ふ事に就ては、考證の明な時代から説ひて、敢て想像を描き學術の弊に陥り國民的基礎を蝕むやうなことは大に警むべき事であると云ふ、至

言と謂ふべし、何れの國史を見ても、上古の歴史は暗國時代に屬する者である。

古事記には、猿田彦命の建築に御遷都に就て、筑紫日向の高千穂の串觸が峰を撰定せらるべき事を奏したとある。

世人の誤解は、高千穂の串觸峰を、今の霧島山と解して居るが、霧島山は、高千穂とも串觸とも云ふ異名のある筈がない。

又た古墳研究者とし著名なる坪井正五郎博士は、明治三十二年中九州へ出張し、其研究の結果によれば日向の國兒湯郡以南には、大和民族に特種なる遺跡の存在を認めずと報告して居る、去れば大隅は勿論薩摩も、皇孫天降には縁のない者である以上の如く諸家の説に因ても、天孫降臨の地は、始め大洋を航し、五箇瀬川の吐け口より延岡に上陸した事は疑ふ餘地はない、即ち延岡より高千穂、延岡より今の宮崎神宮のある東海岸に沿ふたる邊は、天孫民族發祥の遺蹟である、近頃古代歴史の研究は各縣にて研究し居れば、今迄の歴史の爲めの歴史に修正を加へる事も出来やう餘り横道にて暇取り旅行記を取り異へた様であるが、矢張り汽車の中である、此邊は車中で睡りながら、夢を見たのだと、御諒察を乞ふて置き、延岡の町を見た、

人氣の好い質朴の所だと云ひ、又た美人の産地で有名だと云ふ、今後日向に遊ぶ事もあらば、延岡で少し遊んで、見よう、延岡を越すと山岳重疊の間にいり、墜道を抜け、山道を通り、可愛岳の麓を西北に北川八戸を経て豊後の重岡に着す、可愛岳は南洲翁の立てこもり重岡は山の中でも鳥渡とした町だ、是より汽車は東北に向ひ佐伯驛に至ると風景絶佳で、海崎津久見邊は海に點々とした小島あり、波靜かに碧海に沿ふて、人家あり眞帆片帆入江に艦を押すもあり風光明眉だ、屋根の蒼き方聊か支那式に見ゆるも優美である、臼杵で大分乗客が増し、中に軍人や愛國婦人會の連中が多かつた中に軍人と肥滿せる僧侶でもあるかと思ふ様な人品卑しからざる人と頻りに學問上の話をして居る、時々佐賀關の話が耳に入る、勿論佐賀關は臼杵より東に突出して居る所が地藏崎及佐賀關となる、豊後に於ては神代よりの舊蹟で、伊豫の佐田岬と、一葦對水海上六里だと云ふ魚舟が常に往復して居る位だと云ふ、是が豊豫海峽で、要塞地帯になつて居る、今對話して居る軍人は、此所の司令官であるそらな、對話して居る人は佐賀關に就て講話して居る様だから私も耳を傾けて聽いて居ると益興がある、其内に軍人と婦人連は下車した、私は土地の情况でも聞かんと話を持

ちかけ、名刺を出すと、先方で早速交換して呉れた、見れば僧侶でも神官でもない山田宇吉とある大分縣別府市在住の者だ、後に別府に着き、龜の井旅館の主人に山田宇吉氏を問ふたら、土地の富豪で隠れたる大分縣志士だと云ふ事が判つた、山田氏號を大夢と謂ひ、豊後日向に於ける上古史現代史に通じ造詣最も深く、先生の著書佐賀關史及數種の著書がある、大學教授や徳富蘇峯なども往來し、歴史研究家とし重きをなして居ると云ふ。

私と日向談を始めた、考證と謂ひ調査と謂ひ眞の専門家だ、私の名刺を見てか、直に上毛に於ける古代史を提げ談戰をいどむ、素より好きの事として應戦したが、吾が郷土に於ける事すら先方より説明され、聊か苦戦となる事屢なれ共、應戦是れ曷むと謂ふ様の譯だ、けれ共百年の知己を得たる思ひがした、山田氏は手に佐賀關史を持ちながら談話を續ける、史談に少しも杜撰の所がない、私は佐賀關史は御譲りにはなりませんかと云ふや、是は私の著書ですが、趣味を同しくするに於ては定價を破りて差上げんと云ふ、更に安部宗任と緒方誰榮と稱する著書があるから後刻別府に歸りて贈呈せんと云ふ謹んで謝した。

大分の市は九州東海岸に於ける有力な市街で相當繁榮の市である車窓で一見しても判る、兎に角大分縣廳のある所で、商工業も相當に發展して居るらしい、大分には降ないから語る資格もなし可成有の儘を書きし隨筆を折に觸れ讀んで追憶を喚起することを得ば目的を達するからである」

## 日向雜感

日向灘に面した日向と豊後の一部を見た、地勢は九州の東南で、南に大隅、北に豊後と豊前がある私共は東海岸の大隅へは行かない、九州で一番明るい感じのあるは日向で南は大隅薩摩、西は肥後、北は豊後で、悉く山嶽で境し南北約四十里東西十七八里高原の様な平地だ、東は太平洋の波濤が澎湃とし、海岸を洗つて居る、其所には汐流の關係で、彼の青島の如き珍奇岸に珍草木の自生するに縁がないとも限らない、潮流が東海岸を洗ふのみならず、日向の國は現今でも、原始的でもあるかと思ふ様に悠々たる所が見へる、茅原華山氏は曰く、今日到る所で人口増加で苦んで居るに獨り日向計りは、人口稀薄で、移住者を歓迎して居る、日向は温かき北海道だと云ふて居る。

平坦部も廣く、九州では佐賀久留米熊本の西部と、此地が一番平野である、農耕も開けて居るが、山間部は木材の産出地である、此土地には耕地に苦んでは居ないと聞いて居る。先年武者小路某と云ふ貴公子が理想郷として自然に還り農耕を營むと稱し三角戀愛で新聞紙を賑したのも此地である、前群馬縣知事大芝惣吉氏の縮痲療養の爲め此地に長官として來たのも氣候を撰んだからだと聞いた、暖國其物の様な土地だ、其爲めでもあるまいが、樹木を見ると、如何にもすんなりとした木が多く枝を延し葉が繁茂して、稍高く、櫛でも椶でも樟でも針葉樹でも、五月の末頃には若葉の色も、木各の特色で濃緑もあり、臘脂又は茶が、つた配合がむつくり房々として軟かく、山や丘を蔽ふ状は、關東地方などでは到底見られない、延岡以北より豊後の別府近く迄の海岸は、所々に島が散在したり、入江になつたり、川が流れ込んだりして風光明眉の締まつた風景がある、日向南部の大淀川の流れ入る平原と、日豊の間の趣きとは自然異なり、農家の造りも天然の小高い所に建て、あり家が緑蔭の丘を背にし日を一杯に受けて、住み心持も善さふに見へる。

私は敢て慾を謂ふてはないが、閑人になつたら、氣心の合つた二三人連れて、文

明の利器などを用ひずに草鞋履きか何かで菅笠を冠ひり、握り飯でも持つて日向の海岸長汀白砂の間から、曲浦斷崖を時間に構まわずに、足に任せ、天氣なら歩み雨なら休み、疲れたら泊り、悠々と浮世放れのした旅で、明るい平原に出たり、無理をせずに、延岡邊りの海岸に幾日も逗留して、或時は五箇瀬川に沿ふて十五里の道を舊蹟を探りながら肥後堺に近い、高千穂高原に行き、古蹟の地で、思ふ存分大平洋直か付けの清き空氣を呼吸して見たい。

#### 別府 温泉

今日本で數へきれない程ある、温泉の中で別府は確かに寵兒である、憧れの温泉である。私共は郷土に名高い温泉を持つて居るから、故郷の温泉を誇つて居るに不思議はない筈だが如何に郷里に名温泉があるにもせよ、他を知つて、更に已を知らなければならぬ、由來温泉が如何に善良の質であると謂つても、眞の温泉の効能丈けては、無意味の者だ、温泉地と云ふ者は、古來物理學療法の一つで、病者に因て開發せられたのだ、日本の如く火山脈の連続した地形は恰かも脊柱の様に、細長く北は千島より、南は臺灣迄も連鎖して居る、夫れ故に、處々に活火山が、火を出

し烟りを吐いて居る、其所に必ず温泉が噴出して居る、随つて泉質にも變化がある變化があるから、効驗にも特色のあるのが當然だ。

温泉のある所は火山の噴火で、山嶽が崩れて自然の山岳の形を變へ谷を穿ち、水路の變化が、幾百千年を経て、風雨に晒され山骨を露はし、是れが景色となり、湖沼が出来て益々美化される、故に温泉地は、不便の地に多くあるが、道路を開き交通機關を設けて、便利にし、浴客や遊散客を吸収して居る、便利なりしは文化の賜にて結構には相違ないけれ共、其半面には風俗を悪化して居る事も考へなければならぬ。

別府に就ては定評のある事とて敢て語らない積りだが、當面の事は止むを得ないから、少しく記す事とする。

愈々九州も右より廻りて左に來た、別府は今回旅行のプログラム最後の場所である、同時に解散の場所である、思へば長き旅路に同行五人の内、一人は博多にて分れ、四人が行道を共にした、遊子が茲に解散せねばならぬとなれば、明日よりは右に左に袂を別つ事が如何に感ぜられるか、古人の謂ふ様に旅は道連れ世は情け

情緒纏綿離別の悲しみと云ふ程でもなければ、何となく妙に考へられる、けれ共宿に着いてから緩々談合する事に決めた、宮崎を出てしより、八時間餘を汽車に揺られ、別府に着いたのは、夕刻六時を過ぎて居た、一行も別府と聞いて元氣付き、銘々手荷物を提げ改札口に出れば、降車する者が過半数である、自働車を呼び、龜の井旅館迄賃銀を問ふに、八十錢なりと云ふ、案外安いと、乗り込み、龜の井旅館の玄關に着いた、賃銀が安いと思ふたら、目と鼻の間だもの、土地不案内の者は斯様な、滑稽の事がまゝあり勝なことだ。

そこで案内せられる儘に、大食堂の東三階で二間通した、見晴らしの好い座敷で浴場も化粧室も近くに在り、衛生的に設備も善く、凡てに行き届いて、頗る氣持が宜い、其内に支配人が挨拶に來りて、先刻御四人様の電報が二本届き、着時間が判明せざる爲めお迎にも出せず甚だ失禮致しましたと、詫事を謂て陳謝した、最も他の四人の客と云ふのは、一行の中島君が依頼を受けた大阪の人で龜の井へ言傳も頼まれて居たとて何か話して居た、私は久しく顔も剃らないから、藤波老と共に、理髮床に行き、奇麗になつて、旅館に還へた、別府に兎も角落ち付いて旅程も考へ、

先づ一段落と聊か安神の傾きも出た。

長の旅路も温泉に緩くり浸りなば疲も治るであらうし滞在も出来やうと、此所よりは、汽船で大阪へも行かれるし、更に豊後の名所舊蹟を尋ねてから門司へも近い、至極便利の地だから、家郷へ無事到着を打電する事にした、いざ一風呂浴みて体を清め食堂に行き晚餐の卓を圍む中に祝盃を擧るもあり、晚餐を終りてから、宿に依頼し土産物を買ひ家郷へ送り、太田中島兩氏と共に外出し、別府の景況を探るも一興と、彼所此處と散歩して見るに、別府の町割は、中々井然とし京都の市街の様で賑やかだ、最近市區改正を行ひし者か道幅も廣く家屋の構造も宜い、道の直線は氣持が更に宜い、市中の中央に遊廓もある、御便利の事であらう、私共一行は時間にも猶餘がないのと、平素の人格が然からしめたには相違ないが、遂ひぞ浮いた心の出なかつた事は誠に喜ばしい事だ。

私共が食卓に居るとき、先刻汽車の中にて面會せし大夢山田先生が尋ねて來て呉れた、私丈中座して、先生に會ひ、先刻の無禮を謝し、種々談話を交はし、約束履行て、先生の著書、安部宗任と緒方維榮なる本を持參し、表紙裏に、贈櫻井先生、





嫌になつてしまつた、朝まだき少々曇りて日光の薄きに心配し萬一の時の要心にと雨傘迄用意したが、夫れにも及ぶまいと辭退した、一行は自動車に乗り宿の者に送られて別府の市中を離れ、豊後街道を北へ北へと駛走し、山に入り坂にかゝり里に出て、何里行けば着するのやら、見當も知らずに、郊外を疾走すると、或る宿場へ出た、折から駄馬に遭ふと、馬が驚き飛上るや駆け出すやらて、自動車の速力を止め、馬を静めさせ側道へ入れて貫ひ漸く通過した、其所で運轉手に何故全速力を出すかと問ふたら、耶馬溪迄は往復六十四里ありますから、速力を出さないで復りが夜になると謂はれ始めて里程を知る様な譯だ、夫れに自動車の中にて風を切るの横覆が無いから、其の寒ひ事顔でも手でも切れる様だ、別府を出て、一時間と十分で、古びた町に着いたら、此所が、宇佐の町である、横の參道に行く四ッ角で、自動車は止まつた、降りると車中とは差ひ大分温かになつた、元來暖國の五月末で青葉若葉の茂れる時に、顔や手に覺への無い迄になる筈がない、完く駛走の産物なる事が解かつた、曇りは晴れて、日も昇り温度も高くなつた、茶屋に休み烟草に火を付けながら、今朝は随分寒むかつたと、一行で話して居ると、茶見世の婆さんが酌

んで出す澁茶に咽を濕ほし、御參りして來るから頼むと、婆さん今朝は寒むかつたねと云へば、婆さん變な顔をして、呆けられるとても思もたか、寒い所ではありませんと云ふ、運轉手君は曰く、今日の道程は、深耶馬迄行くのですから、速力を充分出さなけりや、還りに日が暮れると又謂ふ、別府から宇佐迄何里あるかね、はい十二里あります、深耶馬迄はと問へば、中津を経て二十里はあると語る、里程を聞いて少しく驚いたが、遠いと謂ふて今更止める譯のものでもなし、すれば往復たつた六十四里かね、何んでもないと謂つたが、内心少しく避易した形もある、待てよ昔の雲助流に難路で遠ひから、賃銀を増せとも、酒手を少々とも申出まい、けれ共一行が驚いた様な顔でもして、若しや先方に悟られ還りは中津で一泊だなどと謂れぬとも限らぬから、推問答は簡單にして、一行打ち揃ひ、參道の入口寄藻川に架せられし、妙な屋根のある橋が見へる、之は吳橋と云ひ、神橋の一つで、鎌倉時代に架設せられた橋だと云ふ。後伏見天皇正安三年、宇佐使、和氣篤成朝臣の歌に

影見れば月も南に寄藻川

くるゝに橋を渡る宮人

斯く残されて居る

石段のある坂を登り西樓門を出づれば、北參道の大門あり、是を北參道と云ふ入口に大鳥居が見へる、參道の左右には形の變つた石燈籠がある宇佐燈籠と云ひ兩側に無數だ、低い木の枝には紙片が結んである、縁結びと謂ひ神社にはよくある者だ矢張り縁結びの神が合祀せられてあるらしい、今少し行くと御影石の鳥居がある、是は歐洲戰亂後に地中海遠征將卒の報賽紀念の奉獻にかゝりしと云ふ、此邊には樹齡千年以上の大木が矗々として立ち、鬱蒼として晝猶ほ闇く、音に聞こゆる小椋山の西麓なので、其邊に皇族下乗の制札があり、西大門外には若宮神社を祀れり、西大門の前には一の鳥居と云ふのがある、此鳥居の創立年月は詳かならざれ共現今の鳥居は、細川家當國を領するに當り本宮殿堂五十餘宇改築の際豊後日出城主木下延俊をして造營せしむと云ふ、鳥居の形式が他に類例の無き無額の鳥居である、兩側は宇佐燈籠が建て併び、攝社が幾つもある、西大門は孝謙天皇天平勝寶二年の創立に係り、現今の西大門は黒田長政氏の領國の際文祿二年家臣毛里太兵衛をして改築せし者なり、故に桃山時代の様式を備へ優雅を以て名あり、此神門の裡に大なる手

洗石に水が満々としてあり、一行は口を嗽ぎ手を清めて虔て參拜す、歸路西中門より宇佐神宮を拜觀すれば其美事なる實に眼を驚かす計りなり、宮殿の外観は幾棟もある、社殿が丹塗檜皮葺にて宇佐特有の八幡造りとぞ稱せり、本殿神座は一座二座三座の御社殿、其奥に三柱の奥の院あり、譽田別尊、比賣大神、大帶姫命、を奉齋すと云ふ、南面すれば勅使門一名不開の御門と稱し、昔より勅使並に奉幣使の參向の節丈け開閉する御神門なりと云ふ、和氣清麿公は此門より參向せしなりと神官は語れり、一行は神職廳舎にて御札と繪葉書を購ひ除かに歸路に向ふ、何と云ふ神々しさてあらうか、小椋山の神苑を遙に望見し山容と樹木鬱蒼たるのを眺めた時歴史にある清麿公の誠忠を考へず居られない。

古歌に

小椋山あけ行く春の霞にも

神代へだてぬ光り見えつゝ

御來歴に就ては書物に記載した者がある故、概略にし、私の知つて居る大社は宇佐を始め箱崎、男山、の三宮である、男山に勸請し奉りしは、清和天皇貞觀二年なり其他何れの國何れの里に至りても八幡宮は祭られてある。武神として源家の尊崇

は特に篤し、源義家の如きは八幡太郎と稱し、源頼朝は、府を鎌倉に開き、鶴ヶ岡に勸請して守護神となせり。

宇佐八幡の寶物も一通り拜觀した、中には國寶が多數あり、刀劍の如き者は、日本の銘刀は悉く集まりたるかと思はるゝ位だ。

詳しく載せたくはあれ共、寶物帖を轉載せねばならなくなり轉載したのも愚の事だ況んや宇佐神宮の御事歴などを、神職應て頒布して居るのを其儘書けば誤りはないが、萬一是れは彼の宇佐八幡で買つた本と少しも異りなく書いたのだと發見せられたら努力して書いた事迄消滅する憂がある。

僅かの時間に拜觀して寶物館を出て、元と來た道に戻り前の茶見世に寄り、少憩の後中津街道を進行し始めた、日も出て溫度も昇りたる爲か、左程寒くもなくなり、さびれた宇佐の町を通り抜け、中津平野を駛走し、其間屢馬に跳ねられ、自動車を止めるので閉口した、野道になると畑や田には麥が熟れ黄ばみかゝる、桑園も所々にあり農夫は桑を切り脊背ひて通るのも見へる、菜種は已に實が入りて青く、苗代田にする所には紫雲英が花盛りだ、國道は平垣で、地味の関係もあらうが、堅い

から、自動車の震動も少ない、ともすれば荷を着けた馬に出遭ふと必ず爆音に驚き跳ね上るのには、運轉手君も閉口して居る。段々日も高くなり太陽の輝も強くなつて來た、遙か先には煙突が見へ煤煙が空に舞ふて居る人家も接近し家數も多くなつて來た。

東の方に海も見へ出し、瓦屋根に日光が反射して市街をなして居るのが中津の町である、町を通ると中々賑やかな活氣のありさうの通りだ、前に見へた煙突は紡績工場である、此町は舊奥平藩十萬石の城下だ、此中津からは日本文化の先覺者福澤諭吉先生の發祥地として知られて居る、此所の公園には先生の獨立自尊の碑が建てゝあり、又た先生の舊宅も町の管理となりて保存してあると云ふ、私共一行の中に頗る古美術を愛玩して居る稟邦先生が、萬一時間が許せるならば非自性寺大雅堂に行き、池野大雅の眞蹟を見學して見たいと云ふが、御最もの事である。

耶馬溪へは此の中津町から山國川に沿ふて西に入るのであるが、觀光客の爲めに中津から輕便鐵道があり、福岡縣の方からは山國川を峽んで松江驛より耶馬溪へ往ける様に同じく輕便鐵道が出來て、一の名所へ北からでも南からでも往けて便利の

事だ、私共の一行は、中津町の中程より西へ里道を行くと二里も三里も進んだが、未だに山坡もない田畑のある田舎道だ、耶馬溪は天下に名高いから、山を越へ谷を渡り往く事と思ふた、夫れらしい所が見へない、實に平凡の田野だ、其内に川がある、川の兩岸が見へ出した、崖は樹木が茂つて居る、中には山骨の露出して居る所もある、低い所には畑があり草葺屋根の農家も散在して居る、一體山手の村落へ行くとよく斯んな川邊があるもんだ、別段眺望が良いと云ふてもなし普通一片の所だと思つて、敢て氣にも留めない、又川があり崖があり先に見た所よりは、崖が高くなり其後方に山が連続して來た、崖の模様も幾分岩石が混入して見える、山なれて居る私共には少しも景でも、奇でもない、今に耶馬溪へ行けば、風景の良い所があるらうと心に期して居たら、運轉手君曰く、耶馬溪に這入りましたと云ふ、是から段々風景が良くなるとのこと。

× × × × × × × × × ×

### 耶馬溪大觀

耶馬溪は天下の奇觀なりと誰が謂ひし。山陽賴先生は、曾て耶馬溪に遊んで、之

を繪にし、詩文に化して天下に紹介した、耶馬溪をして今日の盛名を中外に發揚した、大恩人である、若し夫れ深山幽谷や斷崖絶壁に、不審儀と思わるゝ所に橋でも塔でもあらば、殆んど弘法大師に縁因を付けてゐる、是れも弘法大師の徳である。耶馬溪は深山でも幽谷でもない。故に弘法大師に開發せられなくもよいのだ、耶馬溪は現在の地勢から見ても、如何に考へても弘法大師を御頼みする程不便の土地ではない、概して謂へば、文人墨客が瓢でも提げて悠々と風月を楽しみながら、天然を友とし書題や詩材を得るに恰好の地である。

山陽外史は多趣味多方面の人であると同時に近代の大經世家である、大文豪である、而して一面識見の高い人である、風流も解して居る、經濟も知つて居た、今日て謂ふなら無冠の帝王を以て氣取て居たであらう、故に耶馬溪に遊んで、文墨を以て世人に紹介した迄だが、先生は廣告的に文章を書いたのでは無からう、先生の才筆で縦横に書いた文を見て、其文に引摺られたのだ、文の徳も偉なるかな。

豊後で名高きものは、宇佐の八幡、耶馬溪の勝、別府の湯であると謂ひたい、先年支那の前總理靳雲鵬來り耶馬溪を見て、赤壁に彷彿たる大景で活粉本だと激賞し

たとて土地の者は誇つて居る、蓋し當にはならない。

× × × × ×

私共は關東て妙義の奇岩や、榛名の景勝も見て居る、利根川淵岸吾妻、鐮、碓氷の諸川、武州、荒川、野州の大谷、箒川等の沿岸と此耶馬溪を比較する譯ではないが、川の兩岸の景色を聯想して見ると、自から各の特色を以て居る、故に耶馬溪を採勝して直に甲乙を論ずると云ふ事は、避けなければならぬ、成程奇岩丈を提げて、妙義山は彼の耶馬溪に數等上だと云ふ論者は、妙義特有の者を以て行くから、彼に勝ると云ふのである、若し耶馬溪の流れが有るかと云へば、答へは出来ないではないか、榛名や、甲州御嶽、荒川の上流、大谷川の上流、其他日本には奇岩と流れ、海と奇岩、山と海、絶壁と瀧と云つた様に、其の趣を異した物と無理に比較する必要はない、耶馬溪にある一部分の比較なら、川の流れでは日光の大谷川の様急端奔流碧潭と岩を咬むと云ふ様な凄味はない、岩でも山でも同じ意味だ。

耶馬溪という名が支那じみて聞こえるが、其名が漢詩の様だからとて、兀兀して居る譯でもない、耶馬溪の他と聊か異なる感じのする點は、凡てがやさしくて軟か

い感じが、他の溪流とは異なり、例えば山國川と琴川の落合ふ所でも、激流岩を咬み渦巻き返し飛沫は白雪を散すが如しというた形容は、此耶馬溪には決してない。只だふんわりと當つて靜かに巻き返す工合が如何にも柔和で女性的である所に、一種いうべからざる風流味がある、それも私の考へては此耶馬溪は、高低の差が寔に少ない、急坂とか逆落しとかいう所がないからではあるまいか、全溪を通じて稍や高低がある位で、他の勝地の様に急の坂を登り降りをする場所が見へない、それが一の因をなして居る。

耶馬溪に流れて居る水は量は豊富だが前にもいう通り高低がないから、緩々と流れ瀬が徐かに音を立てるのみ、一言にしていへば、極く平凡の流れだ、夫れに兩岸が廣くて相迫らず川は汪洋とし伸々と無抵抗式だ、之が四里も五里も續いて、兩岸に絶壁もあれば、山骨も出て態々植えた松や楓の様に生えて景をなし其間には田園や農家もある、兩岸が離れて居から明るい、斯ふいふ風に何里も行くのだから、其内には眞に絶景だと思ふ所も見へ、段々深く入ると、周圍の山が重疊として、新緑の葉が盛り上げたやうに見えて、耶馬溪の長所を失わない、他の溪流にある水瀬の

音高く谷と谷と相接して晝猶闇しとか、巖石が水づいて冷めたい點滴に咽を濕ほすなどといふ所は決してない、見上げる様な數十丈もある奇岩もあるが松が所々配置され、蔦蔓が這ひまわり、其根方には針葉樹の密林がある、こんな巖石の大山のある遙か先には、又た麥畑もあれば村落もあり、農耕に何の差閤へもないと云ふ所に趣きがあるのだ、故に畫題になり繪巻物としても趣味が湧くのだ、斯様にして耶馬溪全體は十三里もあるといふ、山陽先生が今耶馬溪鐵道の終點になりたる、柿坂と云ふ所に來り其邊の風景を圖して其山を記す、筆を擲ち嘆じて曰く嗚呼造物奇怪畫手亦た寫し至らざる者ありと、耶馬溪名所に建札がしてあり、之を山陽の投筆岩と云ふ、私も注意し案内せらる儘に見たが、耶馬溪の中には此位の景は數々ある事と思ふに、此奇岩に愕き書き得ないといふて筆を投げたのではあるまい、實は何所迄探勝しても、果しが付かないから此邊で見切を付けて、止めにしたのではあるまいか、深耶馬溪は奥迄、柿坂よりは尙ほ四里ある、柿坂から稍や南に入り一里計りの間何の景も見へない、道の兩岸は山ばかり一里も行と人家があり、山の手の田舎と思へば宜いのである、駄馬が通ると思ふと、子守をした少女が遊んで居る、平凡さ

が徹底して、此先へ行くのも厭になる、平凡の中に突然といふ様に轉化して、今度は妙義式の奇巖が、往來端から直ぐ前に現れ出した、けれ共、耶馬溪の様には水の流れが伴ない、完く妙義式で而かも雄大だ、此所を紅葉谿と謂ひ、鹿鳴館といふ茶屋旅館がある、自動車は是れて行き止りだ、是より先は、馬が徒歩かて行くので、私共の一行は鹿鳴館に寄り休憩して晝食する事とした。

鹿鳴館には簡単な展望樓が出来ていて、客に深耶馬の絶景を居ながら眺める様に便ならしむ一行も登りて、館主より紅葉谿の八景を説明せられた、是を一眼八景といふ。

一、鳶巢山 二、芝石山 三、七福岩 四、一ツ家 五、和歌ノ山 六、烏帽子岩 七、人形岩 八、群猿山

右の説明が済むと、館主は樓を降り、一行は残りて、中島君の撮影があり、設けの席に入りて晝食をなす、少憩の後深瀬橋方面へ徒歩にて行くと、峽はますます迫り幽玄閑寂、さながら仙境に遊ぶの感あり、蓋し深耶馬の絶勝である、深耶馬の後に『美し谷』といふ所は、本溪に優る大景があり、内務省天然紀念物調査委員國分

犀東氏が溪中第一の勝だと激賞したといふ、鴨良付近に 皇太子殿下及各宮方の御觀光御休憩所跡が、石に刻まれて残されて居る、此先見るべき景は幾何でもあるが到底見盡せるものでもなし、鹿鳴館へ引き返した、すると館の子息らしい若者が、寫真機を持ち來り紀念の爲めに撮影せよと頻りに慫慂するに依り撮る事にした、私は此鹿鳴館に深山の風蘭と石こく蘭が賣物としてあるのを見付け、趣味深い宅の老翁に土産にせんと稟邦氏に計つたら同意を得て共に求め荷造りを依頼し別府より鐵道便にて送る事とした、此の深耶馬に約二時間も足を止め、探勝を咨にし、少々滿腹の氣味もある風景の滿腹とは少しく變だが、彼の山陽外史が筆を投げたのも強ち筆に書き盡せないといふのと同様に見盡せないからだ、耶馬溪の入口より十何里自動車に揺られながら、間斷なしに眼を廻轉しながら眺めた故、最早擲ちたくなる、還りに見る所も尋ねる所も残して置たから此位で引上げやう、時に太田稟邦君今更求めた蘭は關東には餘りないよ、之は豊後の奥山が産地で木のうる又は岩根の嶮岨の處にありて採取には命懸けだと聞いているから貴い物だ、國への土産には恰適の贈りものを得たのだ稟邦先生も感心して聞いて居た。

午後の二時過ぎ歸路耶馬溪の見直した、名所を記せば。

深瀬谷舊舞出橋より筆岩を望む景は谷深く遙に廣い山中に筆を立た様に岩が幾つも直立し居るあり此谷に深瀬橋が架してある。

たこの畑と云ふ所は奇岩計りて見渡す限り續いて岩の下方古木の森林で岩石の工合は妙義式である。

深瀬谷新紅葉谷は溪流と岩と楓樹が多い秋の眺が惚ばれてならない。

念佛橋、此の橋の上に立ち溪谷を眺むると、斷崖絶壁數十丈古樹鬱蒼の間に溪の流れが鳴號碎激奔下する狀實に凄絶として橋を渡る者皆戰慄、覺へず念佛を唱ふと云ふ。

耶馬溪に三飛といふ名所あり。

猿飛、念佛橋より河畔を少し行くと、巖壁の間に溪流逆激急湍より深淵に落下する狀は壯絶奇觀。

兎飛は三飛の一にて、兩岸廣く岩石の多くが平圓で川の水は江の流れとても謂ひたい様の平和の景だ、江を距て、遠山を望む真に一幅の南畫だ。



柿坂より津民口を望む景も棄て難い、山は遠く開けて明るい、岩石もあるが此所は寧ろ山又山を連続的に見るの景である。

山陽投筆を再び見ると、突兀たる岩の上に老松二三本立ち老樹其圍りを取り巻き其の下に緩々たる流れが浪穩かに池でもあるかと疑はれ夫れが清冽て河中の石も透視して居るのだ。

三保母の瀧、瀧と謂へば數十丈の高さから滔々轟々耳も聾する日光の華嚴の瀧を想像すると、大ひに失望する、三保の瀧は耶馬溪だから川幅の廣い緩流が、河床に併列して居る大石の上より落ちる瀬位の者ではあるが、平凡の中に非凡の所があり飽く迄耶馬溪式を失わない、山陽先生が再遊の歸途末廣雲華と馱樽の酔を取りし所で、平碧泉の上より低い瀑泉落下して淺淵をなす所である。

五龍の瀧、鶴坂より一丁餘の所にあり、岩礁嶮兀として五條の瀬戸をなす、瀑泉飛沫して壯觀を極め泉下は廣漠として水漫々たり流螢の名所であるといふ。

犬走り、耶馬溪三飛の一にして、青の洞門より數丁溪流を遡り琴川の本溪と會する所にあり、河中に奇石磚居して一側の空洞、天然の橋をなす、洞邊飛湍雪を噴き

壯觀を極む。

之等の山靈水伯秀麗の勝景に送迎せられながら、青村に到り、耶馬橋畔にて降り休憩所にて紀念葉書を出し茶見世で、小野櫻山先生閑居の地を尋ねたら、耶馬橋の手前を右に數丁にて達すると聞き、河畔を少しく行くと、耶馬溪保存會、旅館山國屋、來青舎が道の西にあり、河を渡り蕭洒たる門口に耶馬溪文庫といふ、草庵がある、之が尋ねる小野櫻山先生の草廬だ、前に山國川を控へ後に耶馬の斷崖を背ひ、庭を廣く取り櫻や楓を植え、庭を縫うて奥まりたる精舎の前に到り、稟邦先生は舊知の間柄故他の一行を待せ置き、在否を質し、私共を呼ぶ、今文庫にありし先生に斯く告げたるより、匆々書屋に來り、稟邦先生は久瀾を序し、今回の舉を告げ、互に健康を祝し合ひし後、私共の一行にも遠來の勞を慰し閑談數刻、茶を頂き、廣くもなき、庵より風光を賞して居ると、稟邦先生は、大雅堂の半折を手提の中より取り出し、小野先生に批評を乞ふて居た、櫻山先生は此月の末頃或る人の依頼を受け南清より北清地方へ遊歴する豫定の由を語る、今幸に遭ふ、何等の奇遇かと、側の見る眼も喜悅の程が偲ばれてならない、其内に漸くの事て獨力文庫も出來したから

是非見て呉れといふに、時間がないから否むと謂ふも失禮と、導かるゝまゝに文庫に入り拜見す、古今の書籍が充陳してあり、櫻山先生は語て曰く私も老齡に達し、子孫はなし、紀念業績として、文庫を建設せりといふ、更に耶馬溪保存會も起し、耶馬溪には是迄に數萬の櫻を植えたが費用に苦むと、御説御最もの次第である、和田『豊治』が死んだので當惑したといふ、世の金持ちは當にならないと語る、夫れは多くは黨人だから駄目だといふ、山本(達雄)にも箕浦(勝人)にも相談はして置いたがねと、不安らしくいふ『小野櫻山先生と朋友の間柄だと聞く』彼様な談話の後ち一行の者に、自著の櫻老遊草と孝經の折本を頒布して呉れた、孝教は中江藤樹先生國譯會田文甫校正訓釋、蓋し孝教一本を藏せしめて修養せよと云ふ意味ならん。

先生は隠れたる學者にして、南畫を好み往年上毛の地に遊歴し、書畫の氣品高く頗る脱俗して、君子の風あり、當時稟邦氏と舊交あり、今に書簡の往復ありと云ふ歳七旬を超へ鑠鑠壯者の如し、近く外遊せんとす、其意氣憶ふべし、世の風塵を避け、耶馬溪文庫を修め、更に、耶馬溪詩集を編輯し、耶馬溪の保存に専念す、眞に一代の高士と稱すべし。

私共の一行は謹て厚意を謝し、庵を辭して門外に出て、溪流に沿ふて羅漢寺に向ふ。

### 羅漢寺

羅漢寺は本溪の名刹にして、羅漢驛から十五町あり、私共は耶馬溪文庫より流れに沿ふて、舊羅漢寺の遺蹟から木の葉隠れに見ゆる羅漢寺の高樓を仰ぎ見ながら、石疊になつた十餘丁の急坂を登ると仁王門に達する、左からの登攀口に不動坂といふのがある、參道の内最も峻峻を極めて居るが、此參道を登らんとすると、茶見世の婆さんが草履をお履きなさい箆をお持ちなさいと、頻りに薦めて居る、是も商賣だたと心にも懸けず登り始めた、靴の者はよいが、生憎此日に限り藤波老は和服で下駄履きである、登り始めは左程でも無いが途中では困難したらしい、段々岩角に取りつき登り行くと、古羅漢一帶の佳景が一眸の裡にあつまつて壯觀言語に絶してゐる、道らしい道もない、其所に杖捨の坂、三廻塔、賽の河原、地藏尊あり恰かも馬頸の上を行くが如く、一步誤れば奈落の底に墜落せんとする難關なり、石梁を行き當ると正面に石像あり、是より左の峻坂を降り石梁の下に出づるを、手のひら返

しといふ、私は石梁の下で未だ登り得ざる藤波老及太田氏に間道を來れと、手招きして呼び入れた、斯様に無理な道を態々名前を付けて通らせるのも、寺の威嚴を示す道具にするとは怪しからんと、上毛の妙義山にある蟹の横這宜しくと云ふ所を通りて大洞窟に出づ、是れを無漏窟と言ひ、釋尊や文珠等の石像及び五百羅漢の石像が安置せられてあり、其前に小湛あり、甘露泉といふ、冷水石罅中より湧き出て四時潤るゝ事なし、其泉味を一掬すれば登山の勞苦を忘るゝの法水なりといふ、寺の小僧は地極廻りを爲されよと呼ばるも、私共一行は夫には及ばずと、直に羅漢寺に到り、一行合掌參拜す、此の難行をして登りたるに其上地獄など見せられてたまる者かと戲言をいふ者もあり、此寺は嶺岸絶壁の上に僅かに柱楹を支へて築かれたる者で、昔公儀賁臨の室たりしといふ、寺寶の内閣浮提金の觀音像は印度より渡來せる徳道仙人と云へる人の残したる者と稱せられ國寶に指定せられて居るそうだが是れ等を見て居ると、耶馬溪宿りをする様になるから切り上げ、先づ寺の庭前より雙眸を放ち古羅漢を始め耶馬の諸峯が中空に浮ぶが如き狀を眺望し、愈下山と極め降口もよく判らないが庫裡の方へ行くと行詰りとなりて便所がある、序に用を達し

て居ると藤波老が後から來た、降口かと言ふから、降り口と思ふて來たら行詰りだから小用を達して居ると答へたら苦笑してゐた、後へ少し戻ると庫裡の間に降り口らしい所が見付かつたから、降ると石段があり今此道を登り來る者もある、是れを登れば樂だつたと呟やく、然し靈山といふ者は難行苦行をする所に有難味があるのだから諦めやうと言ひながら樂々と仁王門の所へ戻つて境内で木魚形に出來てゐる焼物の鐸を買ひ打ち振り鈴々と音をさせて見た、待たせて置いた自働車て青の洞門を通つて洞内を見ながら歸路に向ふ。

### 青の洞門

此の青の洞門は、行きに川を距て、眺め、其時運轉手君が羅漢寺の還りには洞内を通りますと答へた、此洞門競秀峯とは一つの巨岩で、山國川は洞門の下を流れて居る、山容樹態數十丈の絶壁をなした雄大な景で耶馬溪中屈指の奇勝である洞門を出てた所に穿鑿者の紀念碑が建て、ある、往昔越後高田の浪人福原市九郎といふ人剃髮し禪海と稱し、衆生濟度のため三十餘年の努力を拂ひ此墜道を完成せしといふ實に桃園帝の寛延三年八月のことなり、墜道數七、八あり延長二丁餘牖を穿ち光線を

取り高さ一間半幅二間程あり、桃園帝の時は寶延と云ふ年號なし、寛延寶曆である此勝地は乗物より徒歩にて洞内より眺むるも亦絶景たるを失はず、行く時は曾木村より仰望して雄大の景を、還りには洞門の扉より曾木村と山陰一帶の景を觀光す溪壑連接の景とは是等をいふのであらふ。

### 佛阪の奇勝

耶馬溪を通る道端に斷崖削立路傍の巨岩は將に通行人の頭上に落ちんかと怪しまる、是を佛阪の奇岩とはいふなり岸前には溪流の清潭あり。

### 耶馬溪鮎歸り

耶馬溪に入り一番最初に見る景にして、山國川の流れは川幅廣く淺く流れて峭壁より急湍を激碎して、彼の五龍の瀧の様に幾條かになりして深淵に落下す、鮎歸の地名は香魚の急湍を沂る能はざる故、鮎歸りの稱あり。

因に云ふ鮎歸りとは耶馬溪に計りある地名ではない、鮎の沂る川には往々同名を附して居るが、耶馬溪の鮎は弱ひ鮎だ、利根川の鮎なら此位の瀬は喜んで沂るに相違ない、て少しく御國の鮎に加勢して置く、  
 以上は私共の見た丈けの耶馬

溪だが、耶馬溪は之を分別すると。

一、耶馬溪 二、深耶馬溪 三、奥耶馬溪 四、新耶馬溪

以上を綜合した耶馬溪といふ者は實に廣大な景勝を持ちて居る、故に之を精細に探勝するには容易の者ではない、山陽外史ではないが此邊て筆を擲ち嘆息しやう。風景滿腹症を起し眼を驚かした事大變の者だ視神經中樞で嘔交換手が疲れたらう是から自働車で體を揺られ、五臟六腑が急回轉を始め、旅館へ着いたら弱る者が出來やせぬかと案じられた、何にしろ六十四里の強行旅行だ、随分勉強したものだつた。

時に時間を見れば午後四時を過ぎてゐる、運轉手君に別府へ着くのは何時頃かと問ふたら夜の八時頃になりましやうと答へた。

一行四人自働車に飛乗り、山國川にも耶馬の山にも御機嫌ようさよなら、自働車の中で疲れたのか皆無言である、自働車は無心に駛驅を始めた、忽ちの間に中津町に來た、是よりは國道だから道も廣いし平坦で、中津平原をあらん限りの速力を出し目にも止まらぬ駛り方をするから、中島君が早速運轉手に聞いて見た、所が三十

哩の速力と答へた、是れては早い譯だ、けれ共時々駄馬に會ふものだから其の度毎に速力を弱めるし、宿場へ來ると子供等や馬や種々の防害に遭ふので速力も半減するし、橋を渡つたり、曲り角があつたり、其内には、山阪にもかゝるので、全速力を續ける譯にも行かず、日は段々西に去り、宇佐の町に入りし頃は、夕靄に包まれ初めた、街道の名も知らない村落に入り日出といふ町に來た頃は電燈が煌いてゐた此所で自動車にも灯が付いたので、御互に顔も見合ふ事が出来る位の暗さだ、豊岡御越と經て別府に入り、龜の井旅館の玄關に乗り附けた時は八時近かつた、旅館の者の出迎を受け、下車し耶馬溪にて購求せし、風蕪の籠詰は玄關脇に置き、番頭に依頼して、鐵道便で郷里へ送り、設けの座敷に入りて旅装を解き、先づ一服澁茶に咽を濕ほした、眞に眼が回る様だ、文明の利器も斯様に應用すれば遺憾なし、湯に浸りて後浴衣懸けて緩くりした、其内に女中より晚餐の食堂へ案内があつたから打揃ふて好む物で今日の成功を祝した。

耶馬溪行や宇佐八幡參詣の事は今回の擧には數へてなかつた、其れは別府が自由解散の場所であり、解散してから此所に滞在して靈泉に浴し保養を爲すもよし、近

郊に遊散するも勝手といふ事であつたのだ。長の旅路に明暮を共にし謂はゞ一身同體となりて今迄來た關係上一つの問題が起つた、夫れは云ふ迄もなく天下の奇勝である耶馬溪探勝といふ事である、早速相談をした所が、一同喜んで賛成した其結果は前記の通りより以上の好成績を修めお互に感謝し合ふことが出來たのは、九州旅行の掉尾の一振と謂はねばならない。

去りながら随分思ひ切つた強行旅行で、宿へ還つて見れば疲勞も度を越えて居た多くの獲物と交換した産物と見るより外はないけれど靈泉は私共の疲れを醫やして呉れるに相違ない。

茲に改めて明二十四日の進退を相談するに先づ別府より大阪行の汽船で途中山陽道へ上陸する者と直に大阪へ直行する者と二組に相談が出來た、早速其旨を旅館の番頭に明日の行道を通じ便宜を計り呉れる様に依頼したら、番頭の曰く、明二十四日は月曜日で缺航なる報を齎らした、折角良策だと思つて絞り出した策も不幸晝餅に歸し止むを得ず、他に良法を見出し之を實行する事に決し各自就床せんとする時藤波老は腹痛を起し下痢したと聞き、一同心配をしたが服藥して聊か輕快したので

一同も安堵した、何しろ疲れ居る事として忽ち睡眠病に罹つて夜の明くるも知らずに一寝入りだ、藤波老は今朝絶食して少し静養する事となり他の三人は朝餉の膳に向かつた、それより室に戻り下の關發の特急に連絡する汽車の都合を見ると午後三時二十七分發が適當だと云ふ事であるから、午前には地獄巡りを爲す事とし其前に市中見物してからと、病人を女中に依頼し置き、中島太田私と三人で別府にある噴湯の模様を見せて貰ひ、更に公衆浴場も見た、是は社會一般の爲めに出來た無料浴場である、是れて宿へ戻り、地獄行きの自働車を頼みて。

#### 別府温泉より地獄見物

温泉の噴出する所には、地獄は付物の様にあるが、別府の地獄は有名な物で別府へ入湯に行きし者は、よくこの地獄の嘶しをするから、私共も是非見たいと、旅行の始めにもいふてゐた。

今朝は市内にある共同温泉を見て来て、龜の井の主人に聞くと、別府と云ふ所は實に湯の豊富の所で、市中到る所に湧出するから、軒別に湯を以てゐる、此地一帯に湯脈があるので、全く温泉郷の名に背かない、其起源なども神代以來の事ではあ

るが、温泉として知られたのは、明治になつてからである、殊に日清日露の戦役後は長足の進歩で、現在は市制を施く迄に進んだのも、温泉の御蔭だと謂ひうる。

地獄見物の爲めに頼んで置いた自働車が玄關に現らはれたから、後事を女中さんに托し、私共三人で出かけ、鶴見由布連山の麓を指して僅か行くと、小高く見ゆる所に白烟の立昇るのが見えだした、此所は別府公園になつて居て、陸軍療養所や、物産陳列場も、林野の間に高樓の見えるのがそれである、一番始めに自働車の止まつたのは八幡地獄で、舊來の地獄の直ぐ左に、眞新らしく堀つたての三間四方位ある角形の穴があり、其周圍に丸竹で柵を廻らし、見物人をして接近せしめぬ様に注意してある、其前には見物客を逃がさぬ様に、椅子や、テーブルを置いて、見物せしむ、此地獄の茶屋の妻君らしい婦人が茶を持つて来る繪葉書を列べる頗る機敏の者で、只今間歇泉の噴出が始まります、あの音が左様でと言ふ内に高さ二間計り吹き出し湯柱と云ふ程ではないが、手揉み唧筒位の太さに揚り二三分續くと、又元の通り湯氣で濛々として穴内が見へなくなる、此時説明して毎十分間に噴出しますが、一時間立ちますと、五六丈吹揚る大きな噴出が來ますと言ひ、茶の子を持つて來る

紀念繪葉書は如何、間歇泉は他にはありません、甚だ口まめてある、烟草一服して居ると又轟鳴が聞こえて來たが先のと同程度の噴揚だ、私共も折角だから大噴出を見たいと思つて心待ちに居たけれど、三四回同様であるから、此所を立ち舊八幡の方へ、足を向け二三歩行くと轟然と爆音が聞こえたので振り向くと、大間歇泉が湯柱となりて、五間も高く噴揚した、實に壯觀を極む、舊八幡地獄は熱湯の吹き出す所に、灰白色の泥土が沸々泥を跳ね飛ばして居る、是には柵の所に危険と注意してある、其前の小屋に鬼の骨格と稱して偉大な骨格が飾り付觀覽に供して在るが、如何に地獄と名を附したからとて、繪にある鬼に似せて無理に觀せるにも及ぶまい、此骨格を注意して見ると、牛の頭骨を以て頭部顔部を造り、齒は同じく牛の顎骨に移殖し脊柱には馬の骨格を利用し、上膊と肩胛の關節は、解剖學上關節をなさず、肘關節も然り殊に滑稽なるは骨盤である、其他は推して知るべしだ、今日解剖學の素養少しくあるならば、真とらしく製造するがよい、齒を見れば噴き出したくなる、齒は草食雜穀食特有の齒で、絶對肉食をせない物の齒である、草食動物とすれば齒の數が多すぎる、軀幹と四肢の釣り合ひが少しも取れて居ない、先年理科大學の標本

室にて、各種動物の骨格に就て、坪井博士の講話を聞いた事がある、骨格と云ふ物には如何なる動物でも、解剖學の規矩に従はない者は一もない、萬一無理があれば是は奇を好む物が偽作したのだと斷定するといふ事だ。

愚民瞞着の骨に就ては價値なし、鶴見地獄に行く此所は前より設備もよく、遙か登りて行くと高原に出て地獄のある所が廣い樹間から白雲の様に湯氣が立昇り周圍に石垣を設け、文化式の洋館が幾棟かある中に入りて地獄を見物するに、熱泉噴出の量は非常に多く、熱度は二百度以上で鶏卵など二三分にて茹でる事が出来ると云ふ熱泉の噴出する音は物凄く、一大蒸汽機罐の破裂した時のようである鬼に角湯の噴出量地獄中第一と稱す、湯の流れ口を見れば小川を成して澗々と流れてゐる、地獄では染物や、繪葉書や、種々の雜貨を土産に強いるので困まつた。

海地獄は、湯の沼だ、此沼が湯氣が揚がつて居る然し紺碧色をなして池の半面は山となり樹木繁茂して此池と對應し、池と噴出して居る所の間は狭くなり土橋が架して築山へ行かれる、此築山で峻嶺を背景とし紀念寫眞を撮る白雲の如き湯氣の出で居る噴出泉を廻りて、次は坊主地獄へ行く、海地獄より數丁西南にあり小高き所

にさゝやかなる茶屋あり、其れへ行くと女中が、坊主饅頭の蒸したての煙の出てるのを盆に載せて来た、地獄は幾つも見えて来たから此所で腰を懸け澁茶を喫り餘り廣くもない泥池の沸々してゐるのを見ながら休憩して居ると、女中が池の端で柴を一握持ち出し燐寸で火を附けて居る、何をするのかと聞くと、今火を焼くと、池の中一面に湯煙が揚りますからといふ、見て居る内に白煙濛々池が見えなくなる位になつた、不思議の事だ是も特色の一つだと、茶料を置き此次は竈へ行く。

竈地獄は規模小なれ共、他の地獄とは異なり、非常の高熱にて噴出する所は、石室を設け、竈の形をなし、横口に戸を締め猛烈な沸湯が、鳴動して居る、此所の案内者は、主人であるが、湯の性分や性質の説明をなし、泉を乾餾して、亞兒加里分を胃腸薬として賣薬にし、湯氣の猛烈なるのを蒸呂代用として豆を蒸し或は之を利用して正月の餅を搗く迄並べたて効能を説くに妙を得て居る、是れも特色である。

#### 血の池地獄

此地獄は亦た變はつて名の通り、三百坪もある池が、紅殻を解いて入れた池の様だ、此所の女中が種々と説明して、斯様に赤い色は亞酸化鐵でありますと云ひ、泉

源は紅泥無氣味に煮へ立つて白湯氣が濛々とし温度頗る高く、種々な染色用に供し絞り染が出来、泥土では焼物を製して土産物となし、顧客の注意を喚起させるやうに出来てゐるには恐縮した、地獄も是れて終りであるから、賣店で、土産にハンカチーフを買ふた。

地獄も各特色を持ち、其内で何と謂ふても、湯の噴出量最も豊富なるは、鶴見地獄で、庭園的で風景の一番宜いのが海地獄で廣き池は深さの関係であらうが碧綠色で、背面に老松數株池中へ望み、築山の工合もよし場所も高原で、見晴もあり明い氣分のする氣持の宜い所だ、血の池は、名の通りの地獄で他にもあるかは知らねど、類の無い地獄だつた、間歇泉の數十丈噴出する八幡地獄も實に壯觀であり、坊主の地獄で、焼き火に池中が白煙を起し見て居間に濛々と立ち昇り咫尺を辯せずと迄は行くまいが、池が見えなくなる位になる、竈は聊か廣告過ぎて嫌やな感じはするが特色のある事は實際である。

直接泉源に就ては鶴見ヶ嶽、由布ヶ嶽の二峯であらうが、遠因は矢張り阿蘇山の活火山にある事は疑を要せざるべし。



地獄て佛と謂ふが、此地獄の内て佛像の飾つてあるのは無い様だ、其代りに鬼があり、血の池があり、湯釜があり、坊主があるとは面白い例の、紺屋とか、照湯又は海地獄の名の因て来る所にも相當根據があるだらう。

地獄巡りも無事に済むだから、今度は極樂の方へても還らうかと、自働車に乗り元來た道と反對に北の方より東方へ、だら／＼下りに來ると廣漠たる原野に出た、此時車掌君が、此先東南に見ゆる山が、昔し大友宗鄰の居城であつたが黒田孝高に攻められ落城した、此所は其當時の古戰場であると説明す、成程此廣場なら、如何にも古戰場らしいと、語るまゝを記す、此東南の地は、何所を掘ても湯が湧出するので、海岸に近ひ處に新別府として盛んに、新築が出来始めたといふ、古戰場を通りて新別府の廣い道路に出て、別府の泉都に入らんとして西方を眺むれば、鶴見由布其他の連峰が、新緑に包まれて別府を見下し東には別府の港が見へ船舶が出入して中にも、大阪汽船會社の巨船が棧橋に着いたまゝに成つて居る、市中の股賑の所を通り抜け龜の井旅館に戻り、早速藤波老の病狀を問ふ、其後別狀はないが、大分氣持もよく是なら大丈夫だと答へた、私共地獄行一行も氣強くなつた、猶ほ出發迄

には時間もあることなれば篤と静養を薦め、又しても三人が徒歩て海岸へ散歩に出かけ、世界に類例のない別府の砂浴を見物せんと、波止場近くに來て見れば、人家の直ぐ裏手に天幕を張り、干汐時を見て海砂を堀り、木の枕らて其中に仰臥し、顔面以上を出し鋤にて温かき海砂をかけて居る一例に幾人かの男女が、神妙に砂を掛けて貰ひ靜かに仰臥し少時たつと、發汗し顔を眞赤にして居る、見慣れた人には奇とは思はぬであらうが、始めての見物には物珍らしく、砂浴をして居者よりは見物の方が大勢だ、何だか生理にされて居る様で、見物の方が氣まりが悪い、砂浴は老幼男女で、中に嫁さんらしい若い御婦人が、二歳計りの子供を連れ、一緒に堀つた穴に這入らんとするに、子供は驚きか泣き出し困却して居たのもある、妙齡の女子が半襦袢て海濱に立ちすくみて居るのも、此別府でなければ、見られない圖だ砂浴場の側には上り湯といふ様に普通温泉があり、砂浴より、砂の付きし儘其温泉場に來り砂襦袢を脱し、湯に浸り洗ひ去り衣服を着替へ、さつさと出て行く、是れが別府特有の砂風呂といふのであつた。

私は砂風呂と云ふのは、海岸て人家が離れて居て、海岸の砂濱に松原でもあり、



續篇 九州を右より左へ (十)

一七八

別府より門司へ 下の關より大阪へ

五月二十四日午後三時半別府停車場にて、龜の井旅館のものに送られ、豫定の汽車に乗る事となつた、旅行團は已に解散せられ、同じ汽車に乗りながらも、藤波中島の兩君は東京へ直行する事となり、太田君と私は廣島行となる、始め門司へ上陸し今や九州を巡遊せんとする時と、已に巡遊して右より左を廻り、小倉で鐵道線路が一循環し、門司を経て九州を離れるのだと思ふと、感慨無量である、曩に福岡で東山氏に分れ、今藤波中島君と分る、然しながら、九州漫遊には何の支障もなかつた、強いて求むれば、自分の病苦を忍んで追隨した事が、如何に同行の諸友に迷惑でありしかを考へ、深甚の感謝を捧げずには居られない、幸ひ同行の友人は、私に同情を寄せられ、此紀行文が世に存する限り、記念として、永久に傳へたい。

× × × × × × × ×

別府停車場を離れると、別府灣を車窓の右に、鶴見由布二峯を始め他の連山が西

窓に、龜川海岸を進行するのである、海岸を埋めたて、新別府が着々建設せられるといふ、此原野を過ぎると日出驛に着く、日出は昨日耶馬溪の還りに自動車に點燈せし町にて、昔し細川の支藩がありし所、其城趾は今に残りてあると云ふ、此港よりは木材や薪炭を積み出すに便なり。

汽車は野を行き、山に入り杵築驛を通る時は午後四時二十分である、此處より東に突出したる半島に國東行の分岐線あり、國東は政友本黨の元田肇氏出生地であると云ふ。

宇佐は八幡宮で知られて居る驛であり、私共は昨日自動車の便で參詣したから、此驛は見なかつた、柳ヶ瀬より中津地方は一望平野で農耕の盛んな土地である、五時十五分豊前善光寺と云ふ驛に着いた、山國川の鐵橋を渡り、遠淺のある海岸を右に見て行くと、宇の島といふ驛があるが、此驛より耶馬溪に行く、輕便鐵道があり中津より行く鐵道とは耶馬溪にて併行線になつて共に觀光客の便を計つて居る、此附近の農家は茅葺屋根が多く、其屋根棟が關東地方にあるのとは、形式が異なり、棟には葺草を小高く積み、幾所も繩で締めてある、西窓より見れば平野が續いて

耶馬溪に連らなり、東窓よりは海岸に松の見ゆる曲浦長汀が連なり明るい風光て海が開けて眺めが大きい、折から雨模様で少し曇りだしたが、小倉へ着いた頃には晴れて、夕日は紅く海面に輝くのである、小倉は師團もあり船着て隣邦に問題の起りし際は、軍隊出動によく魁を命ぜられる程、地の利を得て居る、過ぐる日此驛を通し福岡方面へ行き、今日は目的を終りて、此驛に来る、私共の一行には、此驛が九州を右より左への始終の結び目になり、實に感慨が深い、此結び目の驛を離れて最終の九州に出た、此所が門司である、時に大正十五年五月二十四日午後七時前三分て日も西山に隠くれ夕靄は四方を塞いで居た、間もなく門司と下の關との海峡を連絡船で、今しがた船は揺れ出した、夕暮れて薄靄ではあるが、未だ暗くなるには間がある、之も五月下旬の日長の御蔭と思はねばならない、私は、岸柳島の方角を知らない、すると、知らぬ婦人の乗合客が、彼方に見える、小さな離れ島が今にも海の水に浚られそうに見ゆるのを指して話合つて居るのが耳に這入つたから、お相伴に見たのでは物足りないから、失禮とは思へ共、傍らから聞いて見た、先方でも別に損のいく事でもなし、直ちに河嚙に教へて呉れた、宮本無三四と佐々木岸柳

の決闘の場所も臆げながら知る事が出来、彼是して居る内に下の關の棧橋へ着いたのである。

手荷物を提げ驛構内へ消えてしまつた、中島君や藤波老の姿迄も消えて、行衛不明になつたのも心細い、日は全く暮れて下の關の驛や驛前は電燈の光が煌いて明るい、兩人の影は更に見へない、太田稟邦氏と私は手荷物を提げ、驛の待合をうろくして居たが、私等の乗る豫定列車は十一時四十分で、之から五時間も待たねばならず、其内待合に居るのも気がさかないから、一先づ驛外で相當の休憩所を見付けようと、二人ふら／＼出れば、宿舍の番頭らしいのが来て、私方へ御休み下さい、直ぐ此前ですからと勧誘する、けれ共特に定めた所はないが、宿引に拉致されるのも気が進まない、驛の左方に四階建の洋館があるのに眼が止まつた、よく見ると山陽ホテルとしてある、山陽ホテルとはよく聞く名だ、太田君に相談すると、一も二もなく同意したから、直ちに荷物を提げて揚々と這入つて、十一時四十分發の京都市迄頼むと云ふと、早速ボーイ君が出て来て、私共の荷物に番號を付け合札を渡され大廣間の休憩室に陣取つた、見渡すと、道がに日本西部の入口に相應はしい、ホテ